多賀城市文化財調査報告書 第22集

山王遺跡

―第8次発掘調査報告書―

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序

多賀城市内における埋蔵文化財の緊急調査は、民間による宅地開発あるいは公共事業等の原因により年々その数を増してきております。特に山王遺跡は市街化への動きが著しい地域でもあります。

さて、この度の発掘調査は宅地造成に先だって実施してまいりましたが、工事関係者のご協力により無事終了の運びとなりました。本書はその成果をまとめたものです。

調査の結果、古墳時代の堰、古代の道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡等の遺構が発見されました。これらの発見は、多賀城周辺の状況を解明する上で大変重要な資料であり、かつ東北の古代史解明の一端に寄与するものと思われます。

本報告書が多くの研究者および関係者のみならず、広く一般の方々に活用され、文化財保護の一助けとなることを願うものであります。

最後に、本遺跡の調査、整理、報告書作成までの間、多くの方々からの協力や助言、指導を得ましたことに心から感謝申し上げる次第であります。

平成２年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター
所　長　斎藤一司

例　　言

1．本書は、共同住宅建設に先立って行った山王遺跡の発掘調査報告書（第８次調査）である。

2．本書の執筆・編集は、当センター職員の協力を得て、相沢清利が担当した。

3．本書中における各遺構の略号は次の通りである。

ＳＢ－掘立柱建物跡、ＳＤ－溝跡、ＳＫ－土坑、ＳＰ－柱穴、ＳＸ－その他

4．本書挿図中の水系レベルは、標高値を示す。

5．調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。

6．本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」(小山・佐原　1976) を使用した。

7．発掘調査及び報告書作成にあたり、東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所の諸氏、斉野裕彦氏(仙台市教育委員会)、広瀬和雄氏（大阪府教育委員会)、山崎純男氏（福岡市教育委員会)、星川清親氏（東北大学農学部)、渡辺泰伸氏（仙台育英学園高等学校）に御教示、御協力を得た。

8．本遺跡出土の鉄滓の分析は川鉄テクノリサーチ株式会社総合検査・分析センター千葉事業所に、杭の樹種同定については嶋倉己三郎氏にそれぞれ依頼した。

9．調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存しているので活用されたい。

調　査　要　項

1．遺跡所在地：宮城県多賀城市山王字東町浦47他

2．調 査 期 間：昭和63年11月14日～平成１年２月４日（西区）

平成１年４月７日～７月29日（東区）

3．調 査 面 積：2,750㎡

4．調査主体者：多賀城市教育委員会　教育長 櫻井　茂男

5．調査担当者：多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　斎藤　一司　　主任研究員　高倉　敏明

研究員　滝口　　卓　　石川　俊英　　技　師　千葉　孝弥　　石本　　敬　　相沢　清利

嘱　託　鈴木　久夫　　滝川ちかこ

6．調査協力者：大和団地株式会社　丸信建設株式会社

7．発掘調査参加者：菊池　　豊　相沢まさ子　赤間かつ子　阿部美智子　小野　玉乃　菅野　恵子

後藤はつみ　末永たみ子　菅原　絹代　鈴木　一郎　武田　りき　千葉　享一　大場　正司　小野寺恵子

加藤　文一　菅野　文夫　木村　梅子　佐々木忠志　掘越のぶ子　松浦　　正　水越　良子　後藤みよ子

渡辺　幹子　加藤　昭一　平山　節子

8．遺物整理参加者：菊池　　豊　佐藤　悦子　斎藤　珠江　山田　紀子　柏倉　霜代　須藤美智子

黒田　啓子　熊谷　純子　沢田　　敦

本 文 目 次

序　文

例言・調査要項

Ⅰ　調査に至る経緯……2

Ⅱ　調査方法と立地と環境……2

Ⅲ　調査方法と経過……2

Ⅳ　調査成果……8

1．古墳時代の遺構と遺物……8

2．古代の遺構と遺物……14

(1)　遺物包含層とその出土遺物……14

(2)　道路跡・側構跡……14

(4)　掘立柱建物跡……23

(4)　井　戸　跡……28

(5)　溝　　跡……34

(6)　土　　坑……37

3．石　製　品……39

4．縄文・弥生土器……41

5．中世以降の遺構と遺物……41

Ⅴ　ま　と　め……45

付編1 山王遺跡出土杭他の樹種同定……51

付編2 山王遺跡出土鉄滓の分析……55

挿図・挿表・写真図版目次

第１図　多賀城市遺跡分布図……1
第２図　調査区位置図……3
第３図　第３・４・８次調査遺構配置略図……6
第４図　建築材実測図……9
第５図　古墳時代木組み遺構平面図断面図……10
第６図　古墳時代木組み遺構立杭配置図……11
第７図　第Ⅱ層出土遺物実測図……12
第８図　木組み遺構出土杭実測図……13
第９図　遺構全体図……15
第10図　遺物包含層・道路側溝跡Ａ期出土遺物 …17
第11図　道路側溝跡・整地層・セクション図…18
第12図　道路側溝跡Ｃ・Ｄ期出土遺物（土師器杯） 21
第13図　道路側溝跡Ｃ・Ｄ期出土遺物（土師器杯・須恵器・緑釉陶器）……22
第14図　道路側溝跡Ｃ・Ｄ期出土遺物（赤焼き土器）24
第15図　道路側溝跡Ｃ・Ｄ期道路上面出土遺物 …25
第16図　ＳＢ388・389実測図……26
第17図　ＳＢ390Ａ・Ｂ実測図 ……27
第18図　ＳＥ392Ａ・Ｂ井戸跡実測図 ……29
第19図　ＳＥ393・394井戸跡実測図……30
第20図　ＳＥ392Ａ・Ｂ井戸跡出土遺物実測図 31
第21図　ＳＥ395Ａ・Ｂ井戸跡実測図 ……32
第22図　井戸跡出土曲物実測図……33
第23図　ＳＥ393・394井戸跡出土遺物実測図…34
第24図　溝跡セクション図……35
第25図　溝跡出土遺物……36
第26図　土坑実測図……38
第27図　石製模造品実測図……39
第28図　石製品実測図（砥石・使用痕加工痕のある礫） 40
第29図　石器（ラウンドスクレイパー）実測図…41
第30図　縄文・弥生土器……42
第31図　中世以降の土坑出土遺物実測図……43

第１表　山王遺跡調査一覧表……5
第２表　古墳時代土器観察表……47
第３表　道路側溝跡Ａ期出土遺物観察表……47
第４表　道路側溝跡Ｃ・Ｄ期出土遺物観察表…47
第５表　井戸跡出土遺物観察表……49
第６表　溝・土坑出土遺物観察表……49
第７表　中世以降の遺構と遺物の概要……50

写真１　西区ＳＸ382道路全景・東区全景空中写真 …63
写真２　東区ＳＸ468南北道路跡・ＳＢ388～391掘立柱建物跡……64
写真３　ＳＸ469古墳時代木組み遺構 ……65
写真４　ＳＸ469ヨシの茎検出状況 ……66
写真５　ＳＥ392Ａ・Ｂ井戸跡 ……67
写真６　ＳＥ393～395井戸跡……68
写真７　土坑・溝跡全景……69
写真８　土坑・溝跡全景……70
写真９　古墳時代の遺物（土師器・石製模造品）71
写真10　道路側溝跡出土遺物（土師器・須恵器） …72
写真11　道路側溝跡出土遺物（赤焼き土器） …73
写真12　ＳＥ392～395井戸跡出土遺物……74
写真３　木製品他……75
写真14　縄文・弥生土器……76
写真15　砥石・使用痕・加工痕のある礫……77

Ⅰ　調査に至る経緯

本調査については、昭和62年９月に当該地を対象とした宅地造成工事が大和団地株式会社より提示されたため、本件開発計画について検討を行った。当該地は山王遺跡の包蔵地内に位置し、さらに西側に隣接する第４次調査でも道路跡・井戸跡等が検出されており、古代の遺構が存在する可能性が十分に考えられた。そこで、申請者と調査日程等の協議を行い、住宅建設予定地の発掘調査について同意が得られたので、本調査を実施したものである。

Ⅱ　山王遺跡の立地と環境

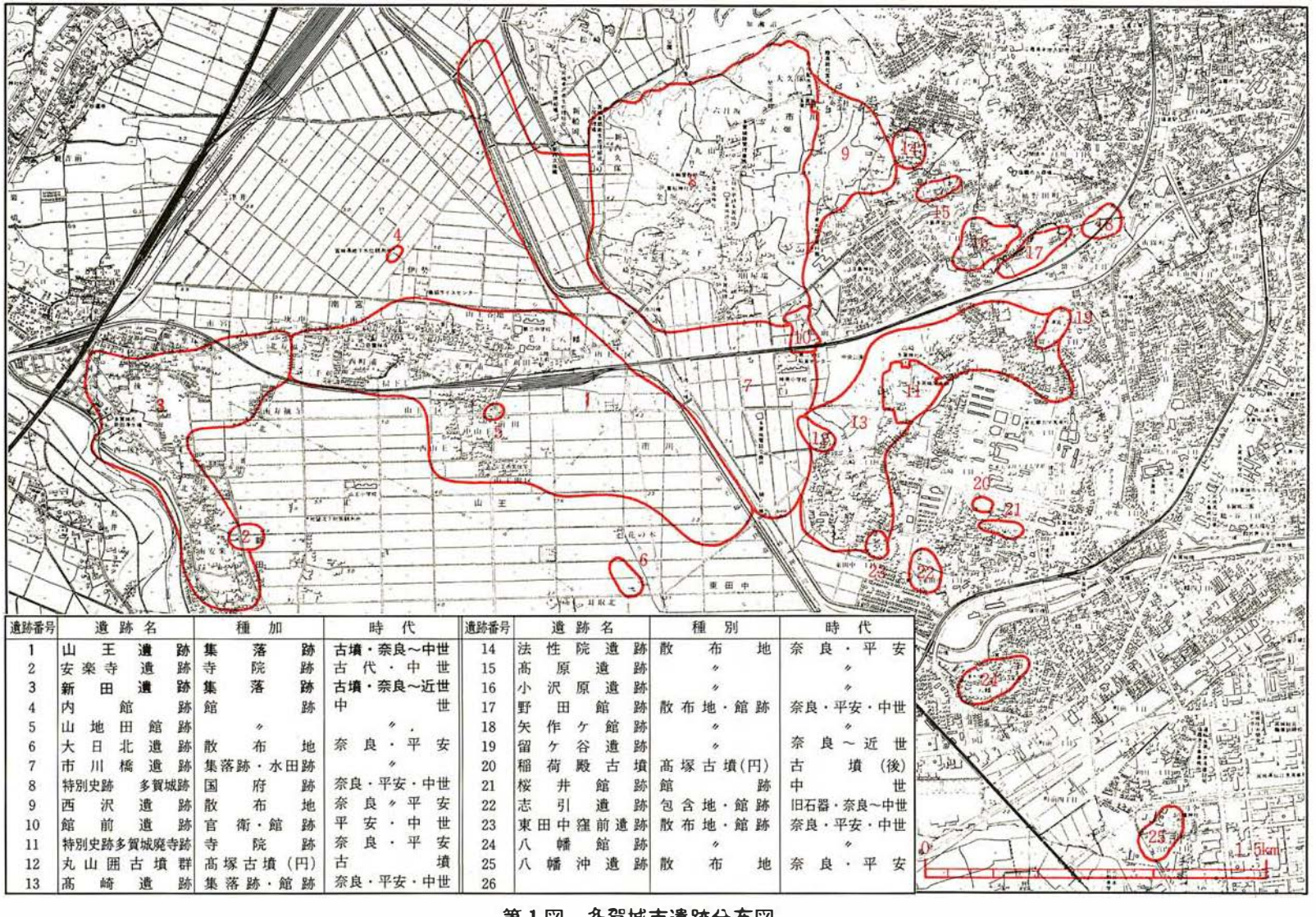
山王遺跡は、多賀城市山王、南宮の両地区を中心とする東西約２Ｋｍ、南北約１Ｋｍの広範囲にわたる遺跡である。本調査地点は旧七北田川と砂押川によって形成された東西に長い自然提防上に立地しており、海抜約５ｍを計る。この周辺の地質については、泥炭・有機質粘土～シルトと砂層の互層から形成される沖積層である。

周辺の遺跡についてみると、本調査地点の北東約1.5Ｋｍの丘陵上に特別史跡多賀城跡が所在している。さらに、この南面地域には市川橋遺跡が所在しており、山王、新田、高崎遺跡とともに、古代多賀城を取り巻く大規模な集落群を構成している。

本遺跡内における過去の調査では、古墳時代～近世までの遺構・遺物が多数検出されている（第１表）。特に古墳時代と奈良・平安時代に注目すべき成果が得られている。古墳時代（中期）に属するものとしては、東町浦、西町浦地区より方形を区画する溝跡、土坑、竪穴住居跡等を発見している。遺物には土器類の他に、臼玉、ガラス玉、コハク玉の玉類や、石製模造品（鏡、剣形）および製作に係る砥石、原石、剝片、未製品などが出土している。また、奈良・平安時代に属するものとしては、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、道路跡、土坑を発見している。遺物には瓦、施釉陶器、墨書土器、円面硯、石帯などが普遍的に出土している。これらの遺構・遺物などから近年多賀城との関連性が強い地域として認識されるようになってきている。

Ⅲ　調査方法と経過

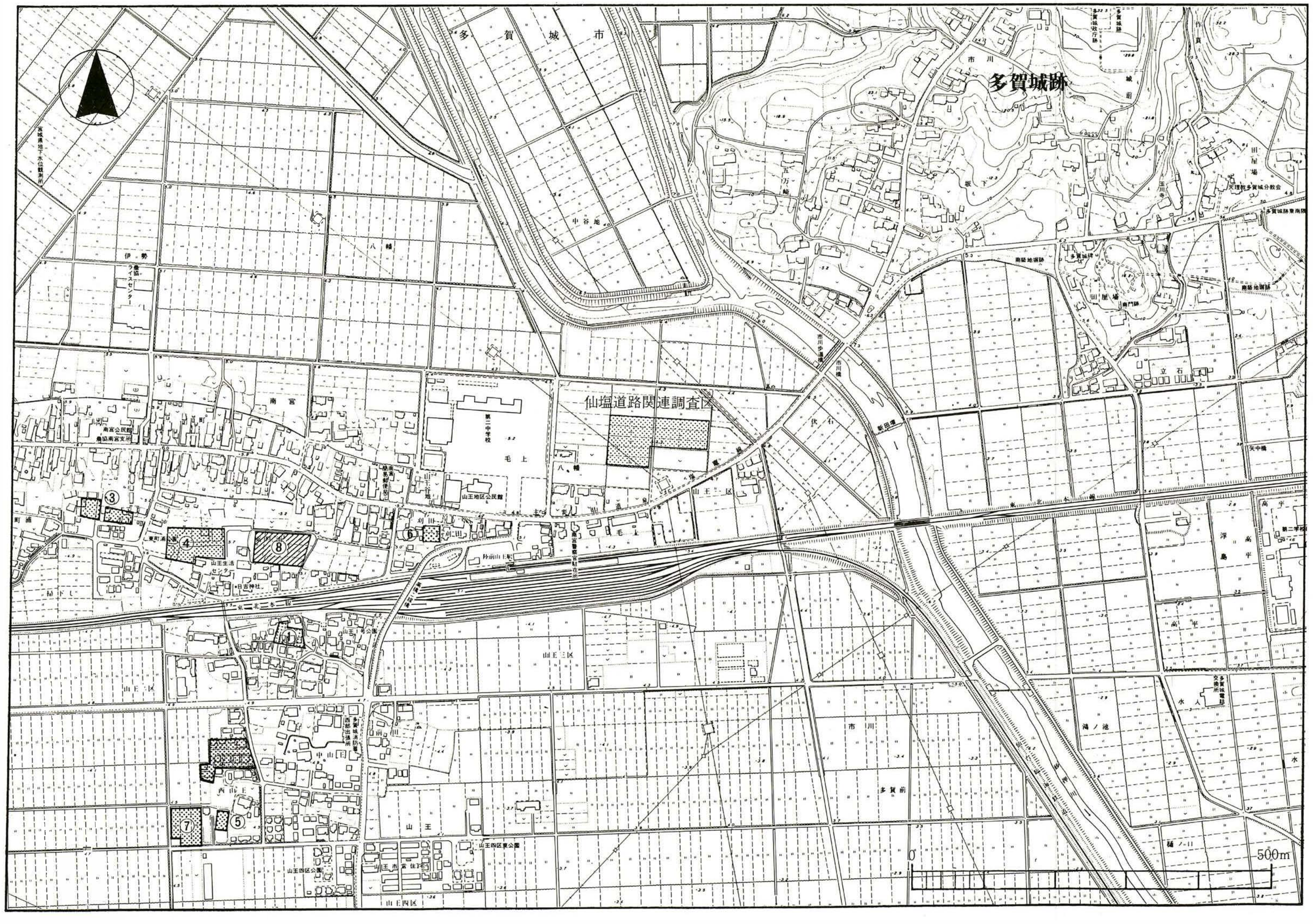
今回の発掘調査は調査日程、排土捨場の関係から前期と後期に分けて調査を実施した。前期分は西区（1,060㎡）を対象とした。調査は昭和63年11月７日より重機による表土剝ぎを開始し、同９日には終了した。またこれと並行して排水溝を兼ねた土層観察用トレンチ（幅50cm、深さ60cm）を周囲に巡らせた。引き続きⅡ層上面での遺構検出作業を調査区北側より行い中世以降と思われる土坑等を検出する。調査区南半では東西方向に延びる溝跡が２条平行していることが確認され、第４次調査で判明していたＳＸ 200道路跡が延びてきているものと推察され



遺跡番号	遺跡名	種加	時代
1	山王遺跡	集落跡	古墳・奈良～中世
2	安楽寺遺跡	寺院跡	古代・中世
3	新田遺跡	集落跡	古墳・奈良～近世
4	内館跡	館跡	中世
5	山地田館跡	〃	〃
6	大日北遺跡	散布地	奈良・平安
7	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	〃
8	特別史跡　多賀城跡	国府跡	奈良・平安・中世
9	西沢遺跡	散布地	奈良〃平安
10	館前遺跡	官衛・館跡	平安・中世
11	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院跡	奈良・平安
12	丸山囲古墳群	高塚古墳（円）	古墳
13	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世

遺跡番号	遺跡名	種別	時代
14	法性院遺跡	散布地	奈良・平安
15	高原遺跡	〃	〃
16	小沢原遺跡	〃	〃
17	野田館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
18	矢作ケ館跡	〃	〃
19	留ケ谷遺跡	〃	奈良～近世
20	稲荷殿古墳	高塚古墳(円)	古墳（後）
21	桜井館跡	館跡	中世
22	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・奈良～中世
23	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
24	八幡館跡	〃	〃
25	八幡沖遺跡	散布地	奈良・平安
26			

第１図　多賀城市遺跡分布図



第２図　調査区位置図

た（11月６日）。以後、古代の井戸跡２基を追加検出し、随時掘り込みを行う。道路跡の調査については、第４次調査での検討により３～４時期の変遷が把握されており、これの検証を目的の一つとした。平面プランの状況、断面観察によりＡ～Ｄ期の４期の変遷が認められ、規模、時期変遷とも第４次調査の見解と基本的には一致をみた。11月29日頃には実測図作成のため遺り方を設定する。遺り方の基準点は国家座標のＸ：－189.027、Ｙ：＋12.690の地点を原点とした。さらに、３ｍ単位で原点より北側を順にＮ－01、Ｎ－02…、東側をＥ－01、Ｅ－02…と表した。また、これと同様に調査区全域に３ｍ方眼のグリットを設定し、南北方向をアルファベット（Ａ～Ｒ）。東西方向をアラビア数字（０～29）で表した。この間、古墳時代の遺物が古代の遺構検出面となっている第Ⅱ層にめり込んで入っていることがわかり、調査区北東隅に任意にトレンチを設定し下層の調査を古代の調査と平行して実施する。この結果、約１ｍ掘り下げたところで杭列と横木等を検出する。しかし狭いトレンチ調査だったこともあり、本格的な調査は次年度の後期分で実施することにした。

地区番号	年次・地区	調査期間	面　積	遺　構	遺　物
①	第１次（中山王）	54.12.17 ～ 55. 3.22	1,500㎡	掘立柱建物跡 小柱穴、溝跡、土坑	土師器、須恵器、瓦、灰釉陶器、紡錘車、土錘、鉄鋏、刀子、石帯
②	第２次（山王二区）	54.12.20 ～ 55. 1.28	1,000㎡	掘立柱建物跡 竪穴住居跡	土師器、須恵器、瓦
③	第３次（西町浦）	55. 6. 5 ～ 11.30	1,000㎡	掘立柱建物跡 竪穴住居跡 井戸跡、溝跡、小柱穴	土師器、須恵器、赤焼、土器、灰釉陶器、緑釉陶器、砥石
④	第４次（東町浦）	58.10. 3 ～ 59. 3.17	2,300㎡	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土坑、道路跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦
⑤	第５次（山王二区）	60. 5.27 ～ 7. 5	400㎡	柱列跡、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、木製品（曲物容器、盤、斎串、箸状製品、串状製品）
⑥	第６次（千刈田）	60.11.25 ～ 61. 2.14	378㎡	掘立柱建物跡 竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、小柱穴、土坑	土師器、須恵器、赤焼き土器、土製カマド、円盤状土製品、瓦 砥石、二面硯、円面硯、灰釉陶器、木製品（曲物容器、折敷、盤）
⑦	第７次（山王二区）	63. 5.24 ～ 7.26	770㎡	溝跡、土坑	土師器、須恵器、赤焼き土器
⑧	第８次（東町浦）	63.11.14 ～ 1. 2. 4 1. 4. 7 ～ 7.29	2,750㎡	道路跡、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土坑	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁、瓦、硯、土製カマド、木製品（斎串、曲物容器、漆器）、植物遺体

第１表　山王遺跡調査一覧表

このようにして前期分の遺構の掘り込み・写真撮影・実測図作成をすべて終了したのは平成1年2月4日である。この後、2月13日～3月3日まで現地事務所にて遺物水洗い、ネーミング等の遺物整理を行う。

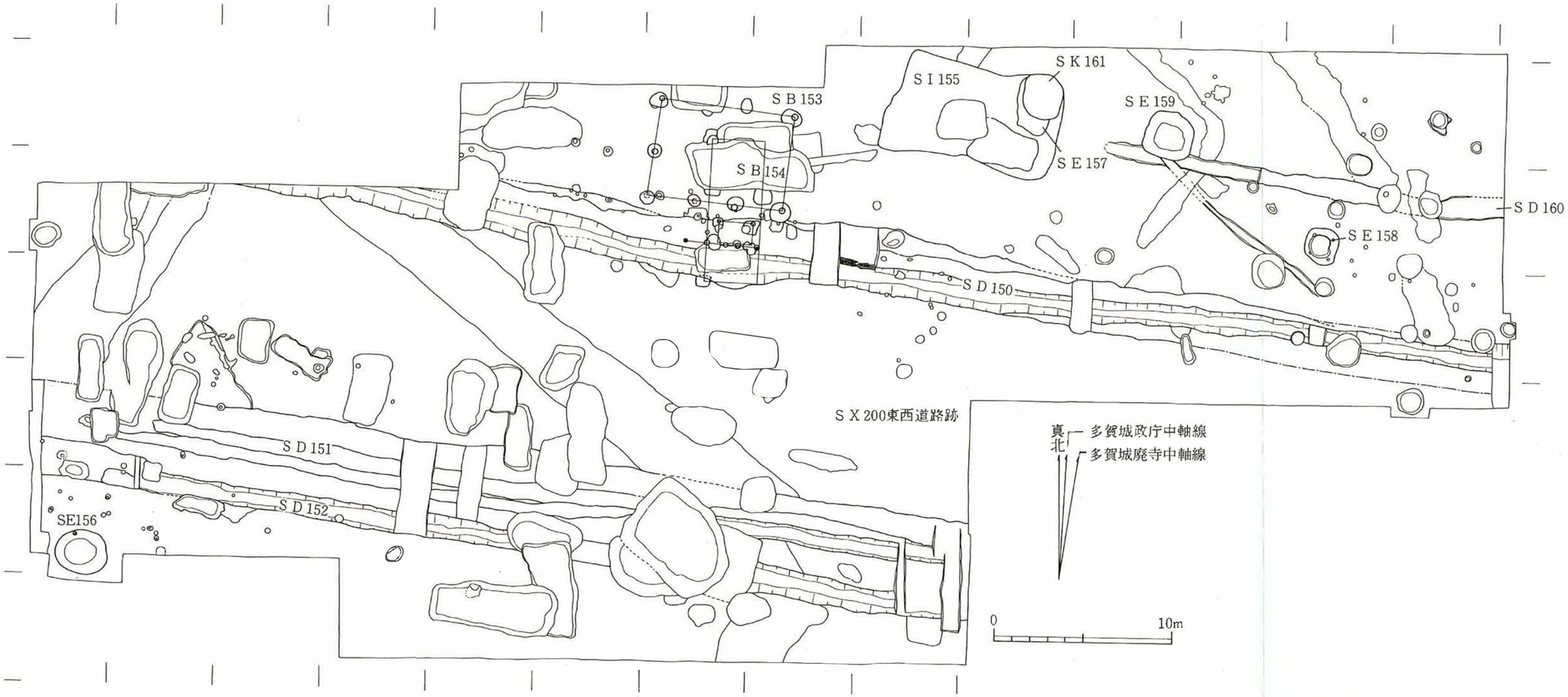
後期分、東区（1,620㎡）の調査は4月7日より開始した。表土掘削による土は西区調査区を埋め戻しに使用する。遺構の構成は4月28日頃までには概略がつかめるようになる。まず、中世以降と思われる土坑がさらに延びてきており、これらの調査を先行する。古代の遺構については、SX 382東西道路跡に接続するSX 468南北道路跡が発見され、さらにその東側には井戸跡、掘立柱建物跡が分布することが知られた。また、西区でも検出していたが道路南側側溝跡の南に隣接し平行して走る溝跡も発見した。古墳時代の調査については、前期分のトレンチを拡張した調査区（17m×14m）を設定した。杭列は弧状に巡り、それに横木と斜材が複雑に組み合わされた形態をとっていることが判明した。この時点の見解としては集落を囲む施設の一部としてとらえていた。このようにして古代と古墳時代の調査は同時並行の形で進めていった。6月下旬頃には古代の道路跡に先行する包含層や溝跡を検出し掘り込みを開始する。古代の遺構については7月中旬には調査をほぼ終了する。調査の一般公開は7月22日に行う。古墳時代の木材は樹種同定資料に使用するために一部採取する。補足調査を行いすべての調査を終了したのは7月29日である。

Ⅳ 調 査 成 果

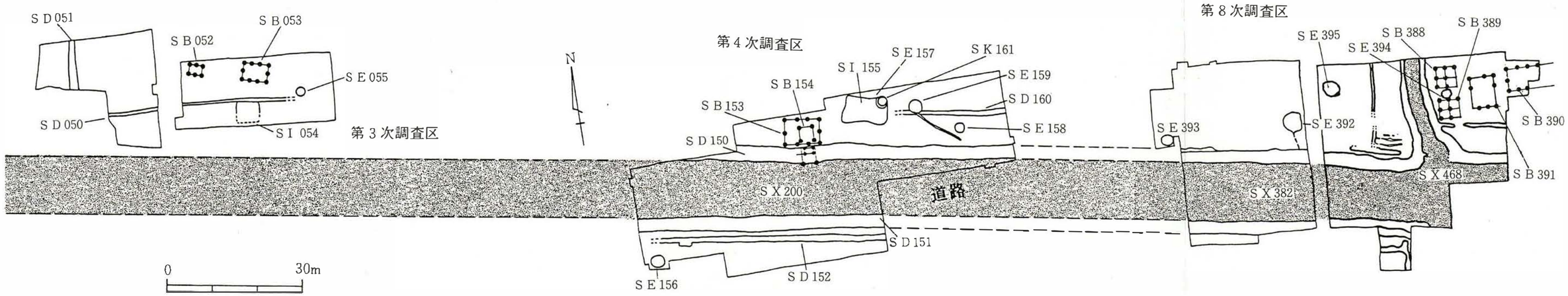
1．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は古代の遺構検出面となっている第Ⅱ層を約1m掘り下げたところで検出した。第Ⅱ層中には縄文・弥生・古墳時代前・中期(塩釜・南小泉式期)の土器が含まれており、古墳時代中期頃にはⅡ層の堆積が終了していたと考えられる。Ⅱ層は基本的に粗砂層で形成されており、有機質土はまったく含まない。堆積のあり方は調査区の広さの関係もあり十分に把握できなかったが、レンズ状に砂層が堆積し、それが幾度となくくり返された様子が観察された。

遺構の構造は、横木・立杭・斜材から構成される木組み遺構とでも呼ぶべきものである。調査区中央に位置し西向きの弧状を描く方位をとる。全長約18m、幅約6mの規模であるが、立杭の列方向よりみると、A～F列とG～J列の二者が認められる。立杭は約1mの幅をもってほぼ垂直に打ち込まれており、先端部を加工しただけの長さ約0.5～1mの丸杭を使用している。杭の長さはA～D列のものが短かく、E～J列が比較的長く、深く打ち込まれていた。打ち込みの間隔はA列が幅約1mと比較的等間隔であるが、他はばらつきがある。横木は約6～7mを計る樹皮の残る丸木を使用し、中には建築材を転用したもの（第4図1）も1例ある。いずれの横木も杭列に沿って検出されているが、調査区中央付近ではその分布は希薄で、長さ3m、径0.7mを計る流木が横たわっている。この木組み遺構の構築方法については、まず立杭を打ち込み、これによって横木を固定する。そしてこの横木間にヨシの茎（註1）を敷き、さらに斜材（枝木）を横木に直交して立て掛けるようにして並べている。ヨシの茎は整然と敷



第４次調査遺構全体図



第３図　第４次調査遺構全体図（上）・第３・４・８次調査遺構配置略図（下）

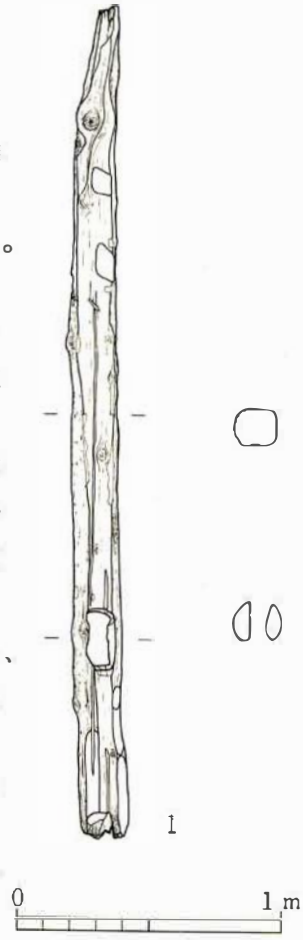
きつめられており、交互に重ねた丁寧な作りの部分も認められる。また、斜材（枝木）の中には径10cm程の丸木杭を打ち込み合掌型をとるようなものもある。横木補強の役割を持つものであろうか。このような形態が連続して一体となっているわけであるが、実際はかなり複雑なものとなっている。

古墳時代の遺物には、土師器、須恵器杯、石製模造品、杭等がある。土師器の器種には高杯・器台・杯・壺・甕がある。

高杯は、杯部外面と体部の境がくびれて段をもち、体部は外反しながら立ち上がるものである（第７図１）。山王遺跡３号遺構分類（註２）の高杯第Ⅲ類に類似する。

杯は、図示できたものが４点ある。平底と丸底のものがある。平底のものは体部が丸味を持って立ち上がり口縁部がほぼ直立するものである（第７図５）。同上分類杯Ⅱ類に類似する。丸底のものには体部が丸味を持って立ち上がり、口縁部で外反するもの（第７図４・８）体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外傾するもの（第７図７）、口縁部が直立気味に内湾するもの（第７図６）がある。第６図４は同上分類杯Ⅳａ類に類似する。

壺は大型と小型とがある。大型のものは、２点あるがいずれも口縁へ頸部にかけての破片である。第７図９は有段口縁のもので内外面とも丁寧にヘラミガキが施される。第７図10は複合口縁を有するもので口唇端部に刻み目が連続して施される。小型のものは２点ある。第７図11は口縁部が体部に較べて長いもので、最大径が口縁部にある。体部は算盤玉型を呈すると思われる。12は体部が球形を呈し、底部は平底である。



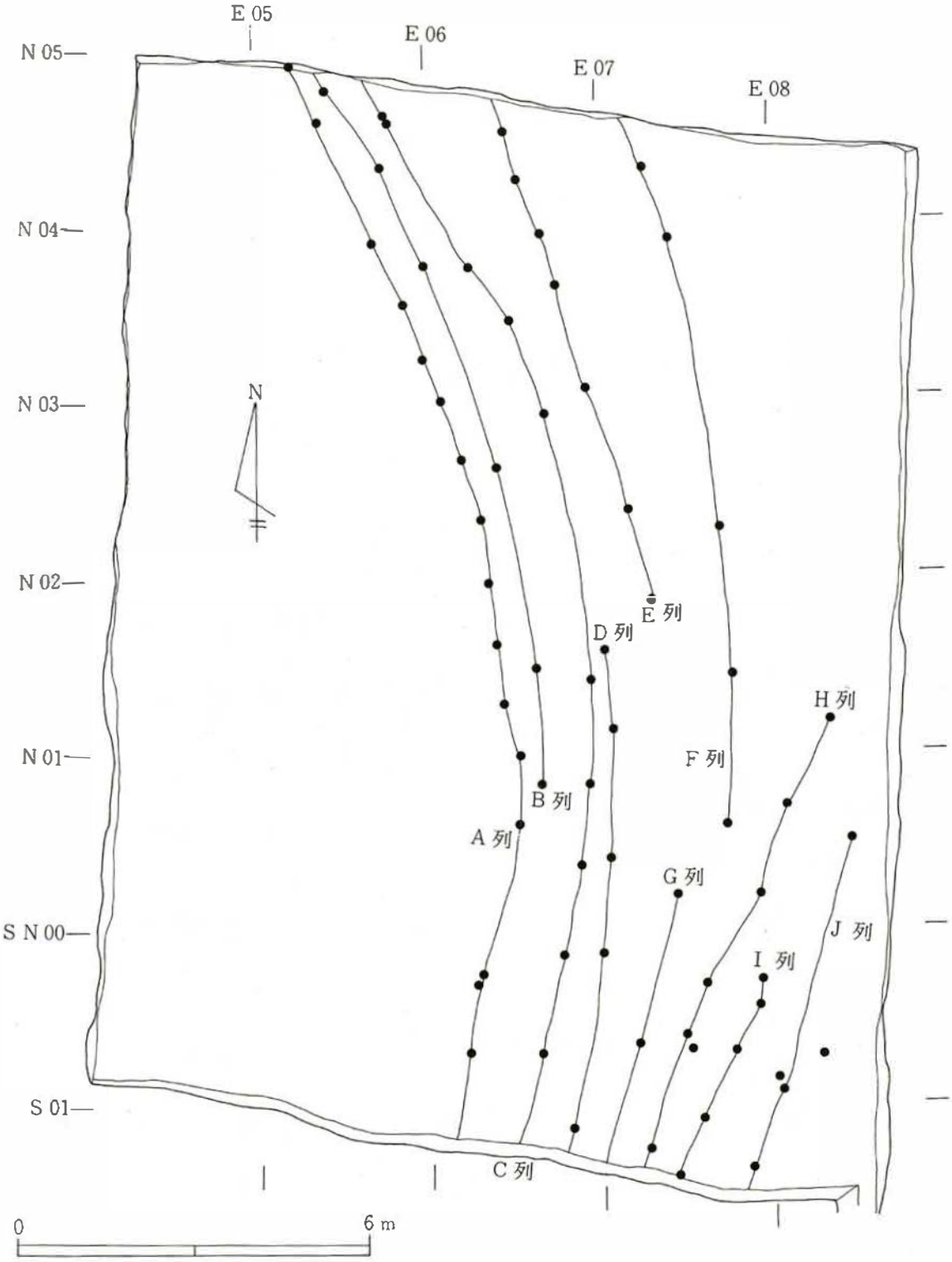
第４図 建築材実測図

須恵器杯は丸底を呈し、体部は半球形に丸味をもって立ち上がり、口縁部で内傾気味におさまる（第７図14）。

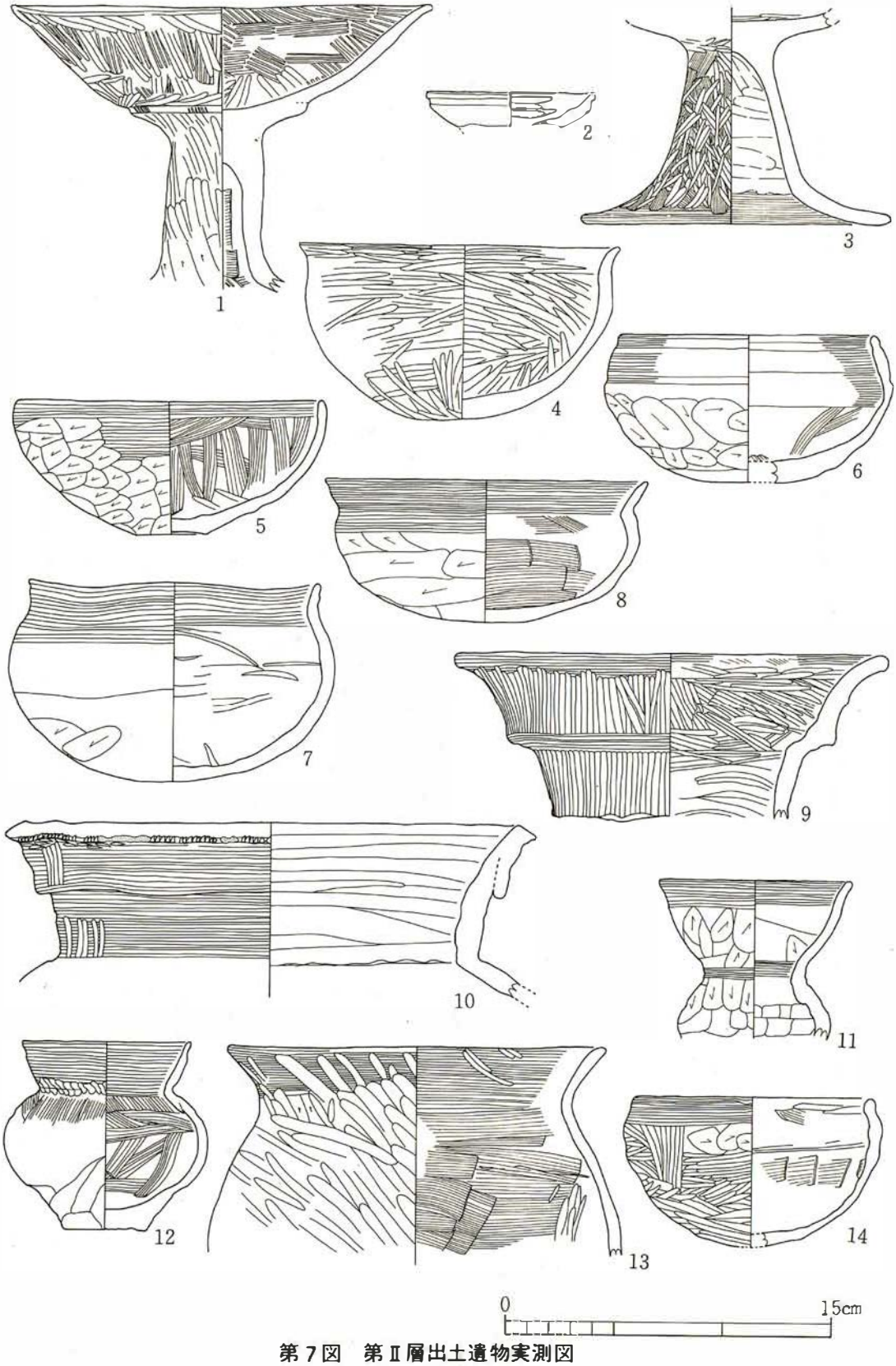
ここで土師器・須恵器の編年的位置について若干まとめておく。土師器高杯・杯はその特徴により山王遺跡第２次調査出土土器に類例を見いだすことができ、年代的にもほぼ同じ頃（南小泉式期）に比定することができる。器台・壺については、塩釜式に比定することができるが蔵王町大橋遺跡の段階まではさかのぼらないであろう。須恵器杯はロクロを使用しておらず、形態、器面調整とも土師器制作の技法を用いている。

第４図１は横木に使用していた建築材である。長さ3.22m、幅16～19cmを計る。丸木材を利用し、四面は面取りされているが加工痕は明瞭でない。臍穴は一端から約60cmのところに10×20cmの大きさで穿れている。

第５図　古墳時代木組み遺構平面図・セクション図



第6図　古墳時代木組み遺構立杭配置図



第７図　第Ⅱ層出土遺物実測図

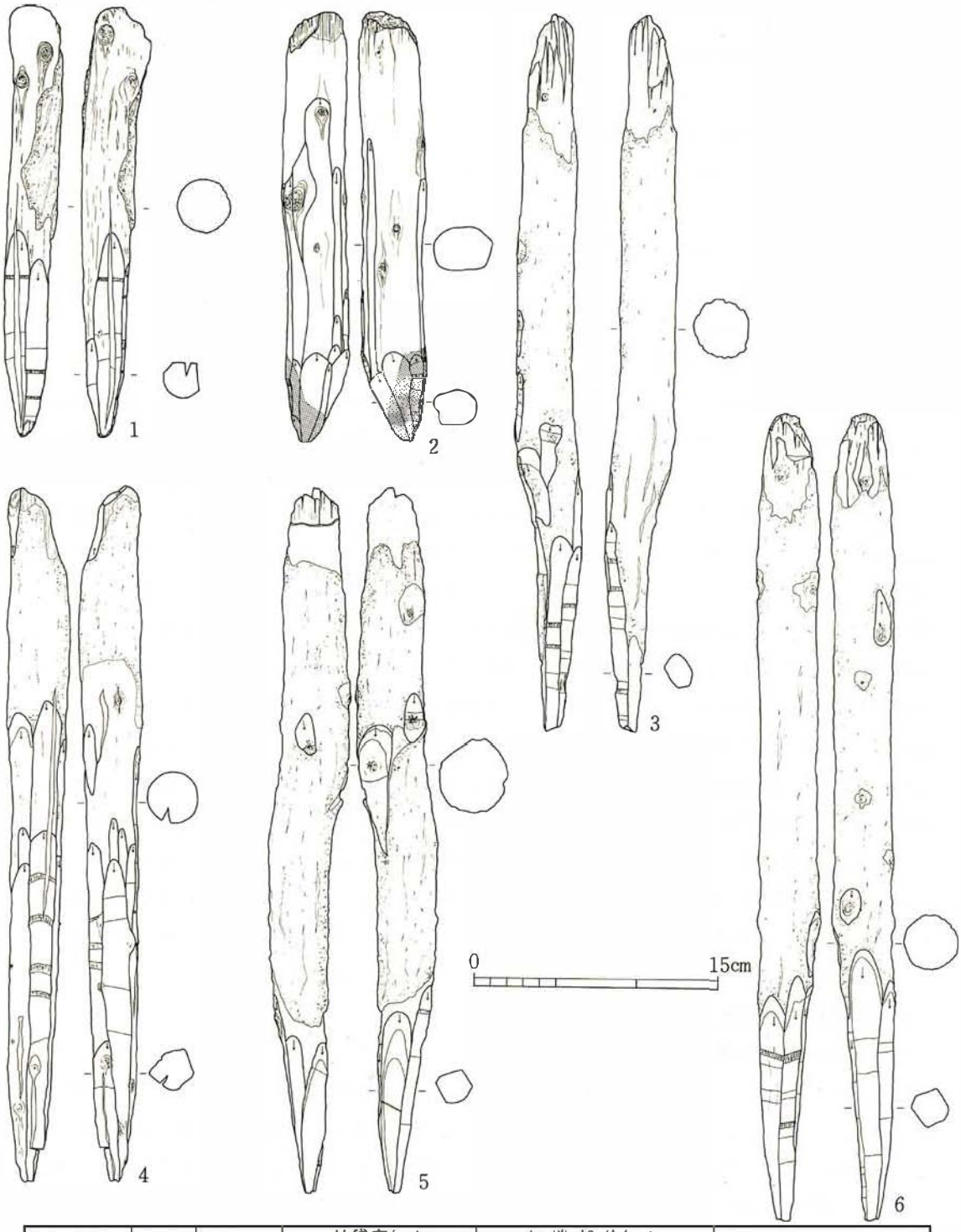


図 No.	杭 No.	素 材	杭残存(cm)			末端部位(cm)		その他
			長さ	幅	長さ	加工回数	加工miの総天到部幅	
第8図1	No.33	丸太材	52.8	7.0	24.5	4	3.2	
第8図2	No. 6	丸太材	51.8	7.7	12.3	17	4.8	末端部に焦痕
第8図3	No. 3	丸太材	87.3	7.4	32.2	9	4.0	
第8図4	No.34	丸太材	84.2	7.7	52.7	16	6.0	
第8図5	No. 5	丸太材	85.3	8.3	25.5	9	3.4	
第8図6	No. 4	丸太材	97.8	7.8	33.●	9	3.5	

第8図　木組み遺構出土杭実測図

2．古代の遺構と遺物

(1) 遺物包含層とその出土遺物

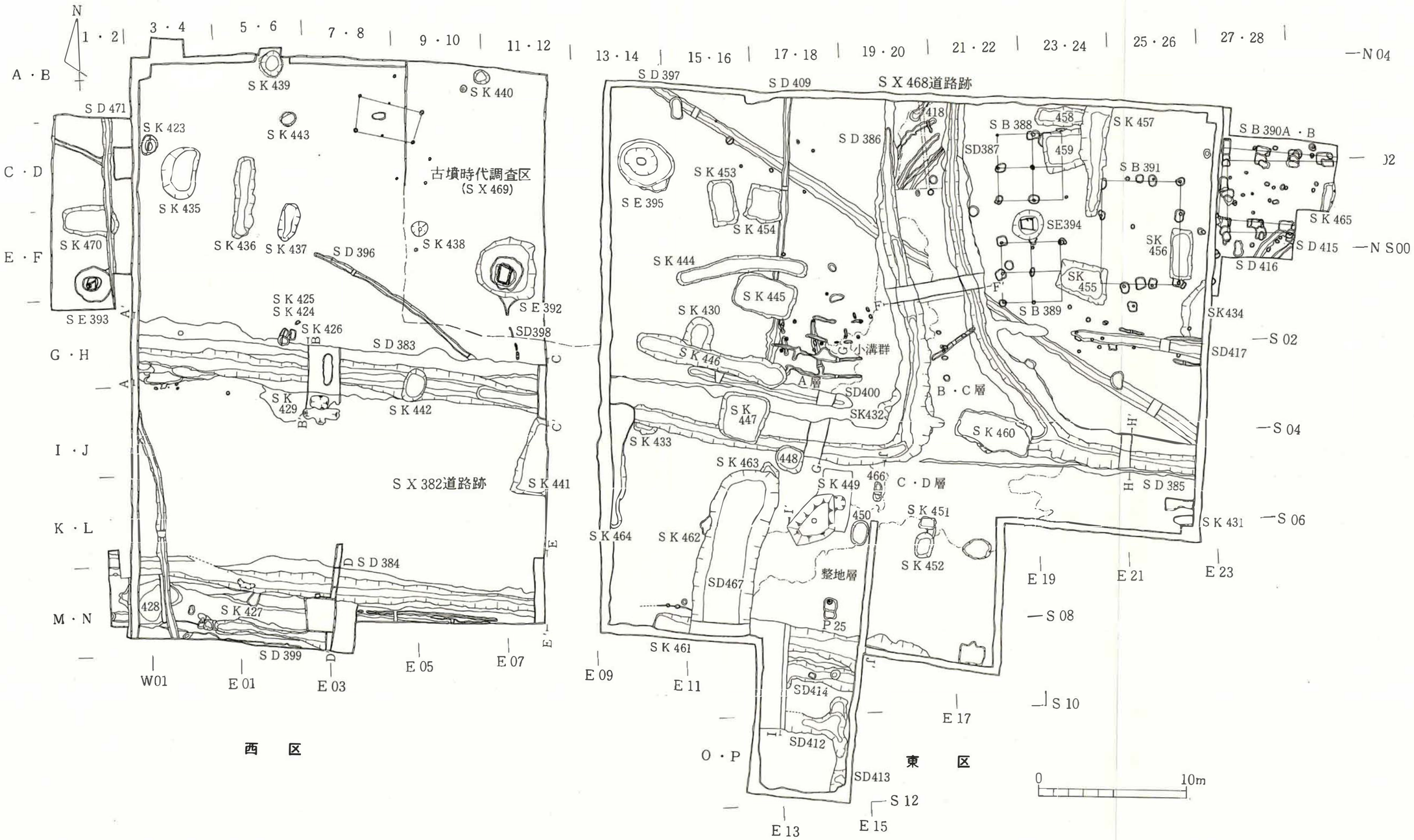
遺物包含層はA～D層の4層が確認された。各層の分布域についてはA層がSD 401～411（小溝群）の周辺で層厚は5～15cmを計る。B層はSX 468道路跡の路面東半分の一帯で、層厚5cmを計る。C層はB層の分布範囲一帯とSX 382道路跡とSX 468道路跡が接続する路面南半に分布する。層厚は10～40cmを計る。D層はC層と同じくSX382 とSX 468の接続する路面南半に分布し、層厚10～20cmを計る。

各層の土色・土質はA層が2.5Y 5/2暗灰黄色シルト層、灰白色火山灰粒を含む。B層が10YR 5/3にぶい黄褐色砂質シルト層、C層が2.5Y 5/2暗灰黄色砂、D層が2.5Y 5/3黄褐色砂である。土質的にはB・C・D層が比較的良く似ており、また層の重なり具合いをみても三者は連続的である。層序については新しい順にA層→道路面整地盛土層→B層→C層→D層となる。

包含層の出土遺物には、A層から平瓦と使用痕のある礫、B層から土師器杯（ロクロ使用・底部回転ヘラケズリ調整のもの）。高台付杯、須恵器杯（底部切り離しがヘラ切りで、再調整が回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリのもの）がある。C層からは土師器杯、須恵器杯・壺・甕が出土している。土師器杯はロクロ未使用のもの（第10図1）である。外面体部に沈線的な段が付くもので、段から下は全体に丸く、体部と底部の境は不明瞭である。内面はヘラミガキが施され黒色処理されている。この他ロクロ未使用の体部に段のない杯も出土している。須恵器杯には底部がヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整のもの（第10図3）がある。D層からは土師器杯・壺・甕、須恵器杯、平瓦が出土している。土師器杯はロクロ未使用の体部破片で体部と底部の境は不明瞭である（第10図2）この他体部外面にゆるい段が付く破片資料もある。甕もロクロ未使用で底部に木葉痕が残る。須恵器杯は底部全面に回転ヘラケズリ調整がなされるものである。第10図5は横斧で柄の基部を残して欠損しているものである。いわゆる袋状鉄斧が着装されており、折り返しの部分が柄の後側になっている。鉄斧には部分的に朱が認められる。柄は丁寧に面取り加工されており、基部と着装部に明瞭な区別は認められない。

(2) 道路跡・側溝跡

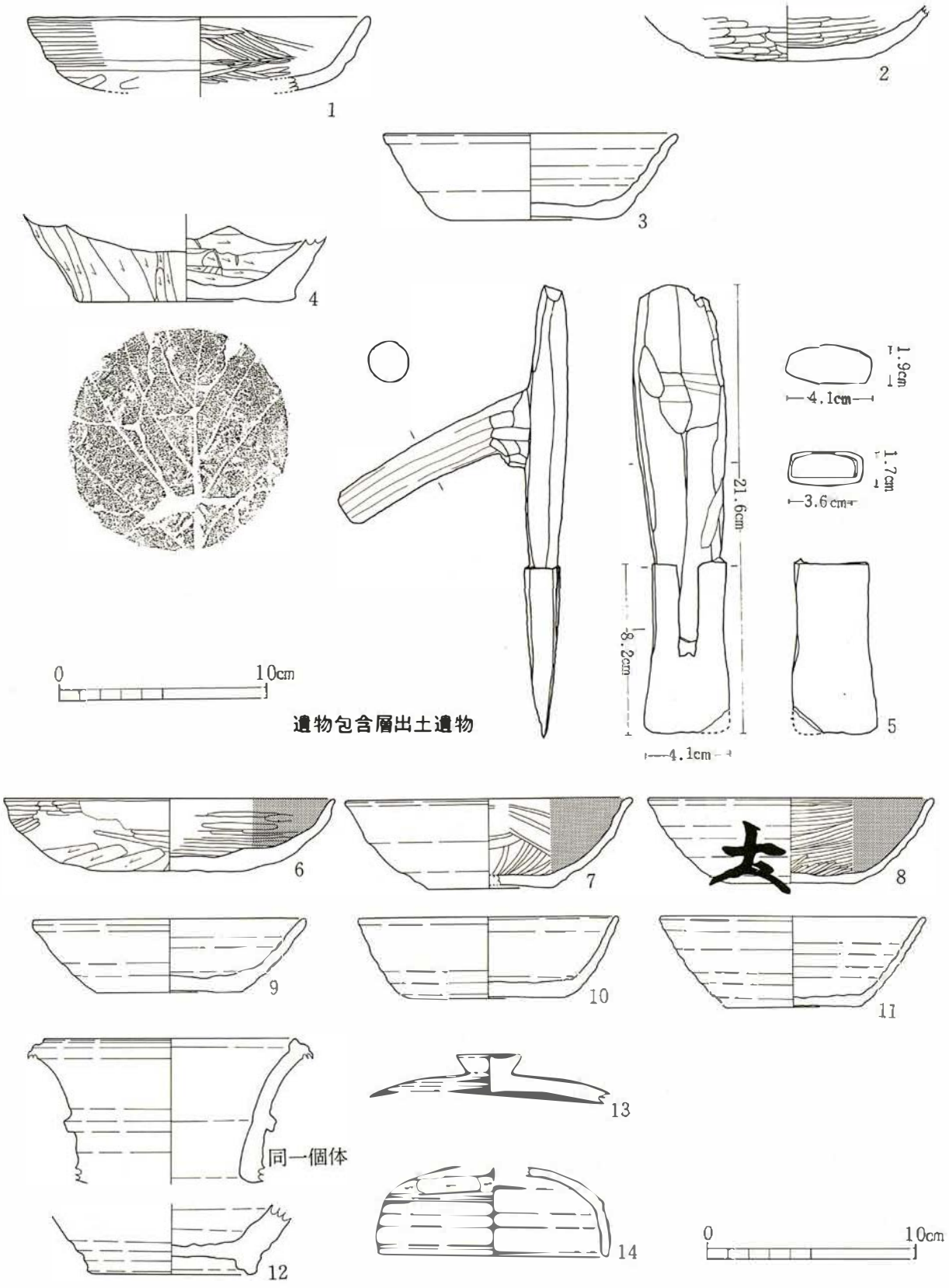
SX 382東西道路跡： 調査区の南寄り、H～O－1～25グリットに位置する。中世以降の土坑・溝に切られている。以下に述べるSD 383・385北側溝、SD 384南側溝の検出および路面整地土の存在により道路跡と判断した。東西両側溝の溝心々間距離（D期）は約13m～14.5m、検出面での路面幅約11～13mを計る。長さは約70mまで検出した。第4次調査区の道路心（X:－189,028.28、Y:＋12.613.34）、本調査区の道路心（X:－189,045.94、Y:＋12,729.82）の2点間から求められる方向はE－8°37′－Sである。SX 468南北道路と交差する付近は残存状況が良く、整地盛土層が認められた。この土層についてはこの上面より掘り込まれている柱穴（SP25）の柱根内部に灰白色火山灰が多量に混入するところから、火山灰降下以前の時期に整地盛土したものと考えられる。側溝との関係ではA期の段階、すなわち道路構築当初のものとみている。



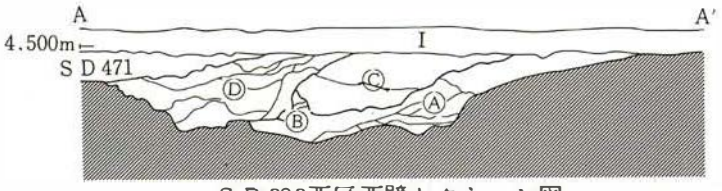
西　区

東　区

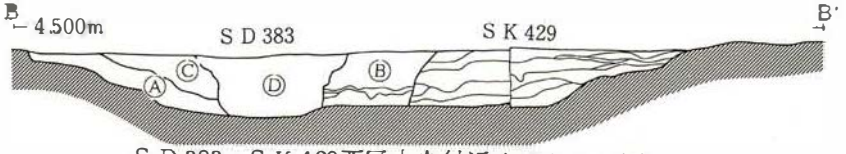
第９図　遺構全体図



第10図　遺物包含層(上)・道路側溝跡Ａ期出土遺物(下)



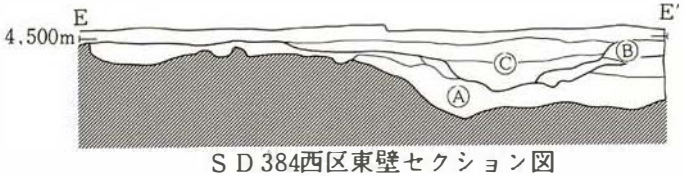
S D 383西区西壁セクション図



S D 383・S K 429西区中央付近セクション図

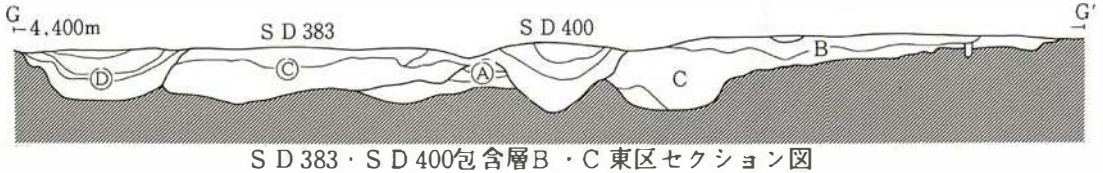
S D 383西区東壁セクション図

S D 384・S D 399西区中央付近セクション図



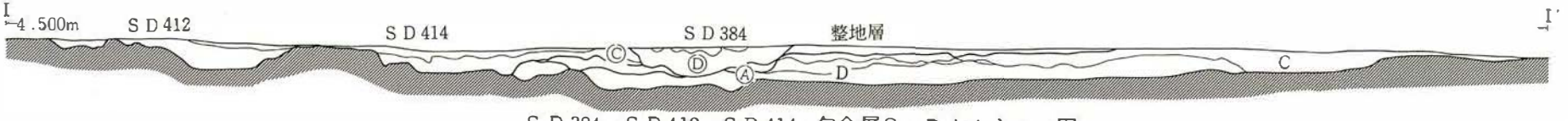
S D 384西区東壁セクション図

S D 386・S D 387包含層B・C東区セクション図



S D 383・S D 400包含層B・C東区セクション図

S D 385東区セクション図



S D 384・S D 412・S D 414・包含層C・Dセクション図

整地層・包含層C・Dセクション図

第11図　道路側溝跡・整地層・遺物包含層セクション図

0　3 m

ＳＤ 383 北側溝跡： 重複関係からＳＫ 442 ・ 424 ・ 447 より古い。溝はＡ～Ｄ期の４期の変遷が認められた。確認できる長さは約51ｍで、ＳＸ 468 南北道路跡西側溝ＳＤ 386 とＬ字型に接続する。全体の規模が判明している最新のＤ期では幅1.3～2.0ｍ、深さ0.4～0.8ｍを計る。Ｃ期は残存状況から推定すると幅２ｍ、深さはＤ期より若干浅いぐらいである。位置は新しくなるにつれて道路側に並行して縮小していく。この傾向は他の側溝跡にも共通して言えることである。埋土はＡ期が砂層（Ⅱ層土）が互層になる自然堆積層で、断面等の観察ではさらに２～３期の小期に分けられる可能性がある。Ｂ期の埋土は一部残存しているところでみると、大別して３層に分けられ下層が砂層、中層が灰白色火山灰の自然堆積層、上層が暗灰黄色粘土層である。Ｃ期は暗灰色系の粘土で、灰白色火山灰粒が混入する。Ａ期は、大別して２層に分けられる。上層は黒褐色系の粘土、下層が灰色系の粘土である。以上の各期の埋土状況は他の側溝跡のそれとほぼ共通している。

ＳＤ 384 南側溝跡： 重複関係からＳＤ 467 ・ＳＫ 461 より古い。溝は他の側溝と同様に４期の変遷が認められた。確認できる長さは約54ｍで、比較的残存状況の良いＣ期では幅１～1.5ｍ、深さ15～40cmを計る。西区ではＢ期の埋土が南側に隣接するＳＤ 399 Ｂ溝状遺構、ＳＫ 428 にオーバーフローしている様子が観察された。

ＳＤ 385 北側溝跡： 重複関係からＳＫ 460 よりも古く、ＳＤ 397 より新しい。溝は４時期の変遷が認められた。確認できる長さは約11ｍで、ＳＸ 468 南北道路跡東側溝ＳＤ 387 と接続する。またＳＫ 460 に壊されており明確にとらえることはできなかったが、ＳＤ 383 と接続していた可能性もある。規模はＤ期で、幅１～1.5ｍ、深さ0.5ｍを計る。

ＳＸ 468 南北道路跡： 調査区の東寄り、Ｃ～Ｊ －19～21グリットに位置する。ＳＫ 460 ・Ｐ19と重複しておりこれらより古い。なお、Ｈ～Ｉ －19～21グリットで検出した小溝跡、ピット群については埋土、遺物の特徴から道路機能時のものと考えている。以下に述べるＳＤ 386 西側溝・ＳＤ 387 東側溝の検出、およびＳＸ 382 道路跡との連続性から道路跡と判断した。
南北両側溝の溝心々間距離（Ｄ期）は約4.5ｍ、検出面での路面幅約3.2～3.5ｍを計るが、ＳＸ 382 との接続部分では約7.5ｍと幅広くなる。長さは約24ｍまで検出した。方向についてはやや蛇行するため明確には示せないが、座標の北に対して若干東に振れる程度でおさまるものと見られる。

ＳＤ 386 西側溝跡： ＳＤ 397 と重複しておりこれより新しい。溝はＡ・Ｃ～Ｄ期の３期の変遷が認められた。Ｂ期については確認していないが、ＳＫ 432 がこの期に伴うものと考えている。確認できる長さは約24ｍで、ＳＸ 382 道路跡北側溝ＳＤ 383 と接続する。規模はＤ期で幅1.2～1.5ｍ、深さ約0.4ｍを計る。

ＳＤ 387 東側溝跡： ＳＫ 460 と重複しておりこれより古い。溝はＡ～Ｄ期の４期の変遷が認められた。確認できる長さは約22ｍで、やや開きながらＳＤ 385 と接続する。また、Ｃ期にはＳＤ 417 と接続することを確認した。規模はＤ期で幅0.6～0.9ｍ、深さ0.25～0.4ｍ、Ｃ期で幅1.5～2.5ｍ、深さ0.4ｍを計る。

〈出土遺物〉

ここで取り上げる遺物は、側溝跡出土のもの、路面上面出土のもの、整地盛上層出土のものである。各側溝跡については、前述のとおり4期の変遷があり、埋土の特徴にも共通性が認められた。したがってここでは、各側溝跡出土遺物をA～D期にまとめて記述していくことにする。

A期：　土師器杯・壺・甕、須恵器杯・蓋・壺、平瓦、円盤状土製品(須恵器甕の破片利用)、鉄滓、砥石、縄文土器、古墳時代の土師器杯・高杯、石製模造品（円盤形）、黒耀石製石器が出土しているが、いずれも破片で図示できたものは少ない。

〈土師器杯〉

製作にロクロを使用しないものと、使用したものがある。前者はわずかで後者が大半を占めている。後者は2点あり口径13.8cm、底径6.0～6.2cm、器高6.0～6.2cm、口径と底径の比は1：0.43～0.44、口径と器高の比は1：0.3～0.31である。底部の特徴には回転糸切り無調整のもの（第9図7）、ヘラ切りで手持ちヘラケズリのもの、全面回転ヘラケズリ調整のもの（第9図8）、全面手持ちヘラケズリのものがある。体部の形状は内湾しながら外傾するものである。

〈須恵器杯〉

図示できたものが4点ある。Ⅰ類：2点ある（第10図9～10)。器高が3.5～3.9cmと低いのに対して底径が大きいものである。口径が12.6～13.2cmで口径：底径は1：0.53～0.57、口径：器高が1：0.26～0.30である。底部の特徴にはヘラ切り無調整のもの（Ⅰa類）、回転糸切り後周縁を回転ヘラケズリするもの（Ⅰb類）が認められた。Ⅱ類：1点ある（第10図11)。Ⅰ類に比して口径・底径とも小さく、器高が高いものである。口径：底径は1：0.51、口径：器高は1：0.34、底部の切り離しはヘラ切り無調整である。この他破片資料では回転、糸切り無調整のものが若干みられるが、主体となるのはヘラ切りのようである。この他須恵器杯蓋(第10図14）が出土しているが、これは古墳時代中期に属するもので陶邑編年のTK23～TK24型式に比定されるものである（註3）。

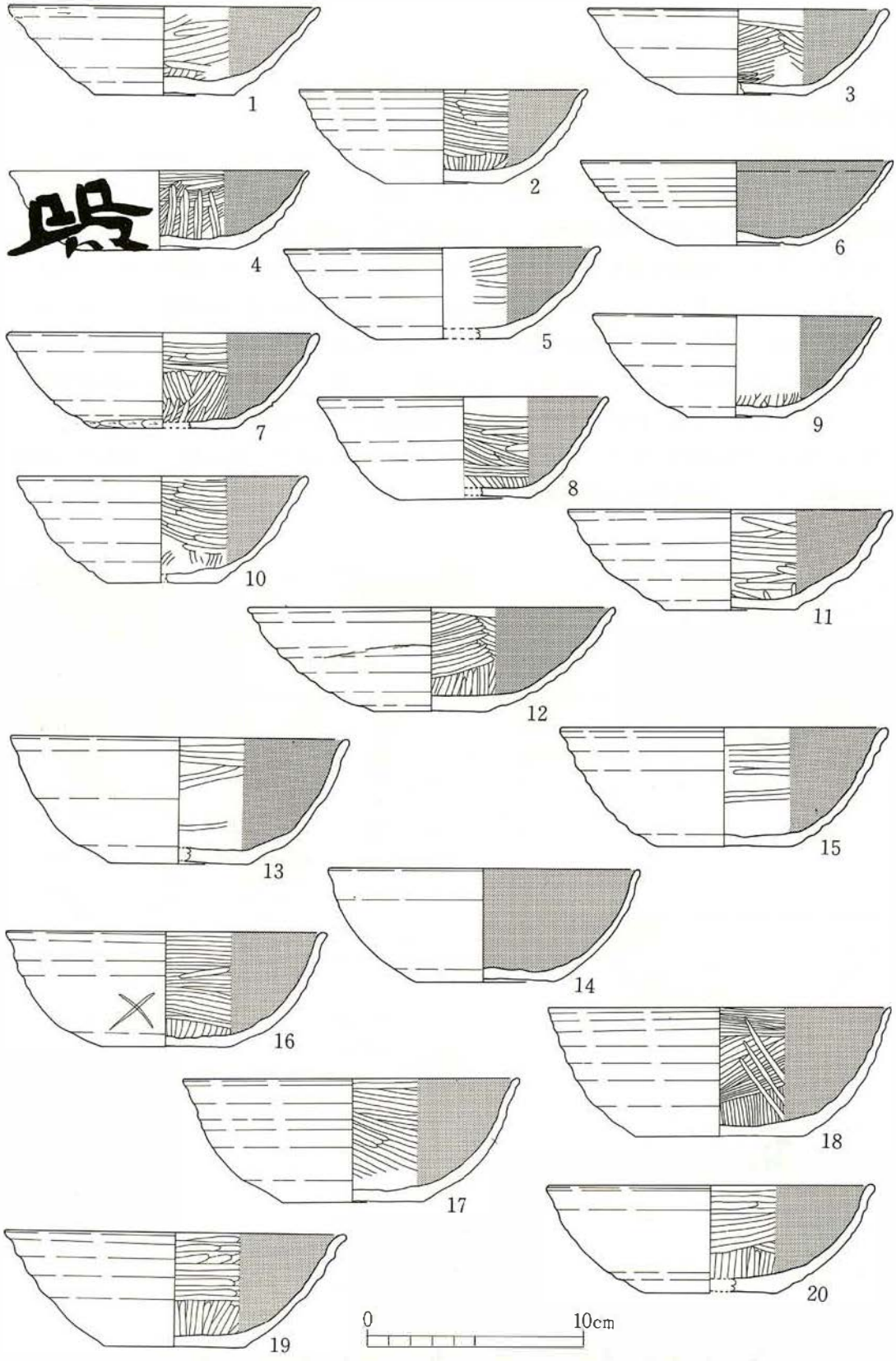
B期：　土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕、丸瓦・平瓦、使用痕のある礫、鉄滓が出土しているが、いずれも破片で図示できたものはない。

土師器杯は製作にロクロを使用したもので、底部の特徴としては回転糸切り無調整のものと全全面に手持ヘラケズリ調整のものとがある。須恵器杯も底部の特徴として回転糸切り無調整のものとヘラ切り後ナデ調整のものとがある。またわずかであるが赤焼き土器の破片がみられる。

C期：　土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕、赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦・丸瓦、緑釉陶器、円盤状土製品、砥石、使用痕のある礫、漆器椀、木製盤、鉄滓が出土している。

D期：　土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕、赤焼き土器杯・高台付杯、青磁、白磁、緑釉陶器、平瓦・丸瓦、砥石、石製模造品、使用痕のある礫、鉄滓が出土している。

C、D期については、図化できた土師器杯・高台付杯、赤焼き土器杯・高台付杯の特徴が類似するため一括して記述していく。



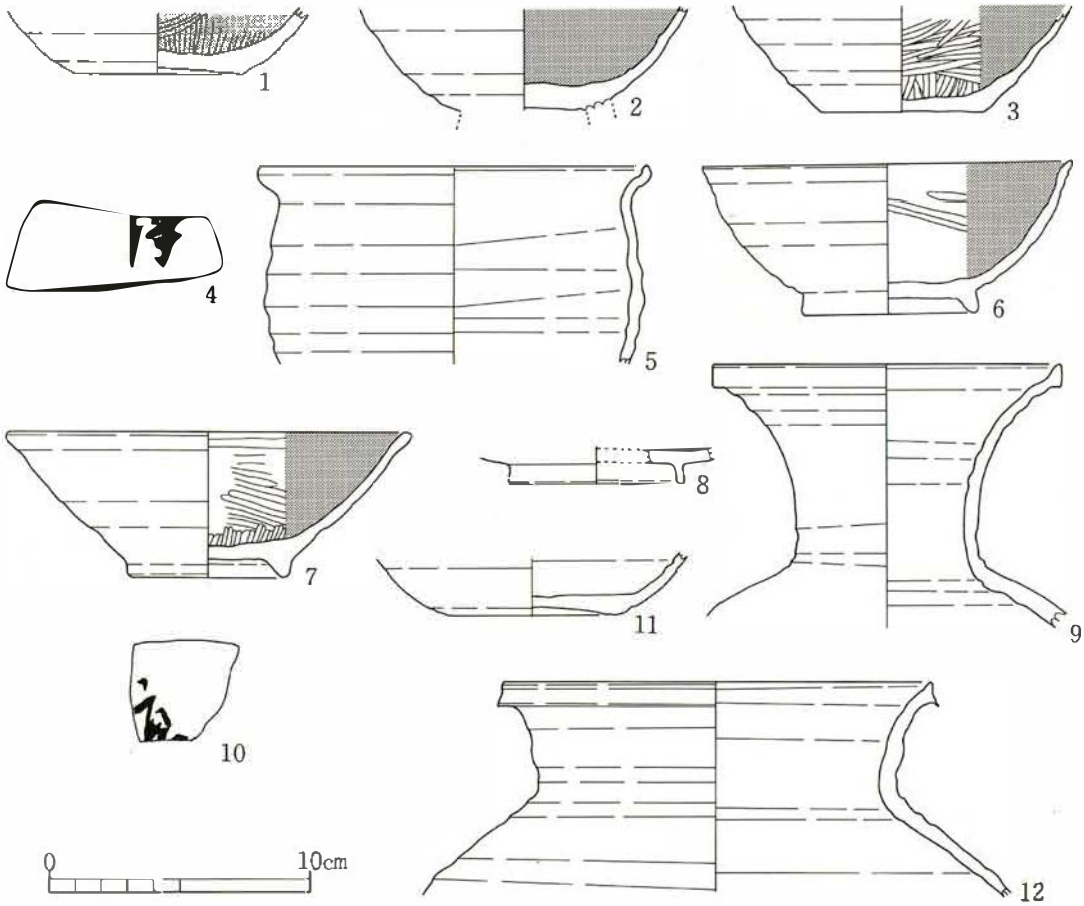
第12図　道路側溝跡Ｃ・Ｄ期出土遺物(土師器杯)

〈土師器杯〉

図示できたものが22点ある。製作にすべてロクロを使用したもので、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

Ⅰ類：　器高が3.5～4.5㎝、口径：器高の比が1：0.26～0.3もので、全体に口径に対して器高が低くやや扁平な感じを受ける器形である。体部はやや丸味を持って立ち上がり体部の外傾度が割合大きい。底部の特徴には、A：回転糸切り無調整のもの、B：回転糸切りで周縁に手持ちヘラケズリ調整が施されるもの、C：回転糸切りで底部全面から周縁にかけて手持ちヘラケズリを施したもの、D：底面全面に手持ちヘラケズリ調整が施され切離しが不明なもの、E：底部全面に回転ヘラケズリ調整が施され、切り離しが不明なものがある。

Ⅱ類：　口径：器高の比が1：0.32～0.37のもので、Ⅰ類に比して器高が高く外傾度の割合小さいものである。体部は内湾しながら外傾し口縁端部で若干外反するものと、しないものとがある。口径が13cm前後のもの（Ⅱa 類）と口径が15cm前後のもの（Ⅱb 類）とがある。底部の切り離しはすべて回転糸切りで無調整である。



第13図　道路側溝跡C・D期出土遺物（土師器・須恵器・緑釉陶器）

〈赤焼き土器杯〉

製作に際してロクロを使用しており、底部の切り離しはすべて回転糸切りで無調整である。体部の形状については、A：内湾しながら外傾するもの、B：直線的に外傾するもの、C：内湾しながら外傾し口縁端部で若干外反するものがある。この形状は以下に分類する各類に含まれている。Ⅰa 類：口径10cm前後、器高2.4～2.8cm。Ⅰb 類：口径12cm前後、器高3.0～3.8cm。Ⅰc 類：口径12～15cm前後、器高3.9～4.9cm。Ⅱ類：口径19.2cm、器高7.2cmの大形杯。

青磁：　碗の底部破片資料である。体部下半にはシャープな回転ヘラケズリ調整がみられ、底部は上げ底状を呈している。釉は内面と体部外面の中頃までかかっている。内面には重ね焼きの痕跡が残っている。釉の色はオリーブ黄色である。胎土は淡黄色を呈し、割れ口は劈開面をなす。

白磁：　玉縁状口縁を呈する碗の破片資料である。釉の色は灰白色、胎土は白色を呈する。

緑釉陶器：　碗の体部下半資料で、回転ヘラケズリ調整が施されている。釉の色はオリーブ灰色、胎土は灰色を呈する。

なお、他の遺物については別章で一括して記述する。

路面上面出土遺物

ロクロを使用した土師器甕が1個体ずつ出土している（第15図9～10）

整地盛土層出土遺物

土師器杯、須恵器杯・甕、平瓦の破片が出土している。土師器杯はロクロ未使用のもので口縁と体部の境にゆるい段を有している。須恵器杯は底部切り離しが回転糸切りで無調整のものである。

(3) 掘立柱建物跡

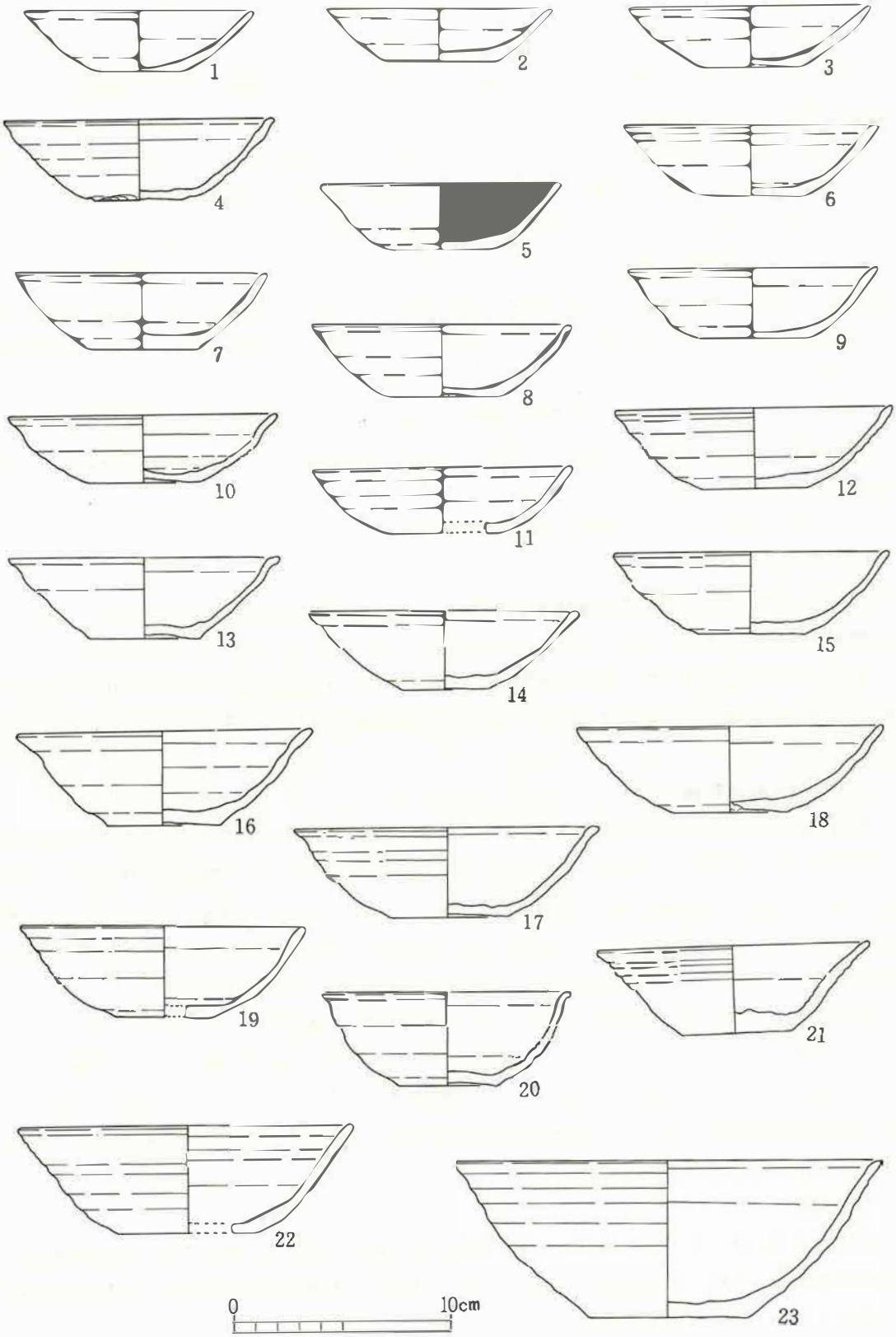
ＳＢ388：　ＳＸ468道路跡の東側、Ｄ・Ｅ－21・22グリットに位置する。ＳＫ459と重複しており、これより古い。東西2間×南北2間の総柱建物跡である。規模は北側柱列で、東から2.35m＋1.9m、総長4.25m、西側柱列で北から2.25m＋2.2m、総長4.45mを計る。方向は西側柱列においてはN－1°－Eである。柱穴は残存状況が悪いが、0.8×0.5mの隅丸方形を呈していたと思われる。柱痕跡は15～20cmの円形を呈する。出土遺物はない。

ＳＢ389：　ＳＢ388の南側、Ｆ・Ｇ－21・22グリットに位置する。ＳＫ455・457、ＳＥ393と重複しており、これらより古い。東西2間×南北2間の総柱建物跡である。規模は北側柱列で東から1.95m＋1.95m、総長3.9m、西側柱列で北から2m＋1.9m、総長3.9mである。柱穴は残存状況が悪く、一辺70cmの隅丸方形を呈していたと思われる。柱痕跡は15～20cmの円形を呈する。出土遺物はない。

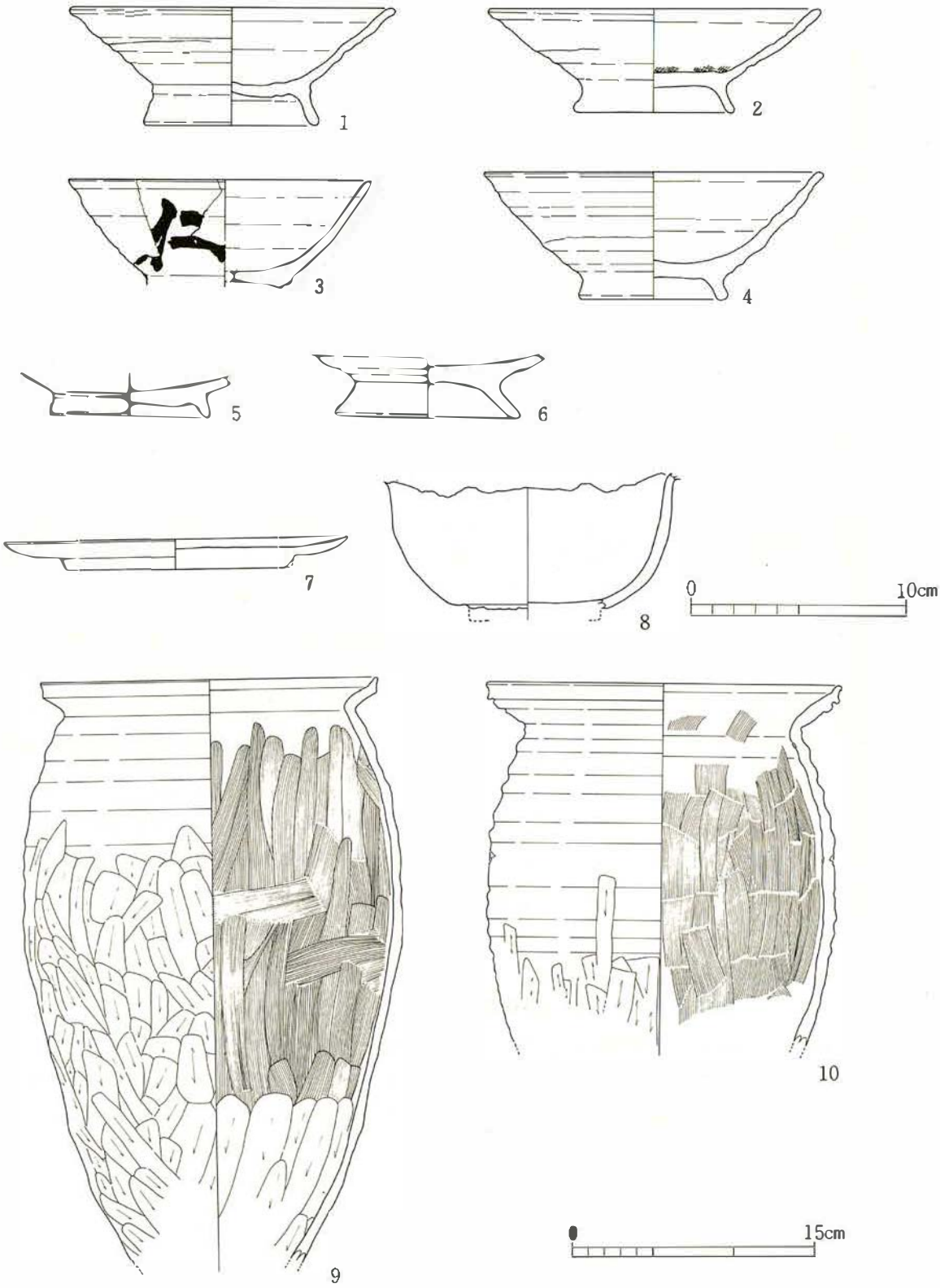
ＳＢ390

東区北東隅、Ｄ～Ｆ－26～28グリットに位置する。東西4間以上、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＤ416と重複しており、これより古い。建物跡はほぼ同位置で2時期の重複が認められた。以下古い順に記述していく。

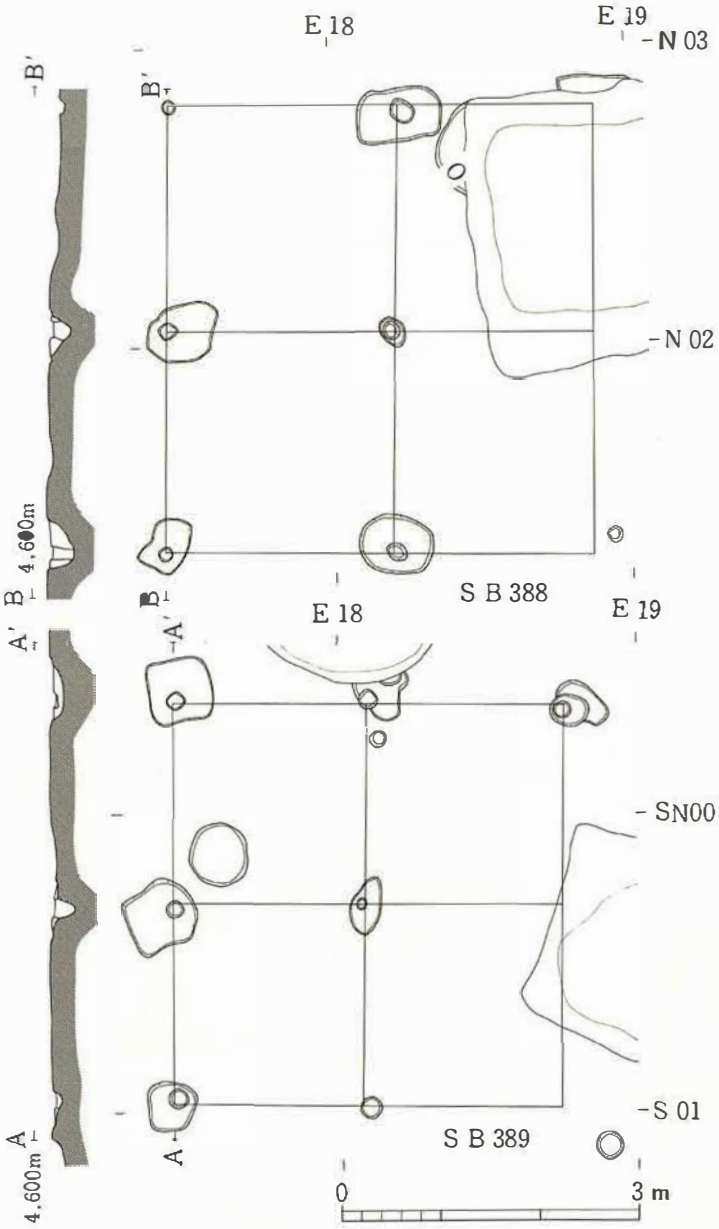
ＳＢ390Ａ：　柱穴は後世の削平を受けているため残存状況が非常に悪い。規模は1m×0.5



第14図　道路側溝跡C・D期出土遺物(赤焼き土器)



第15図　道路側溝跡 C・D 期・道路上面出土遺物

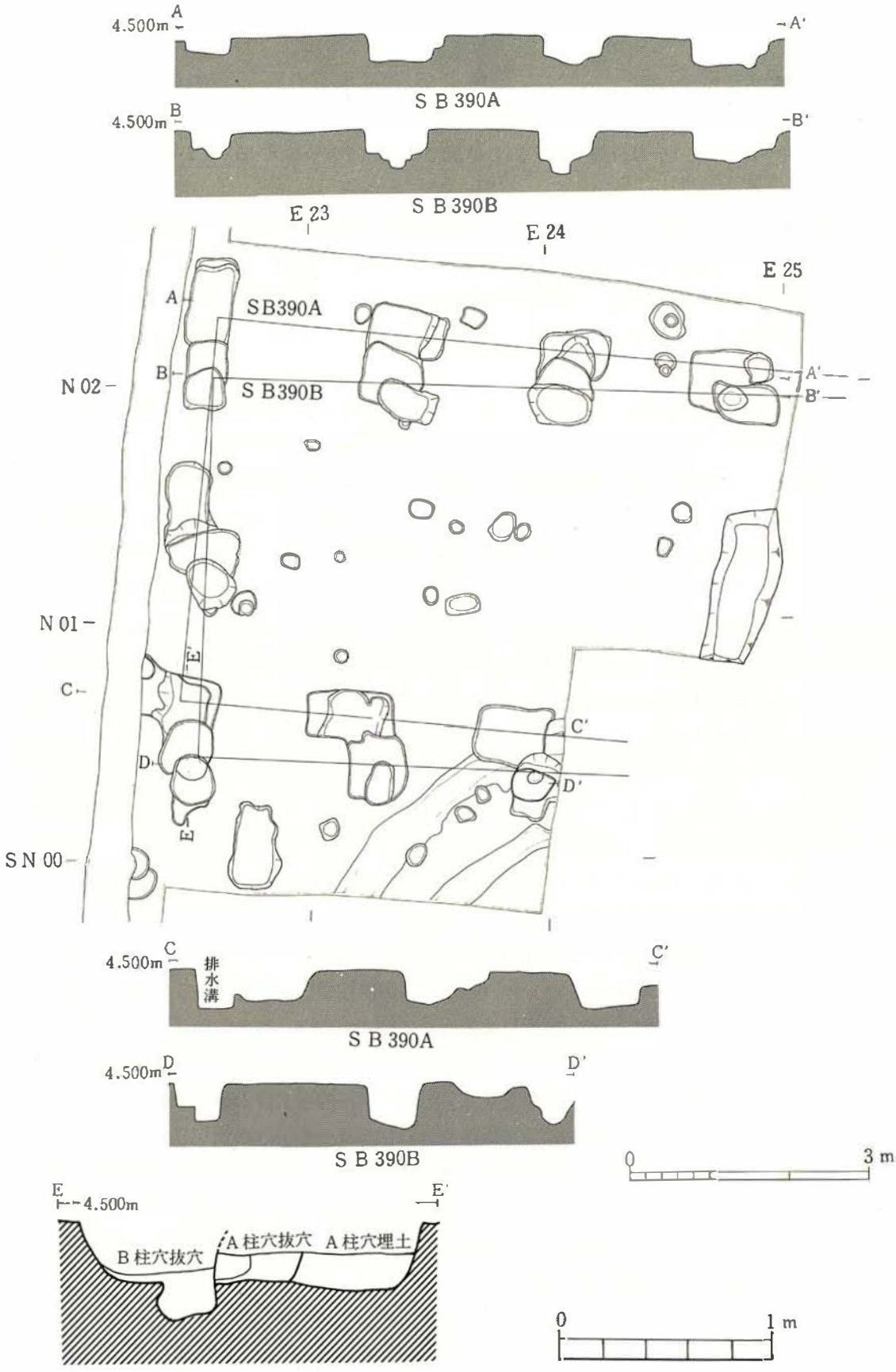


第16図　ＳＢ388・389実側図

ｍの長方形、深さは0.2ｍ～0.3ｍを計る。埋土は黒褐色粘土質シルトで黄褐色シルトブロックを含む。遺物は土師器杯・甕、須恵器の破片が出土している。土師器杯は内面に黒色処理を施したもので ロクロ未使用のものである。

ＳＢ 390Ｂ：　Ａ期の建物跡より若干南へずらして構築している。Ｂ期の柱穴にはすべて抜き取り穴が検出された。抜き取り穴から推定される方向は西側柱列でＮ－2°－Ｅとなる。規模は北側柱列で、西から2.35m＋2.15m＋…。西側柱穴では北から2.3m＋2.5m、総長4.8ｍを計る。柱穴は70×80cmの方形を呈し、深さは0.4～0.5ｍを計る。柱穴埋土は灰黄褐色シルトに黒褐色粘土質シルトブロックを含む。遺物は掘り方埋土より内面黒色処理を施したロクロ未使用の甕の破片が出土している。

ＳＢ 391：　ＳＢ 388・389とＳＢ 390の間、Ｅ～Ｇ－23～25グリットに位置する。ＳＫ455～457と重複しており、これらより古い。東西３間×南北３間の南北棟建物跡である。規模は西側柱列で東より1.8ｍ＋1.9ｍ＋…。東側柱列で北から2.1ｍ＋…を計る。方向は東側柱列においてはＮ－3°－Ｅとなる。柱穴は0.6×0.7ｍの隅丸方形を呈するが、残存状況が悪く、埋土はわずかしか残っていない。柱痕跡は径20cmの円形を呈する。出土遺物はない。



第17図　S B 390A ・B 実測図

(4) 井戸跡

ＳＥ 392

Ｆ・Ｇ－９・10グリットに位置する。同じ位置でＳＥ 392Ａ→ＳＥ 392Ｂの作り替えが認められた。

ＳＥ 392Ａ： 掘り方のみが検出された。掘り方の平面形は隅丸方形で、断面形は２段となる。一辺3.9ｍ、深さは1.1ｍを計る。井戸側についてはＳＥ 392Ｂに壊されているため不明である。掘り方南辺のほぼ中央には溝状の施設が取り付いている。長さ4.5ｍ、幅15cm、深さ４～５cmの規模をもつ。埋土は５層に分けられるが、大別すると上層の灰黄色粘土層と下層（５層）の暗灰黄色砂層である。

遺物は土師器杯・高台付杯（第20図７～８）・甕、須恵器小壺（第20図12）・甕、平瓦・丸瓦が出土している。土師器杯・高台付杯はいずれもロクロ調整のものである。

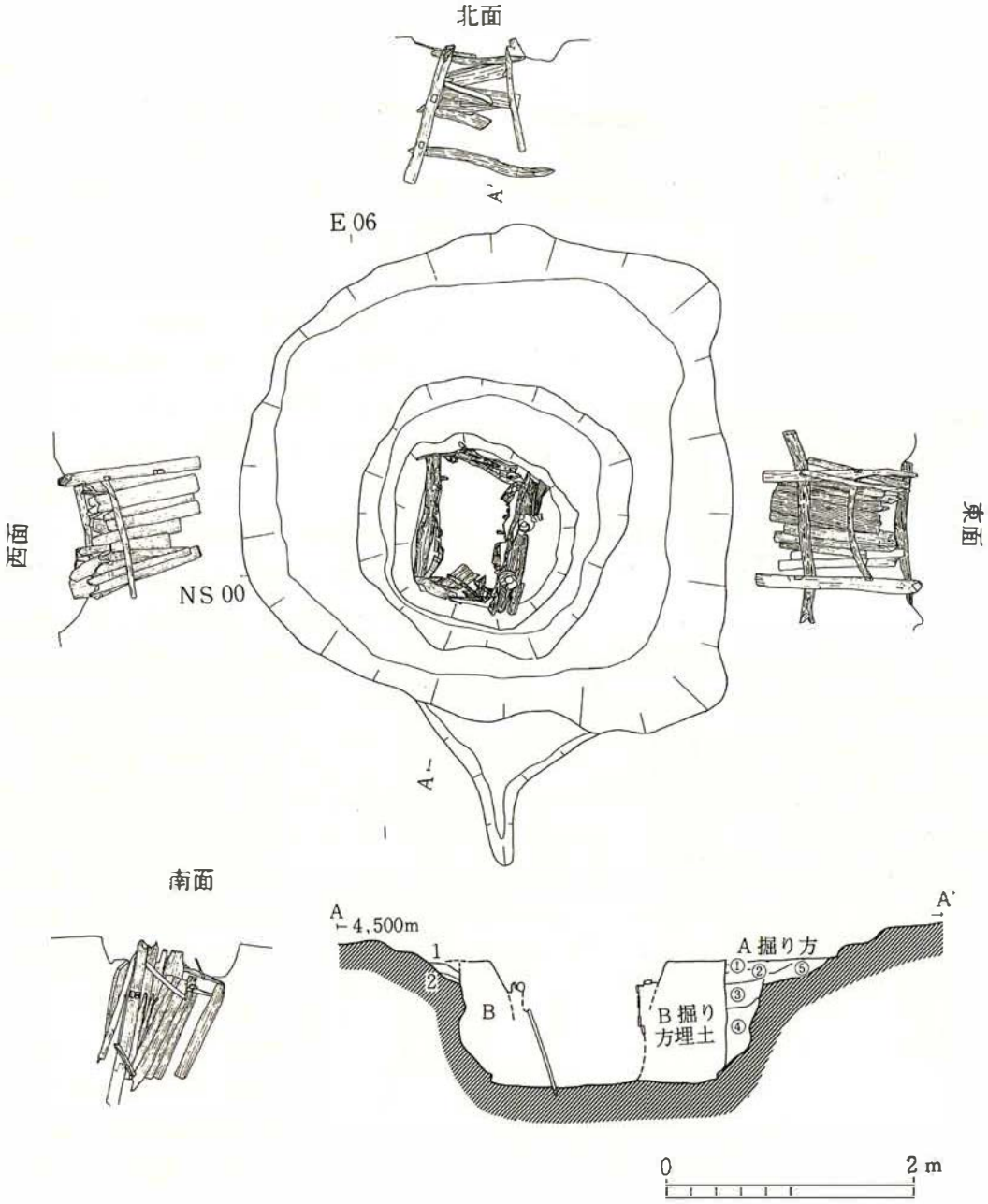
ＳＥ 392Ｂ： 方形の木組み井戸側を持つ構造である。掘り方は隅丸方形を呈し、一辺2.1ｍを計る。底面はほぼ平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは1.25ｍを計る。井戸側は東西辺１ｍ、南北辺1.2ｍの長方形を呈し、縦板組隅柱横桟どめで据えている。ただし北辺には横板が据えられていた。縦板材は長さ0.8～１ｍ、幅10cm、厚さ５mm、横板材は長さ0.6ｍ、他は縦板材と同じである。隅柱は円柱で、２段に柄穴（６×３cm）が認められるが、横桟は柄穴にははめ込んでおらず、柱と縦板材の間にはさんでいる。下部の横桟は径10cmを計る丸太材を用いている。掘り方埋土は灰白色火山灰のブロックが混じる黄褐色シルトで、井戸内埋土は黒褐色シルト質粘土である。

遺物は掘り方埋土より土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕の破片が出土している。井戸内埋土では土師器杯（第20図１～４）・高台付杯・甕、須恵器杯・壺（第20図11）・甕、耳皿、赤焼き土器台付皿（第20図９）、土錘がある。

ＳＥ393： Ｆ・Ｇ－０・１グリットに位置する。ＳＤ 471と重複しておりこれより古い。方形の木組み井戸側を持つ構造である。掘り方は不整円形を呈し、径2.4ｍを計る。深さは0.6ｍである。井戸側は東西辺0.5ｍ、南北辺0.8ｍの長方形を呈していたと思われるが、西側より土圧で崩れたようになって検出した。井戸側は縦板組隅柱横桟どめで据えているが、東辺のみ縦板の上に横板が組まれていた。縦板材は四面に２枚ずつ用い、長さ0.55ｍ～0.7ｍ幅0.3ｍを計る。井戸底には曲物（第22図１）の水溜めを備えている。掘り方埋土は黒褐色粘土と黄色シルトブロックが混じり合う層が主体をなしている。井戸内埋土は上層が黒褐色粘土を主体とするのに対し、下層（井戸側内）は植物遺体を含む粘土層→砂層の堆積が見られた。

遺物は掘り方埋土より土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕、赤焼き土器杯(第23図1)・高台付杯が出土している。土師器杯はロクロ未使用のもので、底部切り離しが回転糸切り無調整である。井戸内埋土の出土遺物には土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦、使用痕のある礫がある。

ＳＥ394： Ｅ・Ｆ－21・22グリットに位置する。ＳＢ 389と重複しておりこれより新しい。方形の木組み井戸側を持つ構造である。掘り方は円形を呈し、径２ｍ、深さ１ｍを計



土 層 註 記

1	10YR5/3灰黄褐色	粘土質シルト	砂粒を多く含み酸化鉄の小斑を含む
2	10YR5/2灰黄褐色	粘 土	炭化物粒、わずかな砂粒を含む
①	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	砂粒を多く含み酸化鉄斑を含み2.5Y5/4にぶい黄色シルトブロックを含む
②	10YR5/2灰黄褐色	粘 土	上面に砂粒を含むわずかに炭化物粒を含む
③	2.5Y5/3暗灰黄	粘 土	2.5GY5/3オリーブ灰砂のブロック
④	2.5Y5/4黄灰	粘 土	砂粒を多く含む植物遺体小石を含む
⑤	2.5Y5/2暗灰黄	砂	10YR5/3灰黄褐粘土のブロックを含む

第18図　ＳＥ392Ａ・Ｂ井戸跡実測図

る。井戸側は横板を方形に組み四隅を角柱あるいは丸柱でおさえるタイプである。板の寸法は東辺と西辺が長さ0.9ｍ、幅0.4ｍ、厚さ5㎝、北辺と南辺が長さ0.75ｍ、幅0.4ｍ、厚さ5㎝である。井戸側の平面形は長方形を呈していたと思われる。掘り方埋土は3層に分けられるが、大別してすると2層で、上層が灰黄褐色シルトと黄色シルトの混じり合う層。下層が黄橙色シルトである。井戸内埋土は4層に分けられ、3・4層がシルト質粘土。2層中には灰白色火山灰のブロックが含まれる。1層は人為的な埋め戻しの可能性がある。

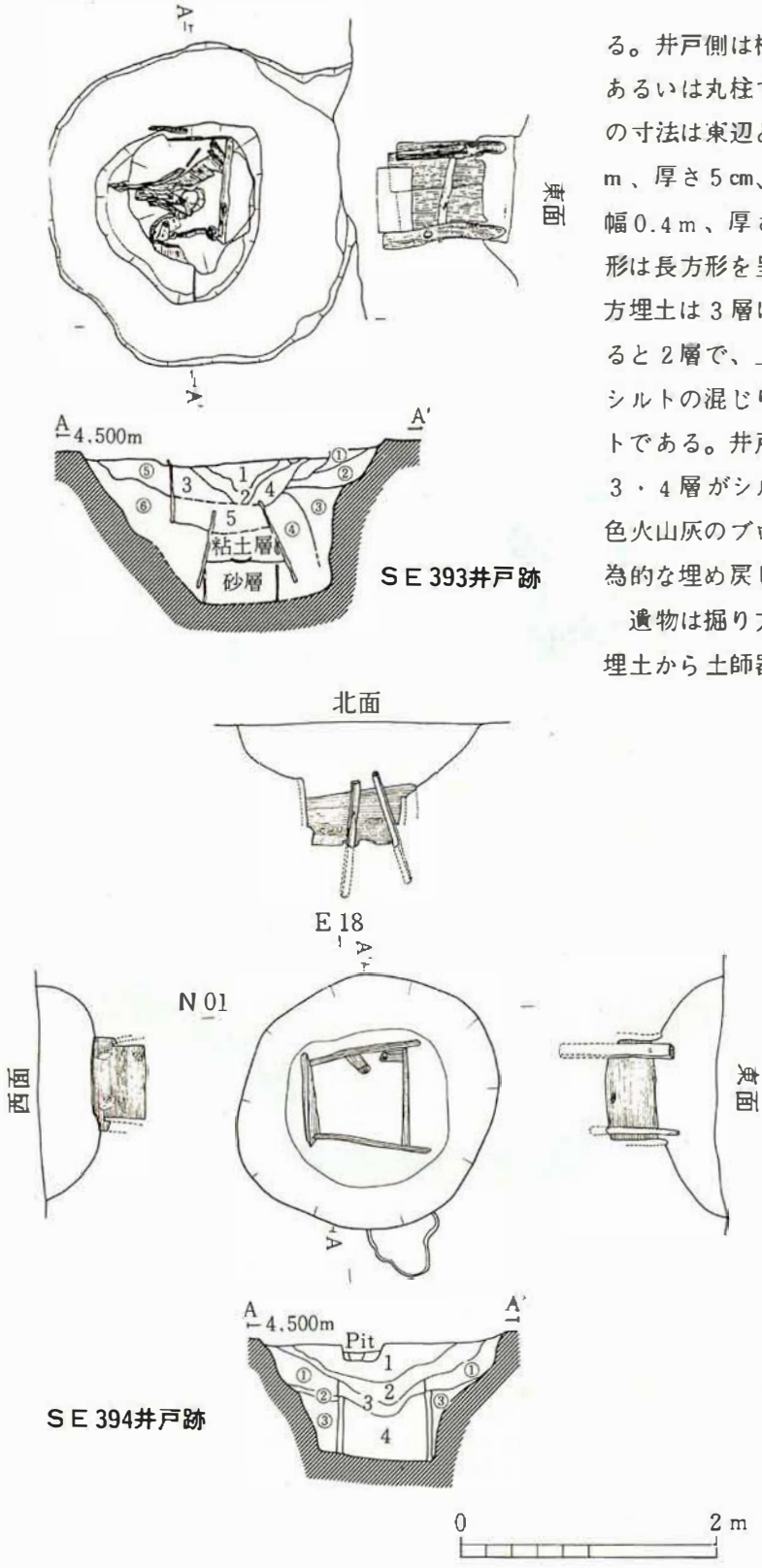
遺物は掘り方埋土より須恵器杯、井戸内埋土から土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器高台付杯、平瓦が出土している。

ＳＥ 395

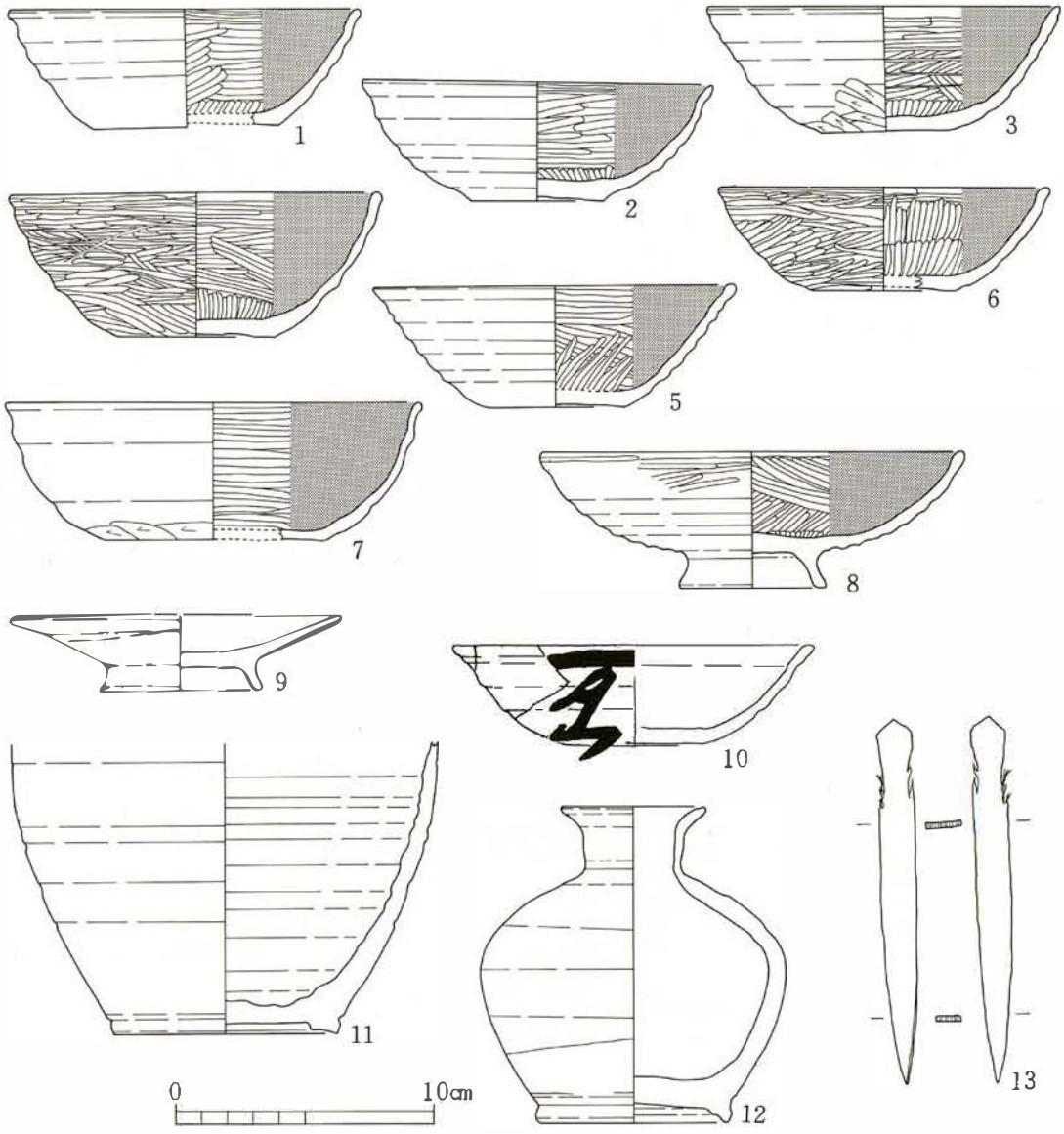
Ｄ・Ｅ－13・14グリットに位置する。ほぼ同じ位置でＳＥ 395Ａ→ＳＥ 395Ｂの作り替えが認められた。

ＳＥ 395Ａ： 掘り方の一部と井戸底を検出した。形態についてはＳＥ 395Ｂに壊されており不明であるが、深さは0.95ｍを計る。井戸底には曲物（上段径40ｍ、高さ22.7㎝、下段径38㎝、高さ19.5㎝）を重ねて据え水溜めとしている。上段の曲物の際には平瓦を1枚置いておさえとしている。掘り方埋土は3層に分けられる。

遺物は土師器杯・甕、須



第19図　ＳＥ393・394井戸跡実測図

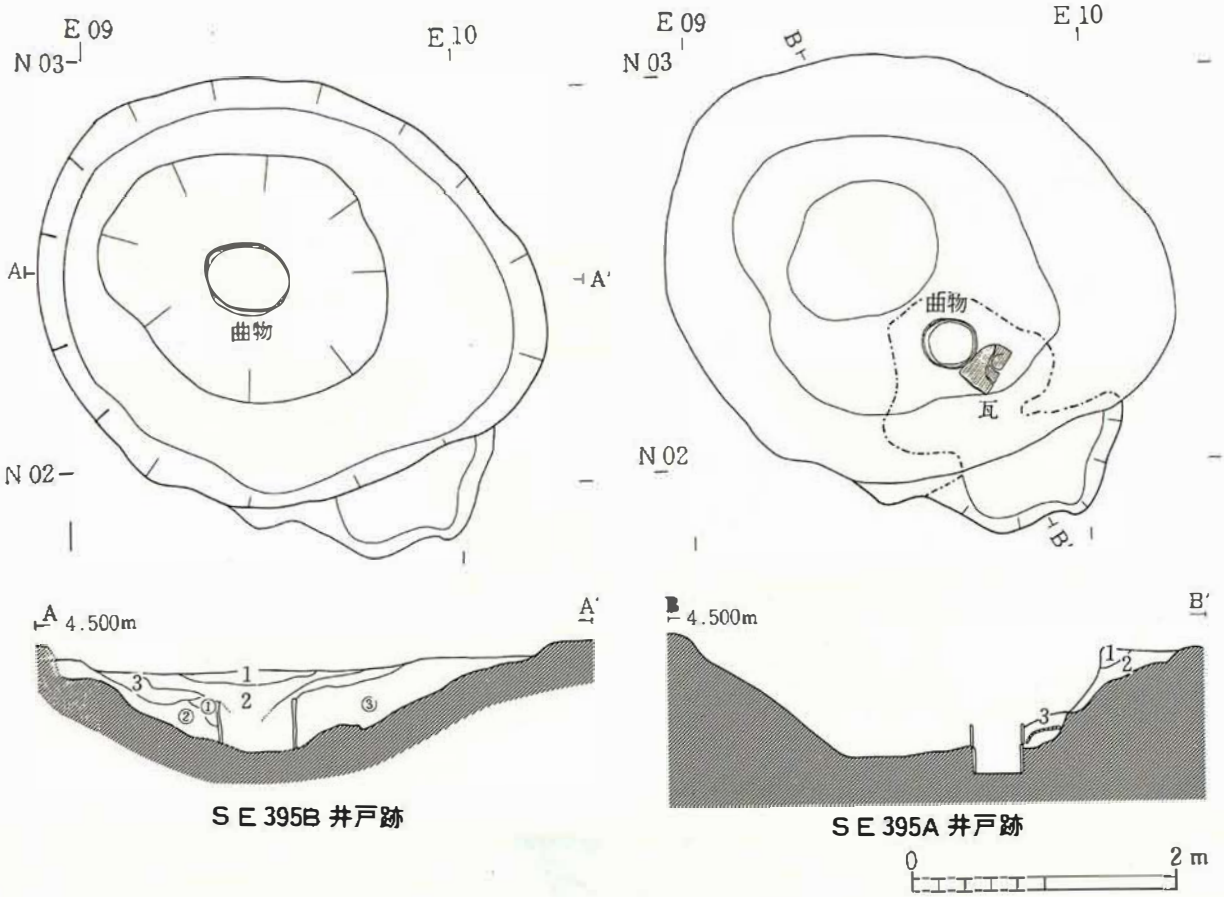


第20図　ＳＥ 392Ａ・Ｂ井戸跡出土遺物実測図

恵器甕、赤焼き土器高台付杯、平瓦（第23図５）が出土している。

ＳＥ 395Ｂ：　掘り方は不整円形を呈し、長径 3.8ｍ、短径3.25m、深さ0.85m を計る。井戸底には径60㎝、高さ30cmの曲物を水溜め用として据えているが、その上部構造については不明である。掘り方埋土は砂層を主体とし、それに若干黒色粘土ブロックが混じる。井戸内埋土は褐色系の粘土層が主体である。

遺物は掘り方埋土から土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯、丸瓦、使用痕のある礫、弥生土器が出土している。井戸内埋土では土師器杯（墨書・第23図２・４）・高台付杯、須恵器杯・壺・甕、赤焼き土器杯、軒丸瓦・平瓦、砥石、使用痕のある礫がある。



土 層 註 記

SE 393

1	2.5Y3/1黒褐色	粘 土	わずかに酸化鉄焼土粒を含む 2.5Y3/1黒色粘土を上部に頂く
2	5Y3/1オリーブ黒	粘 土	左辺は下部に2.5Y5/3黄褐色砂を層状に含む わずかに酸化鉄粒炭化粒を含む
3	2.5Y3/1黒褐色	粘 土	わずかに酸化鉄粒を含む 2.5Y5/2暗灰黄砂を互層に含む
4	2.5Y3/1黒褐色	粘 土	上部に酸化鉄を含む
5	2.5Y3/1黒褐色	粘 土	2.5Y5/3黄褐粘土をブロックで含む
①	2.5Y3/1黒褐色	粘 土	2.5Y5/3黄褐色Ⅱ層シルトブロックを含む
②	2.5Y3/1黒褐色	粘 土	2.5Y5/4にぶい黄色シルトブロックを①より多く含む 2.5Y5/3黄褐色砂を下部に層状に含む
③	5G5/1暗緑灰	砂	5Y3/1オリーブ黒粘土ブロック状に含む
④	5Y3/1オリーブ黒	粘 土	5G5/1暗緑灰砂を下部に多く混入する
⑤	10YR3/1黒褐色	粘 土	10YR5/4にぶい黄色砂をわずかに含む
⑥	2.5Y5/3黄褐	砂	

SE 394

1	10YR5/1褐灰	シルト	褐色粘質土と黄色砂質土がまじる カーボン含む
2	10YR5/1褐灰	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロックとカーボン含む
3	7.5Y5/1灰	シルト	荒砂と粘質土がまじる
4	7.5Y5/1灰	粘土質シルト	
①	10YR7/4にぶい黄橙		灰褐色シルトと黄色シルト（地山土）が互層になるカーボン含
②	10YR5/1褐灰	粘質シルト	
③	10YR7/4にぶい黄橙	シルト	

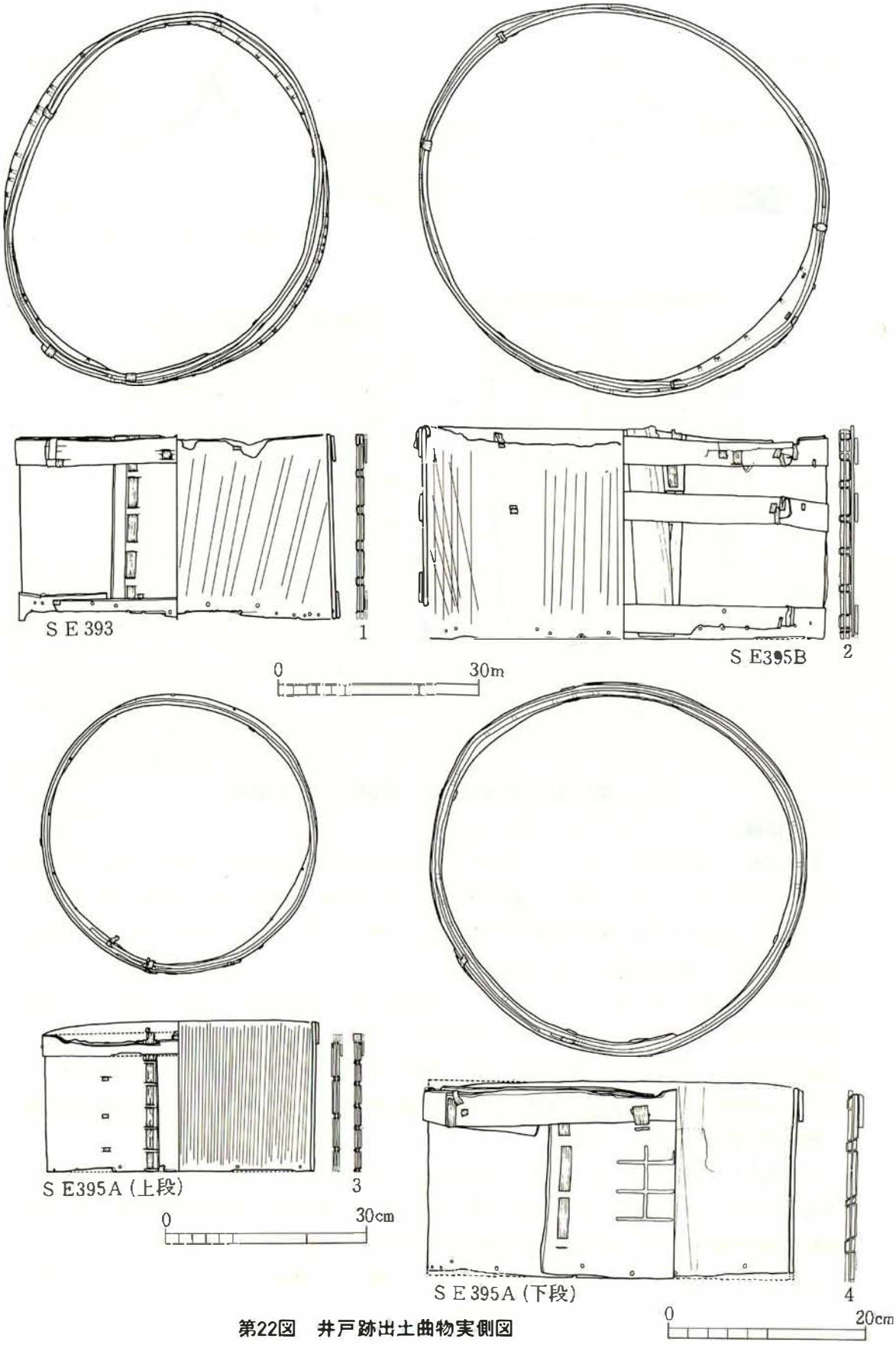
SE 395B

1	10YR3/1黒褐色	粘 土	下層に砂質土ブロック含む
2	10YR5/1褐灰	粘 土	砂質を若干含む
3	10YR5/1褐灰	粘土シルト	砂質土（粗砂を多く含む）
①	10YR5/2灰黄褐	粘 土	(砂質土若干含)2.5Y3/1黒褐色粘土が下部を占める
②	2.5Y5/2暗灰黄	砂	2.5Y3/1黒褐色粘土ブロックを含む 酸化鉄も見られる
③	5Y5/2灰オリーブ	砂	砂と2.5Y5/2暗灰黄粘土及び酸化した砂の互層

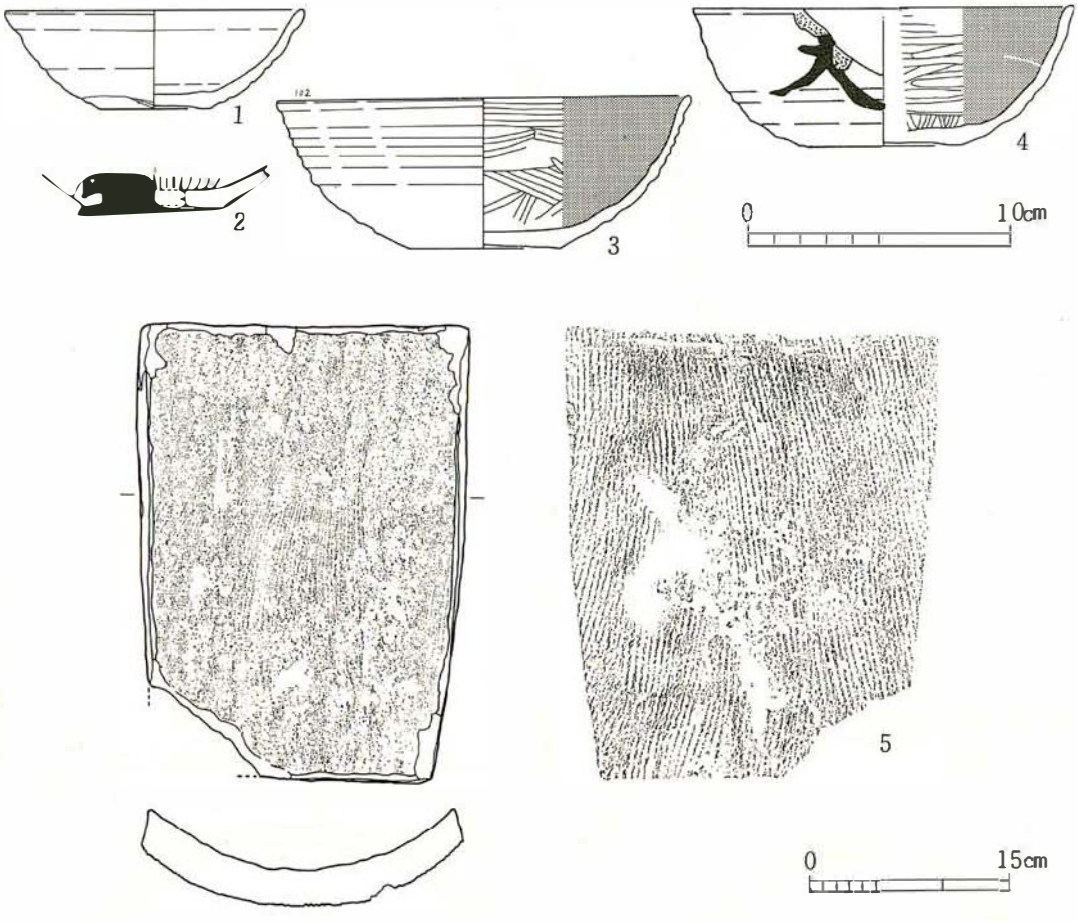
SE 395A

1	10YR5/2灰黄褐色	シルト	焼土炭化物粒含む
2	2.5Y5/2暗灰黄	砂	Ⅱ層シルトブロックを含む
3	10Y5/1灰	粗 砂	7.5Y3/1オリーブ黒色粘土ブロックを含む

第21図 SE 395A・B井戸跡実測図



第22図　井戸跡出土曲物実側図



第23図　ＳＥ393・394・395井戸跡出土遺物

(5) 溝跡

ＳＤ 396：　西区、Ｃ～Ｈ－０～９グリットに位置する。方向は約Ｅ－30°－Ｓである。重複関係からＳＤ 383・471より古い。確認できる長さは約32mで、幅0.3～0.4ｍ、深さ約0.3ｍを計る。底面は丸味を帯び壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は２層に分けられ、灰黄褐粘土が主体をなす。遺物は出土していない。

ＳＤ 397：東区、Ｂ～Ｋ－13～25グリットに位置する。方向は約Ｅ－35°－Ｓである。。重複関係からＳＤ 387・385・467・409、ＳＢ 389より古い。また遺物包含層Ｂ・Ｃに覆われる。確認できる長さは約44mで、幅0.6～1.2ｍ、深さ15～30cmを計る。埋土は３層に分けられるが、おおむね褐灰色シルトである。遺物は内外面に段を有するロクロの不使用の土師器杯(第25図1)・甕、須恵器甕が出土している。

ＳＤ 398：　西区、Ｈ－10グリットに位置する。ＳＥ 392Ａとの形態的連続性から同井戸に付属する施設と考えられる。確認できる長さは2.3ｍで、幅10cm、深さ10cmを計る。埋土は灰黄褐色粘土であり、ＳＥ 392Ａの掘り方埋土に近似する。遺物は出土していない。

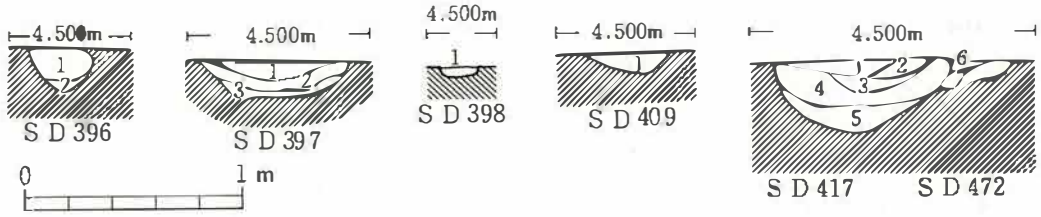
ＳＤ 399：　西区、Ｍ～Ｏ－１～10グリットに位置する。溝跡は古い順にＡ～Ｄ期の４期の

変遷が認められた。確認できる長さは約15mで、各期において幅・深さとも様々である。方向はＳＤ 384 道路側溝跡とほぼ平行する。Ｂ期は重複関係からＳＫ 428 ・ＳＤ 384 Ｃより古く、ＳＤ 384 Ａより新しい。埋土はＡ期が暗灰黄色粘土、Ｂ期が灰色系の粘土で上面に灰白色火山灰層がのる。Ｃ期は暗灰黄色粘土で灰白色火山灰が小ブロックあるいは粒状に混入する。Ｄ期は灰黄褐色粘土である。遺物はＢ期が土師器杯、須恵器杯・甕、Ｃ期が土師器杯・甕、須恵器、甕、Ｄ期が土師器杯・甕、赤焼き土器杯、須恵器杯・甕が出土している。

ＳＤ 400： 東区、Ｉ～Ｊ －14～17グリットに位置する。重複関係からＳＤ 383Ｄ、ＳＫ 446より古く、ＳＤ 383Ａ・Ｂより新しい。遺物包含層Ａ上面より掘り込まれ、ＳＤ 383Ｃと同時に埋まっている。方向はＳＤ 383道路側溝跡とほぼ平行する。長さ11.3m、幅 0.8～1.0ｍ、深さ0.5ｍを計る。埋土は、灰白色火山灰粒を含む暗灰黄色シルトである。遺物は土師器杯、赤焼き土器杯、須恵器杯・甕、平瓦、丸瓦が出土している。

ＳＤ 401～411（小溝群）： 東区、Ｈ～Ｉ －16～18の遺物包含層Ａ上面で検出した。重複関係よりＳＤ 409 より新しい。ただし小溝群内においても重複が認められた。方向は東西方向のものと南北方向のものとがある。残存状況が悪いが比較的良いもので長さ 6.1ｍ、幅 0.2～0.3ｍ、深さ２～５cmを計る。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦・丸瓦が出土している。

ＳＤ 412： 東区、Ｏ～Ｐ －16～17グリットに位置する。ＳＤ 413とＬ字型に交わりＳＤ 384側溝跡にほぼ平行する。確認できる長さは約４ｍ、で幅１～1.3ｍ、深さ 0.2～0.25mを計



土 層 註 記

ＳＤ 396

1	10YR5/2灰黄褐色	粘 土	
2	10YR5/2灰黄褐色	粘 土	

ＳＤ 397

1	10YR5/4褐灰色	シルト	
2	10YR5/4褐灰色	粘土質シルト	
3	10YR5/2灰黄褐色	シルト	木炭粒を含む

ＳＤ 398

1	10YR5/2灰黄褐色	粘 土	

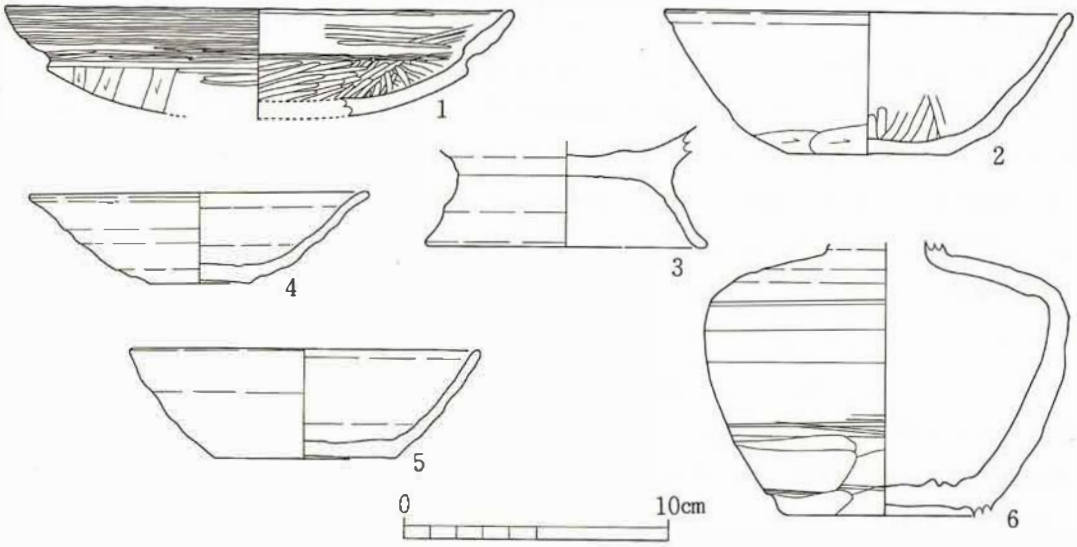
ＳＤ 409

1	10YR5/4にぶい黄橙	シルト	黄色地山シルトを含む

ＳＤ 417・472

1	10YR5/2灰黄褐色	シルト	炭化物粒酸化鉄マンガン粒を含む
2	2.5Y5/2黄褐色	砂質シルト	酸化鉄をわずかに含む
3	2.5Y5/4黄灰色	粘 土	酸化鉄をわずかに含む
4	2.5Y5/2暗灰黄色	粘土質シルト	風化凝灰岩のブロックと酸化鉄を含む
5	2.5Y5/2黄褐色	砂質シルト	2.5Y5/2暗灰黄粘土ブロック酸化鉄を含む
6	2.5Y5/2黄褐色	砂質シルト	2.5Y5/2暗灰黄シルトブロックを含む
7	7.5Y5/2黄褐色	砂質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色粘土質ブロックを含む

第24図 溝跡セクション図



第25図　溝跡出土遺物

る。埋土はＳＤ 384Ｃ・ＳＤ 414と近似したものでこれらとほぼ同時に埋まっている。遺物は土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。

ＳＤ 413：　東区、Ｐ～Ｒ－17グリットに位置する。ＳＤ 412とＬ字型に交わり、北側に突出部を持つ。確認できる長さは6.5mで、幅約1ｍ、深さ0.1～0.2ｍを計る。埋土はＳＤ412と近似しており同時に埋まっている。遺物は土師器甕が出土している。

ＳＤ 414：　東区、Ｏ～Ｐ－16～17グリットに位置する。重複関係よりＳＤ 384Ｄより古い。方向はＳＤ 384Ｃとほぼ平行する。確認できる長さは4.6mで、幅1～1.8ｍ、深さ0.2ｍを計る。埋土はＳＤ 384Ｃ、ＳＤ 412と近似する。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

ＳＤ 415：　東区、Ｆ～Ｇ－27～28グリットに位置する。形態は弧状を呈するものと思われ、長さ1.3ｍ、幅0.3～0.4ｍ、深さ10cmを計る。埋土は黒色粘土質シルトである。遺物は土師器杯・甕が出土している。

ＳＤ 416：　東区、Ｆ～Ｇ－27～28グリットに位置する。重複関係よりＳＢ 390より新しい。形態は弧状を呈するものと思われ長さ3ｍ、幅0.5ｍ、深さ10～15cmを計る。埋土は黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ 417：　東区、Ｈ～Ｉ－21～25グリットに位置する。重複関係よりＳＤ 397より新しい。ＳＤ 386Ｃ側溝跡とＨ－21グリット付近で接続し、一端約1.5ｍの幅を持って途切れる。方向はＳＤ 385側溝跡とほぼ平行する。確認できる長さは約14mで、幅0.7～1ｍ、深さ30cmを計る。埋土は5層に分けられるが大別すると2層で、上層が褐色系のシルト、下層が黄色系の粘土質シルトである。遺物は須恵器甕が出土している。

ＳＤ 418～422：　Ｃ～Ｅ－19～20グリットに位置する。遺物包含層Ｂにおおわれ、Ⅱ層上面で検出した。およそＮ－45°－Ｅの方向をとる。いずれも幅0.3ｍ前後、深さ10～20cmを計る。

埋土は包含層Bに良く似た黄褐色系の砂質シルトの単層である。遺物は土師器杯（ロクロ使用・底部回転系切り無調整）・甕、須恵器杯（ヘラ切り→ナデ調整）・甕が出土している。

(6) 土坑

SK 423： C－2グリットに位置する。平面形は不整楕円形、断面形は舟底型を呈する。規模は長径1.34m、短径1.06m、深さ0.3mを計る。遺物は土師器杯、須恵器杯が少量出土している。

SK 424： H－5グリットに位置する。SD 383・SK 425と重複しており、これらより新しい。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長形0.7m、短形0.65m、深さ0.3mを計る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトの単層である。遺物は土師器杯が出土している。

SK 425： G・H－5グリットに位置する。SK 424と重複しており、これより古い。平面形は隅丸方形状を呈するものと思われる。規模は長軸0.7m以上、短軸0.5m、深さ0.2mを計る。埋土は2層に分けられ、1層はSK 424と良く似た粘土質シルトである。遺物は土師器杯・甕、古墳時代（南小泉式）の土師器高杯が出土している。

SK 426： G・H－5グリットに位置する。平面形は不整方形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.46m、深さ0.1mを計る。遺物は土師器杯・甕、赤焼き土器杯が出土している。

SK 427： M・N－4グリットに位置する。重複関係からSD 399より古く、SD 384Aより新しい。平面形は楕円形で南辺では段掘り状になる。規模は長径1.19m、短径0.50m、深さ0.3mを計る。埋土は灰黄褐色粘土で、底面近くに植物遺体を多量に含む。遺物は土師器杯（漆付着片）・小形甕が出土している。

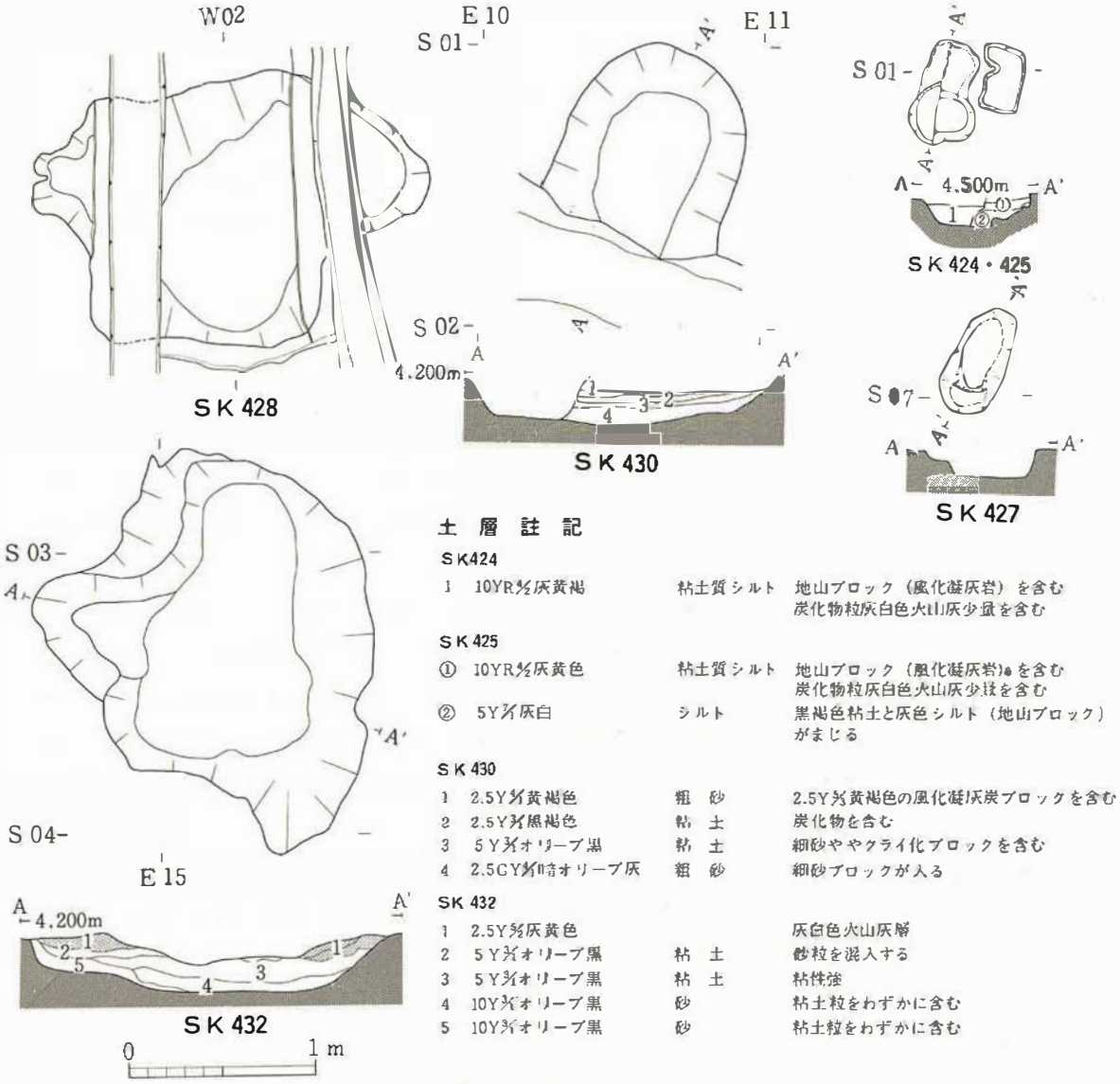
SK 428： M・N－12グリットに位置する。重複関係からSD 399Bより古く、SD 384Aより新しい。平面形は不整形を呈する。規模は長軸4.23m、短軸2.92m、深さ0.8mを計る。埋土は暗灰黄色粘土で下層ほど黒味を帯びる。土師器杯（第33図3～6）・甕、須恵器杯・壺、灰釉陶器椀（黒笹90号窯式）、古墳時代（南小泉式）の土師器杯、砥石の遺物が出土している。

SK 429： I－4・5グリットに位置する。SD 383Aと重複しており、これより古い。平面形は不整形で、壁は南辺で緩やかに立ち上がる。規模は幅2.15m以上、深さ0.4mを計る。埋土は砂層と粘土層が互層になる自然堆積層である。遺物は須恵器杯（墨書：第33図12）・甕が出土している。

SK 430： H－14グリットに位置する。SK 446と重複しており、これより古い。平面形は楕円形を呈していたと思われる。規模は長径2.06m以上、短径2m、深さ0.53mを計る。埋土は大別すると3層で、上・下層がシルトブロックを含む粗砂層、中層が黒褐色系粘土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器壺・甕の転用硯、赤焼き土器杯、緑釉陶器、丸瓦が出土している。

SK 431： L・M－25グリットに位置する。平面形は長楕円形と思われ、断面形はU字型を呈する。長径1.3m以上、短径0.7m、深さ0.38mを計る。埋土は黒褐色シルト質粘土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

SK 432： I～K－18～19グリットの遺物包含層A上面で検出した。重複関係からSD386Cより古く、SD386Aより新しい。平面形は不整円形で、底面に段を有する。規模は長径4.45



土 層 註 記

SK424

1	10YR⅔灰黄褐	粘土質シルト	地山ブロック（風化凝灰岩）を含む 炭化物粒灰白色火山灰少量を含む

SK 425

①	10YR⅔灰黄色	粘土質シルト	地山ブロック（風化凝灰岩）を含む 炭化物粒灰白色火山灰少量を含む
②	5Y⅔灰白	シルト	黒褐色粘土と灰色シルト（地山ブロック）がまじる

SK 430

1	2.5Y⅔黄褐色	粗　砂	2.5Y⅔黄褐色の風化凝灰炭ブロックを含む
2	2.5Y⅔黒褐色	粘　土	炭化物を含む
3	5Y⅔オリーブ黒	粘　土	細砂ややクライ化ブロックを含む
4	2.5GY⅔暗オリーブ灰	粗　砂	細砂ブロックが入る

SK 432

1	2.5Y⅔灰黄色		灰白色火山灰層
2	5Y⅔オリーブ黒	粘　土	砂粒を混入する
3	5Y⅔オリーブ黒	粘　土	粘性強
4	10Y⅔オリーブ黒	砂	粘土粒をわずかに含む
5	10Y⅔オリーブ黒	砂	粘土粒をわずかに含む

第26図　土坑実測図

m、短径3.7m、深さ0.64mを計る。埋土は8層に分けられ、1層が灰白色火山灰の自然堆積層。その下層は黒色粘土を主体をしている。遺物は土師器杯（第33図8・9）・甕、須恵器杯（第33図13）高台付杯・壺・甕、赤焼き土器杯、軒平瓦・平瓦が出土している。

SK 433：　J－13グリットに位置する。SD 383Dと重複しており、これより古い。平面形は隅丸方形を呈していたと思われる。規模は長軸1.54m以上、短軸0.9m、深さ0.4mを計る。埋土は6層に分けられ、1・3層に灰白色火山灰のブロックが混入している。遺物は土師器杯、須恵器甕が出土している。

SK 434：　G・H－25グリットに位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長軸3.76m、短軸1.4m以上、深さ0.19mを計る。遺物は土師器杯、須恵器壺が出土している。

3．石製品

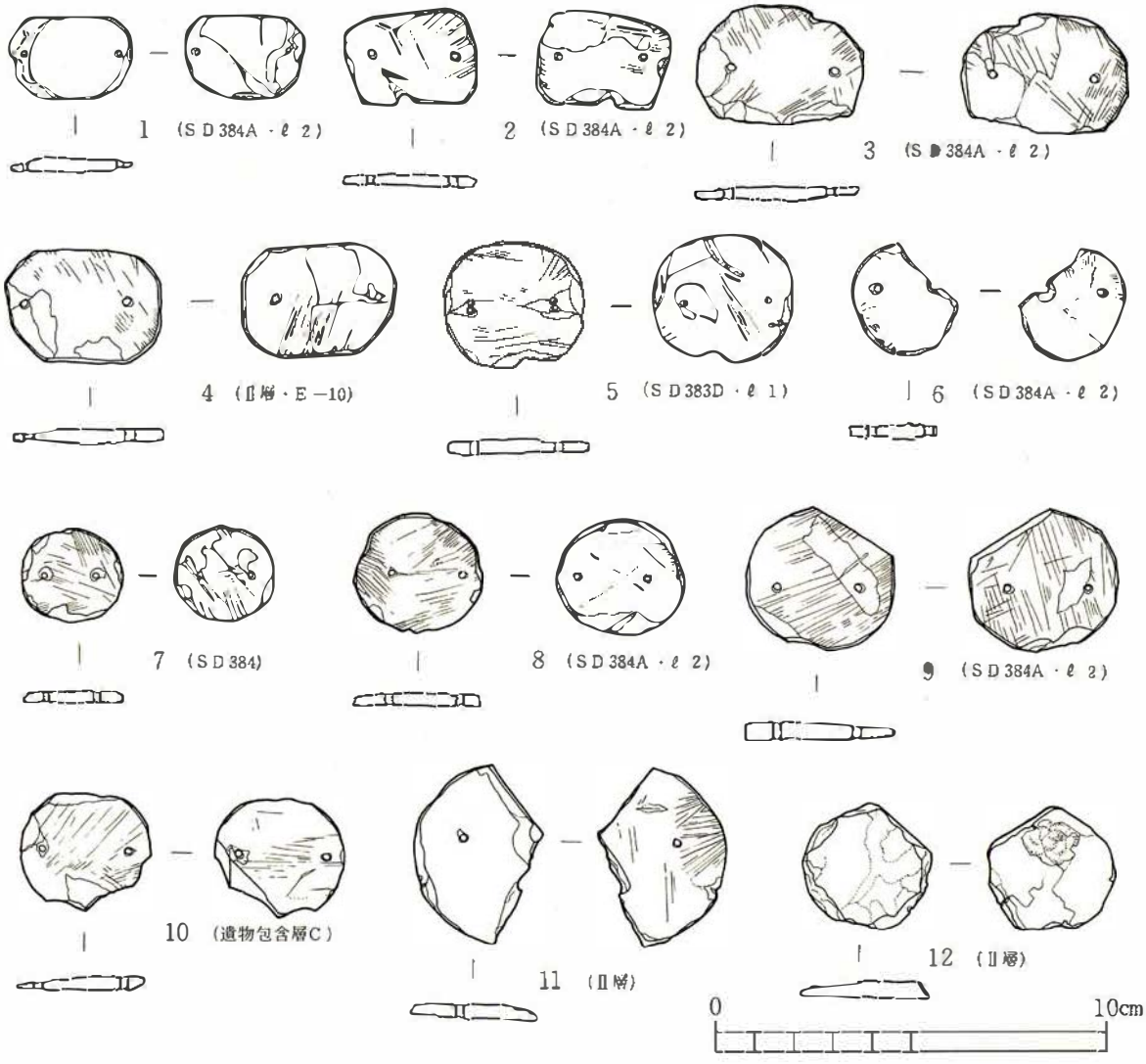
石製品には、石製模造品、石器、砥石、使用痕・加工痕のある礫が出土している。

〈石製模造品〉　第27図１～12

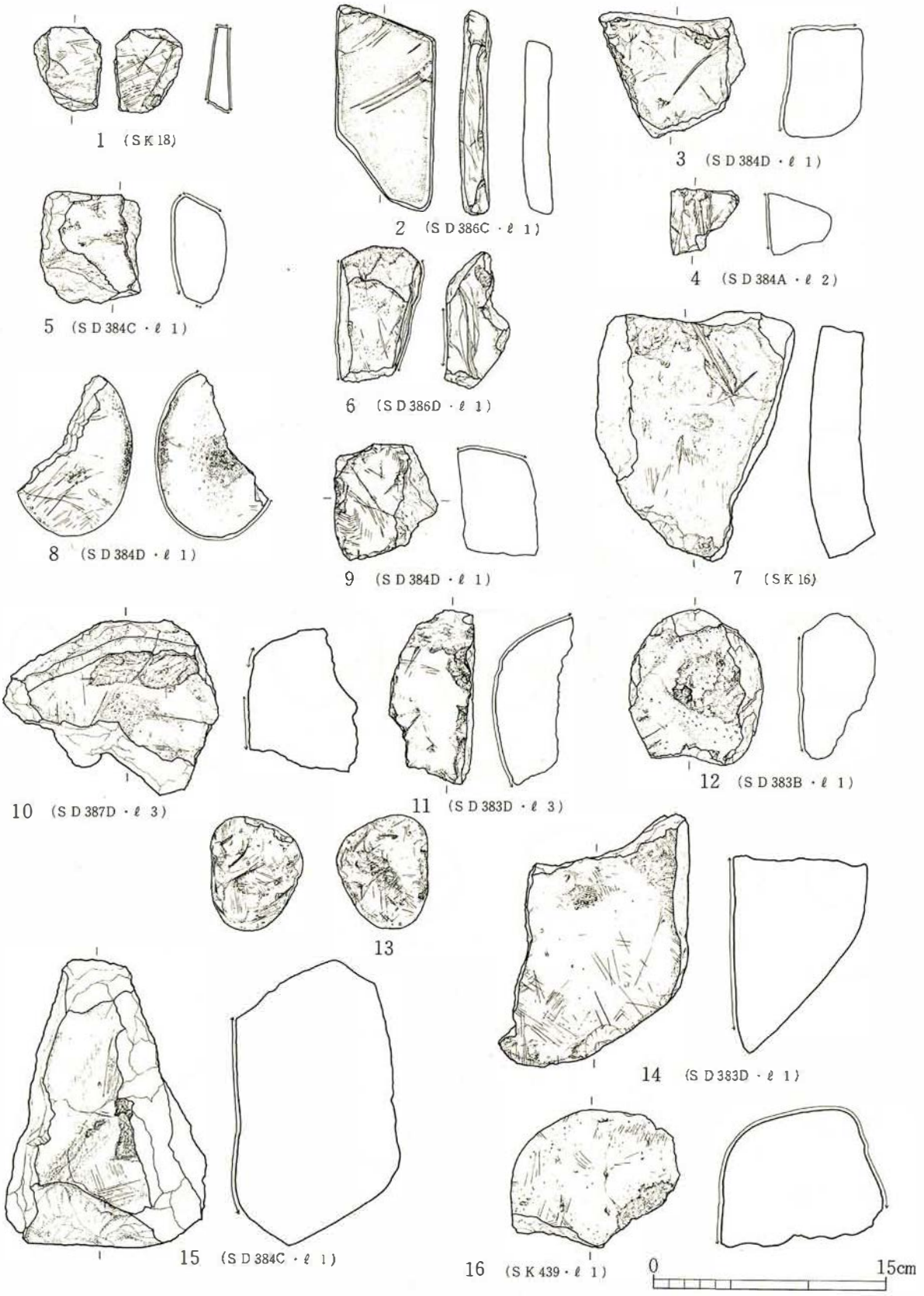
基本層第Ⅱ層、道跡側溝跡埋土から11点出土している。形態は円盤形を呈するものが多いが中には隅丸長方形のものもある。大きさは径2.5～5㎝、厚さ3～5㎜を計る。この他未製品が1点出土している（12）。

〈石器〉　第29図１

黒曜石製のラウンドスクレイパーが1点出土している。厚手の剝片素材と考えられ背面に自然面が残っている。刃部は比較的急角度の調整が加えられ、縁辺には細かなツブレが認められる。



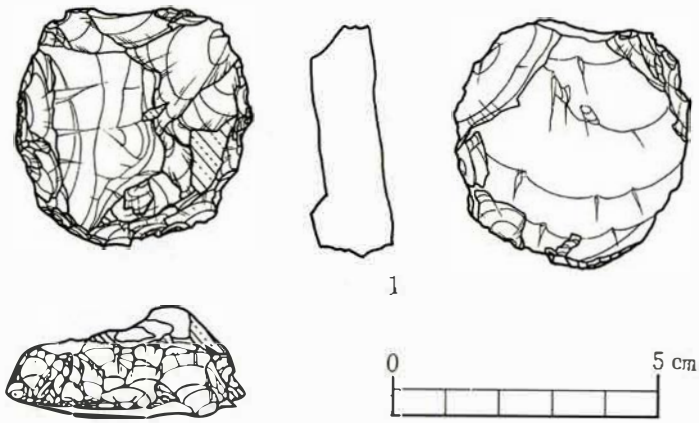
第27図　石製模造品実測図



第28図　石製品実測図（砥石・使用痕・加工痕のある礫）

〈砥石〉　第28図１～２

確実なものが２点ある。１は泥岩を素材としたもので大部分が破損している。２は砂岩を素材とし扁平なものである。いずれにも磨痕、擦痕、線状痕の使用痕が観察された。これらは石の目が比較的細かいもので仕上砥～中砥として使用されたものと考えられる。



第29図　石器(ラウンドスクレイパー)実測図

〈使用痕・加工痕のある礫〉

比較的大形の礫を素材とし、この表面に磨痕、擦痕、溝状痕（線状痕）、敲打痕、くぼみなどの使用痕・加工痕のあるものを一括してまとめた。14点出土している（第28図３～16）。石質は砂岩・安山岩が多い。この内14～15は形態、溝状痕（線状痕）の特徴から砥石（荒砥）と考えられる。また８については縄文時代の凹石と類似しており、この時代のものの可能性がある。その他については今後完形品の出土をまって用途や機能について検討したい。

４．縄文・弥生土器

基本層位第Ⅱ層および道路側溝跡埋土から出土している。

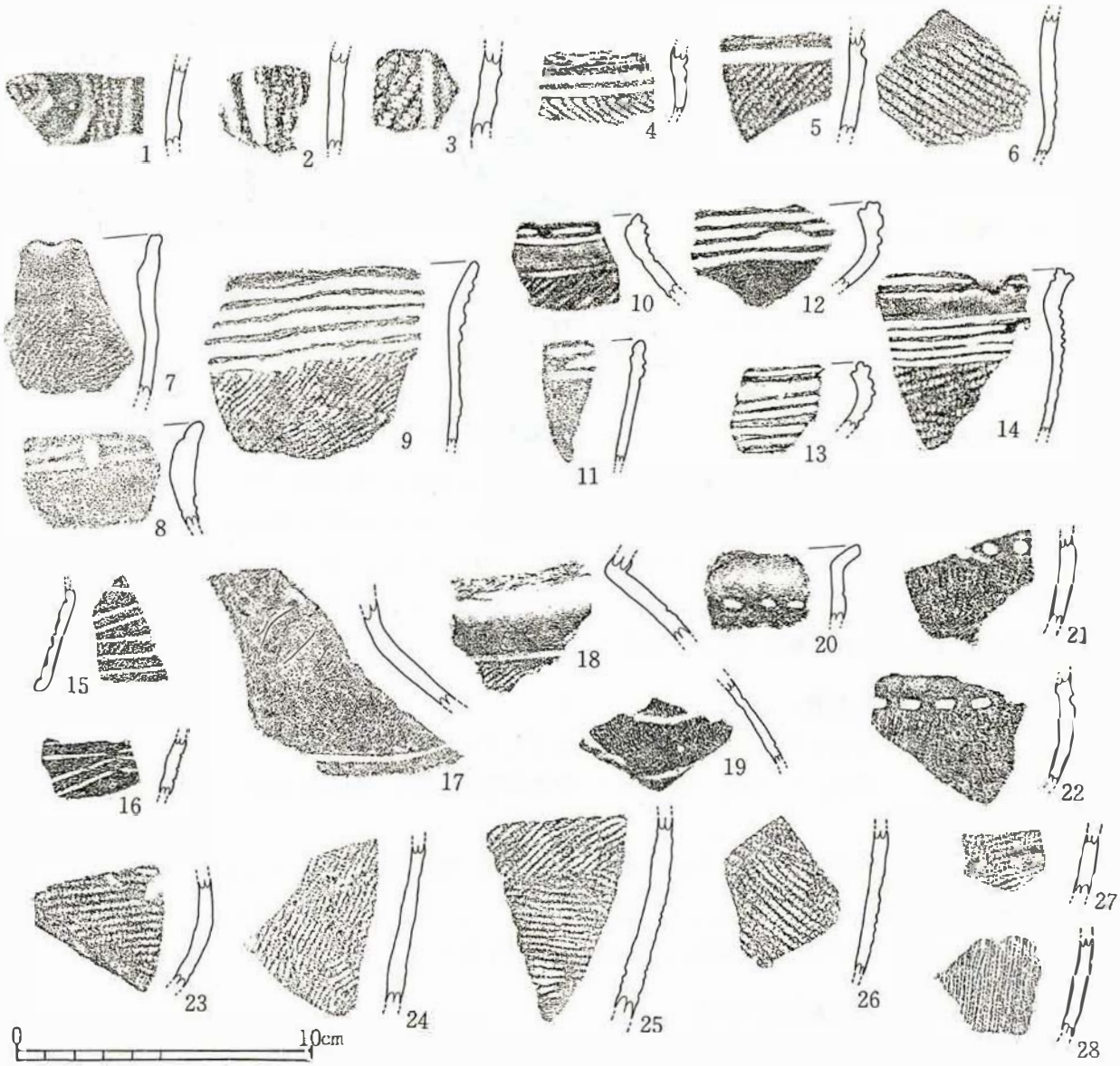
縄文土器：　第30図１～14までのもので、中期後葉のものと、晩期大洞Ａ式に相当するものがある。

弥生土器：　第30図15～22までのもので、寺下囲式～桝形囲式にかけてのものである。

その他に地文のみのものがある（第30図23～28）。これらについてはいずれかの時代に伴うものであるが、28に関しては特徴的な撚糸文より弥生時代のものである。

５．中世以隆の遺構と遺物

ここで扱う中世以降の遺構とは、不整楕円、楕円、方形、溝状の形を呈する土拡で、埋土が黄褐色砂（第Ⅱ層）と黄灰色粘土ブロックが混じり合う土で人為的に埋め戻されたものを指していう。断面形はほぼ逆台形状を呈するものが大半を占めるが、中には舟底状のものもある。深さは0.4ｍ～0.7ｍを計る。他の遺構との重複関係では、ＳＫ 461～463がＳＤ 467に切られている他はすべての遺構（古代）を切って構築している。底面上から検出される遺物はなく、時期を決定する決め手に欠けるが、埋土中からは古代の土器破片の他、ＳＫ 438から陶器片、ＳＫ 455から磁器片、ＳＫ 464から常滑産の甕（近世）が出土している。また、第４次調査区でも同様な土拡を検出しており、中世の板草履が出土している。これらのことから、本遺構については大まかに中世～近代の幅広い年代を考えておきたい。性格についてはこれまでの資料のみでは詳しく言及できないが、掘削されてから比較的短期間で埋め戻されているものと見られる。これらの概要については第７表に示した。



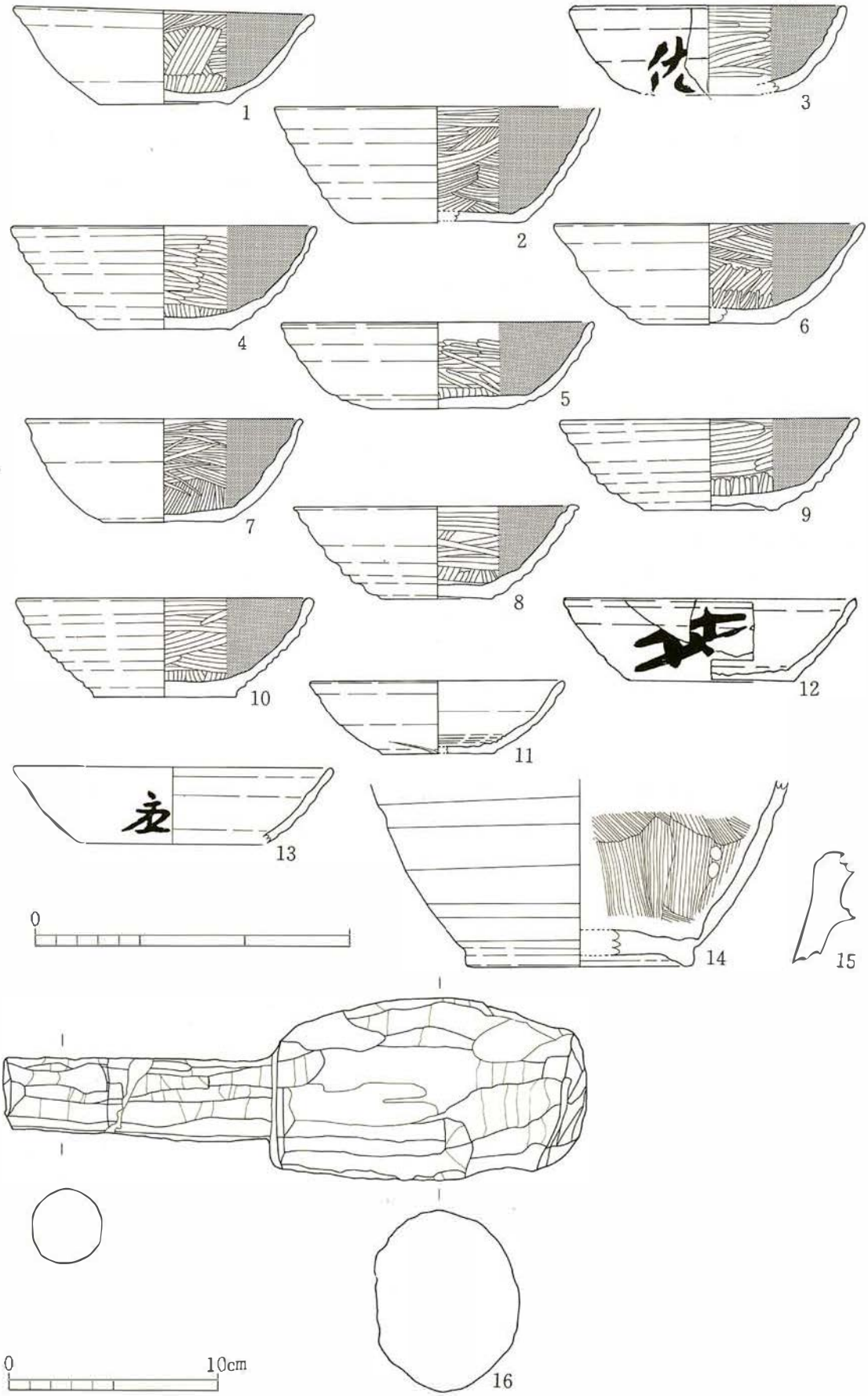
第30図　縄文・弥生土器

Ⅴ　ま　と　め

今回の発掘調査では、古墳時代と平安時代の遺構、及び縄文時代～江戸時代の遺物を検出した。ここでは古墳時代の木組み遺構と平安時代の遺路跡を中心に若干のまとめをしておきたい。

－古墳時代－

当初、地山と考えていた第Ⅱ層に土師器がめり込んでいたことから端を発した古墳時代の発掘調査は、予想もしなかった木組み遺構の発見により大きな成果を納めることができた。この



第31図　中世以降の土坑出土遺物実測図

木組み遺構を覆っていた砂層（第Ⅱ層）は、その堆積のあり方から河川の氾濫等により供給されたものと考えられる。また、調査区の制限からどのような分布域をもつものなのか明らかにし得なかったが、かなり規模の大きい河川の堆積層ということは言えようか。そして木組み遺構は河川の中に造られた構築物としてとらえることができる。この河川の存在を裏付けるかどうか確信は得られなかったが、西側に隣接する第４次調査区の東端付近で地山が東方へ落ちていくことが確認されている。

さて、この木組み遺構が河川中に存在した場合、如何なる性格を有するものであろうか。若干検討してみたい。このような立杭・横木・斜材からなる構築物が河川中に存在した場合、まず考えられるのは堰であろう。これまでの弥生・古墳時代の発掘調査例(註４)を参考にしてみると、基本的な構造が山王遺跡の例と良く似ているのがわかる。さらにイネ科植物や枝材を敷き詰める例は大阪府池島遺跡、山賀遺跡、利倉遺跡、福岡県那珂君休遺跡等で知られている。これらの類似例から山王遺跡・木組みの遺構の性格は堰とするのが妥当ではなかろうか。ただし、福岡県鶴町遺跡の堤防状遺構と称するものに本木組み遺構のＧ列～Ｊ列が構造的に類似しており、このような性格も考慮する必要はあろう。

なお、木組み遺構を構成する部材毎の樹種は次のようになる。立杭：クヌギ７点、ハンノキ１点、横木：クヌギ４点、トリネコ類１点、斜材：トチノキ10点、サクラ４点、ヌルデ１点、モミ１点、建築材（横木）：クリ１点、流木：ニレノキ１点。立杭・横木はクヌギを中心に、斜材はトチノキ、サクラを中心に選択されていることがわかる。

－古　代－

道路跡に先行する遺物包含層（Ｃ～Ｄ層）の土器についてまず検討する。この層から出土している土器には前述したとおり土師器・須恵器がある。土師器杯の特徴としては、すべてロクロ未使用で外面の体部に緩い段や、沈線的な段が付くものと、底部から内湾気味に立ち上がりそのままに口縁に至るものとがある。底部は丸底で内面はヘラミガキ→黒色処理が施されている。甕もロクロ未使用のものである。須恵器は底部がヘラ切り→ヘラケズリ調整のものと、全面回転ヘラケズリ調整のものとがある。これらの特徴を有する土器群は多賀城跡のＡ群土器(註５)の様相に類似する。Ａ群土器の年代については８世紀代と考えられており、当該土器群についてもほぼこの頃とみておきたい。Ｂ層土器群については、層位的にＣ～Ｄ層土器群より新しいものとできるが、出土量が少ないため詳述はできない。しかしロクロ未使用の土師器を含むことから多賀城跡のＢ群土器に比定できるかもしれない。

次に道路側溝跡出土土器について検討する。道路側溝跡出土土器については、側溝跡の変遷のあり方から４期に分けられ、古い順にＡ～Ｄ期とたどれることが判明している。一番古いＡ期出土土器の特徴としては、土師器杯にはロクロ未使用のものとロクロ使用のものとがあり前者がわずかで後者が大半を占める。底部は回転糸切り無調整のものがあるが、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ調整を加えたものが多い。須恵器杯は口径に対する底径の割合が大きいもので、底部がヘラ切り無調整のものが多く、糸切りのものでも回転ヘラケズリなどの再調整が

加えられている。なお、赤焼き土器は含まれていない。A期土器群については多賀城跡のC～D群土器の様相を合わせもつものであるが、須恵器杯などの特徴はC群土器に近いであろう。年代についてはC群が9世紀前半、D群が9世紀後半頃と考えられており本A期土器群もほぼこの頃に比定しておきたい。C・D期土器群は杯に限ってみれば土師器・赤焼き土器が主体を成すもので、須恵器の割合が非常に少ないと言える。土師器杯の特徴としては底部切り離しが回転糸切りで無調整のものが多く、他の切り離し技法は少ない。赤焼き土器杯（註6）は法量的には比較的大型のものから小型のものまである。小型の杯は口径10cm前後のものもあり、多賀城跡のF群土器の小型杯に類似するものであるが、高台小型杯は含まれていない。本C・D土器群は灰白色火山灰との関係、あるいは土器の様相から多賀城跡のE・F群土器の段階に相当するものとみられる。F群土器には、10世紀中頃の年代が与えられている。ただし、多賀城外のF群土器相当土器群の存続期間が多賀城内のそれと同一かどうかも今後検討せねばならないであろう。以上の検討により今回検出した道路跡の存続期間については、おおむね9世紀～10世紀中頃としておきたい。

SX 382東西道路跡とSX 468南北道路跡の交わる付近は周辺より一段低い地形であり、そこに遺物包含層が形成されていた。さらにその周辺に整地盛土し道路面を構築している状況が確かめられた。

東西道路の方向は、第4次調査で検出したSX 200東西道路跡と今回検出したSX 382東西道路跡の2点間、約116mの間で求められる方向はE－8°37′－Sである。この方位は多賀城跡外郭南辺築地の方向（E－7°～8°－S）とほぼ一致するものであり、築地の方位を範とした可能性を指摘できよう。なお、南辺築地との推定平行距離は約540m（約5町）である。

今回検出した道路跡の他に多賀城周辺では、西から新田遺跡（註7）、山王遺跡・仙塩道路関連調査（註8）、市川橋遺跡（註9）、多賀城跡第37次調査（註10）、で確認されている。これらの成果によると、年代的にはおおむね平安時代、方位的には多賀城跡政庁中軸線に平行するものと、多賀城跡外郭南辺築地に平行するものとがある。路幅については、3～5mのものと11～13mのものとがあり、前者は南北道路、後者は東西道路にみられる。ただし山王遺跡・仙塩道路関連八幡地区検出の東西道路については後者である。次にこれら道路跡の位置関係についてみると、現段階では、道路跡の検出例が限られており、連続性を実証できるものはほとんどない。しかし、例えば、本地区検出の東西道路と仙塩道路関連八幡地区の東西道路との路離は約2町あり、1町を単位とした地割りが行われていた可能性は高いと考えられる。

次に本地区で検出した遺構（掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡）と道路跡の関係について述べる。掘立柱建物跡はSX 468南北道路跡の東側で検出した。方位は、N－1°～3°－Eの間にすべて納まり、多賀城跡中軸線の方位に近いと言える。年代は出土遺物が勤少であるため詳しくは述べられないが、SB 390A・Bより内面黒色処理を施したロクロ未使用の土師器杯・甕の破片が出土している。これらの出土遺物は奈良時代（多賀城跡・A群土器）の特徴を持つものである。他の建物跡については、方位的には一致は見るものの、年代の特定はできず、SB390A・Bとの同時性についても確実とは言えない。道路跡との位置関係からみると、SD 387C側溝

跡に接続するＳＤ 417は区画溝と考えられ、建物跡はその北側一帯に分布している。このことは建物跡がＳＤ 417区画溝に規制を受け建てられたものとも推察できる。以上のことから本地区検出の掘主柱建物跡と道路跡のセット関係は年代と方位からみるとずれが生じているが、位置関係からすると肯定できる面もありいずれとも判断が下し難い。

井戸跡から出土した土師器の杯類は、すべて製作にロクロ使用したもので、底部の切り離しが回転糸切りのものである。そしてこれに赤焼き土器杯・高台小型杯が加わる構成を成している。これらの土器の特徴は多賀城跡のＥ・Ｆ群土器対比される。したがって本道路跡のＣ・Ｄ期に機能していたものとされよう。

溝跡はＳＤ 399、ＳＤ 412～ＳＤ 414について検討する。これらの溝跡はＳＤ 384南側溝跡の南側に並行して走っており、ＳＤ 399には側溝跡と同様に灰白色火山灰層を介して４期の変遷が認められた。この溝跡については道路南側に展開する屋敷等を区割りする溝の一部とみておきたい。

今回の調査では以上のような成果が得られ、国府多賀城によって規制を受けた地域として、さらに認識を深める資料を提供することとなった。今後は今回あまり触れられなかった多賀城周辺の地割りの問題を含めて総合的に検討していく必要があろう。

〈註〉

註１　この植物遺体の同定については東北大学農学部星川清親氏に御教示を得た。

註２　多賀城市教育委員会『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告書第２集（1981）

註３　この件については渡辺泰伸氏（仙台育英学園高等学校）の御教示を得た。

註４　島田義明・柳本照男『利倉遺跡』（1976）
古照遺跡調査団編『古照遺跡』松山市文化財調査報告書Ⅳ（1974）
大阪府教育委員会『池島遺跡試掘調査概要・Ⅰ』（1982）
杉本二郎他『山賀（その１）』大阪文化財センター（1983）
石神　怡他『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大阪文化財センター（1984）
力武卓治他『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集（1976）
福岡市教育委員会『那珂深ヲサ遺跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集（1981）
福岡市教育委員会『那珂深ヲサ遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集（1982）
福岡市教育委員会『那珂久平遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集（1987）
福岡市教育委員会『那珂君休遺跡Ⅳ』福岡埋蔵文化財調査報告書第208集（1989）

註５　白鳥良一『多賀城跡出土土器の変遷』宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅶ」（1980）
宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡・政庁跡本文編』（1982）

註６　多賀城跡・政庁跡本文編によれば須恵系土器は10世紀以降に出現すると考えられている。本報告書で赤焼き土器としたものは、細部で若干の違いはあるが、この須恵系土器と同様のものとみている。

註７　多賀城市埋蔵文化財調査センター『新田遺跡第11次調査・現地説明会資料』（1989）

註８　鈴木真一郎『山王遺跡・市川橋遺跡の発掘調査について』昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会要旨（1988）
赤沢靖章他『山王遺跡（八幡地区）』平成元年度宮城県内発掘調査成果発表要旨（1989）

註９　多賀城市教育委員会『市川橋遺跡調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第４集（1983）

註10　白鳥良一『第37次発掘調査ー多賀城跡ー』宮城県多賀城跡調査研究所年報1980（1981）

第２表　古墳時代土器観察表

図番号	種別	器種	グリット	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版
第7図1	土師器	高杯	D－8	杯部：ハケメミガキ	杯部：ハケメヘラミガキ		19.4			内外面朱塗り	9－1
第7図2	土師器	高杯	B－9	脚部：ヘラナデ、ヘラミガキ	脚部：指ナデ、ヨコナデ	脚部のみ		14.2			9－2
第7図3	土師器	器台	D－10	杯部：ヘラミガキ	杯部：ヘラミガキ	杯部のみ	(7.8)				
第7図4	土師器	杯	B－9	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	完形	14.8		14.8		9－3
第7図5	土師器	杯	B－9	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ	3／4	14.0	3.2	6.3		9－4
第7図6	土師器	杯	D－12	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	2／5	(11.6)		(6.8)		9－5
第7図7	土師器	杯	B－9	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ	3／4	13.0		9.5		9－6
第7図8	土師器	杯	B－9	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	完形	14.8		6.5		9－7
第7図9	土師器	鉢		ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	口縁部のみ	(20.0)				9－8
第7図10	土師器	壺	G－11	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部のみ	(21.4)			口縁端部に刻み目	9－9
第7図11	土師器	壺		ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラケズリ	底部欠損	(8.8)				9－10
第7図12	土師器	壺	F－11	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	完形	7.7	3.8	8.6		9－11
第7図13	土師器	甕	B－9	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	1／3	(17.4)				9－12
第7図14	須恵器	杯	B－10	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	1／5	(10.8)		(6.9)		

第３表　道路側溝跡Ａ期出土遺物観察表

図番号	種別	器種	遺構単位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版
第10図6	土師器	杯	SD－384 ℓ－1	口縁部ロクロ、口縁部ヘラミガキ ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	(16.0)	(6.6)	(3.5)		
第10図7	土師器	杯	SD－384 ℓ－1	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／5	(13.8)	(6.0)	(4.3)		
第10図8	土師器	杯	SD－387 ℓ－1	ロクロナデ、底部回転ヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(13.8)	6.2	4.1	黒斑体部と底部に「土」有	10－8
第10図9	須恵器	杯	SD－390 ℓ－1	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	1／2	13.2	7.0	3.5		10－10
第10図10	須恵器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り 体部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ほぼ完形	12.6	7.3	3.9		10－9
第10図11	須恵器	杯	SD－383 底面上	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	完形に近い	12.8	6.6	4.4	底部に墨書「本」	10－11
第10図12	須恵器	蓋	SD－385 ℓ－1	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1／2	(12.0)			宮台径8.2 宮台高0.9	10－13
第10図13	須恵器	蓋	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ	ロクロナデ	1／4				つまみ径3.2つまみ高0.9	10－12
第10図14	土師器	甕	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、天井部ヘラケズリ	ロクロナデ	1／5	(11.2)		(4.3)	古墳時代	

第４表　道路測溝跡Ｃ・Ｄ期出土遺物観察表

図番号	種別	器種	遺構単位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版
第12図1	土師器	杯	SD－384 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(14.4)	6.4	(4.1)	Ⅰ類	
第12図2	土師器	杯	SD－387 ℓ－2	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ	3／5	(13.4)	5.4	(4.3)	Ⅰ類	
第12図3	土師器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底手持ちヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(14.0)	(5.6)	(4.0)	Ⅰ類	
第12図4	土師器	杯	SD－386 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り、のち手持ちヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	ほぼ完形	13.8	6.9	3.7	体部2箇所に「墨」？有	10－1
第12図5	土師器	杯	SD－386 ℓ－3	ロクロナデ、底手持ちヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	1／5	(14.6)	(6.2)	(4.2)	Ⅰ類	
第12図6	土師器	杯	SD－384 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	黒色処理	1／2	(14.4)	5.6	4.4	Ⅰ類	
第12図7	土師器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／3	(14.4)	(6.4)	4.4	Ⅰ類	
第12図8	土師器	杯	SD－390 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(13.4)	(6.0)	(4.8)	Ⅱa類	
第12図9	土師器	杯	SD－386 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	黒色処理	1／5	(13.2)	4.4	(4.7)	Ⅱa類	
第12図10	土師器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ	2／5	(13.4)	(5.0)	4.9	Ⅱa類	
第12図11	土師器	杯	SD－386 ℓ－2	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	3／5	(15.0)	6.0	4.6	Ⅱb類	10－3
第12図12	土師器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／6	(17.0)	5.2	(4.8)	Ⅱb類	10－2
第12図13	土師器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	2／5	(15.6)	(6.2)	(5.8)	Ⅱb類	
第12図14	土師器	杯	SD－384 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	黒色処理	1／4	(14.4)	6.4	(5.2)	Ⅱb類	
第12図15	土師器	杯	SD－387 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	(15.0)	6.1	(5.5)	Ⅱb類	
第12図16	土師器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	3／5	(14.8)	5.9	(5.3)	Ⅱb類	

図番号	種別	器種	遺構番号	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版
第12図17	土師器	杯	SD－387	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ	ほぼ完形	15.6	6.4	5.7	内面底部中央に「十」のヘラ書 Ⅱb類	10－4
第12図18	土師器	杯	SD－385 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	3／4	15.7	7.8	5.9	Ⅱb類	10－5
第12図19	土師器	杯	SD－384 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	15.8	6.4	5.3	Ⅱb類	
第12図20	土師器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	(15.0)	(6.0)	5.0	Ⅱb類	10－6
第13図1	土師器	杯	SD－384 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	底体下部片		6.3			
第13図2	土師器	高台杯	SD－387 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り		底～体部					
第13図3	土師器	杯	SD－386 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	底～体下部		6.1			
第13図4	土師器	杯	SD－386 ℓ－1			体部片				外面に墨が「点」有	
第13図5	土師器	甕	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り		1／4	(15.0)		(7.5)		
第13図6	土師器	高台杯	SD－387 ℓ－2	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	(14.0)		(5.6)	高台径6.6	
第13図7	土師器	高台杯	SD－386 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(15.5)	6.2	(5.5)		10－7
第13図8	須恵器	壺	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	口縁・頸部	13.2				
第14図1	赤焼き土器	杯	SD－384 ℓ－1	全体的に調整痕不明	ロクロナデ	1／4	(10.6)	(4.0)	(2.8)	Ⅰa類	
第14図2	赤焼き土器	杯	SD－386 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／2	10.4	5.1	2.4	Ⅰa類	
第14図3	赤焼き土器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	3／5	11.0	4.6	2.8	Ⅰa類	11－1
第14図4	赤焼き土器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／4	(12.4)	4.2	(3.7)	Ⅰb類	
第14図5	赤焼き土器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	完形	11.0	4.7	3.1	Ⅰb類	11－3
第14図6	赤焼き土器	杯	SD－384 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	3／4	11.6	4.8	3.3	Ⅰb類	11－2
第14図7	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－2	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	完形	11.6	5.0	3.5	Ⅰb類	11－4
第14図8	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－2	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	3／5	12.2	5.2	3.3	Ⅰb類	11－6
第14図9	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	完形	11.2	5.0	3.2	Ⅰb類	11－5
第14図10	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／3	(12.4)	5.0	(3.1)	Ⅰb類	11－7
第14図11	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／3	(12.4)	(4.6)	(3.0)	Ⅰb類	11－9
第14図12	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	完形	12.6	4.7	3.7	Ⅰb類	11－8
第14図13	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	完形	12.4	5.0	3.7	Ⅰb類	11－10
第14図14	赤焼き土器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	底損しているが一部完形	12.4	3.9	3.6	Ⅰb類	11－12
第14図15	赤焼き土器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	完形	12.6	4.8	3.8	Ⅰb類	11－11
第14図16	赤焼き土器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形	13.7	5.2	4.4	Ⅰc類	
第14図17	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／2	(14.0)	5.2	4.1	Ⅰc類	
第14図18	赤焼き土器	杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／2	(14.0)	(5.2)	(3.9)	Ⅰc類	
第14図19	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／4	(13.2)	(4.4)	(4.2)	Ⅰc類	
第14図20	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／5	(11.4)	4.5	(4.3)	Ⅰc類	
第14図21	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／2	12.4	5.0	4.0	Ⅰc類	11－13
第14図22	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	2／5	(15.4)	(6.3)	(4.9)	Ⅰc類	11－15
第14図23	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	2／5	(19.4)	(7.4)	(7.2)	Ⅱ類	11－14
第15図1	赤焼き土器	高台杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／3	(15.2)	8.2	5.5		
第15図2	赤焼き土器	高台付椀	SD－386 ℓ－2	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／2	(15.4)		4.8	高台径7.5	11－16
第15図3	赤焼き土器	杯	SD－387 ℓ－4	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／5	(14.6)			体部に墨書「仁」有	
第15図4	赤焼き土器	高台付椀	SD－386 ℓ－1	ロクロナデ	ロクロナデ	完形	15.8		6.0	高台径6.8	11－17
第15図5	赤焼き土器	高台杯	SD－387 ℓ－2	全面的に調整痕は不明	ロクロナデ	底部				高台径7.4 高台高0.6	
第15図6	赤焼き土器	高台杯	SD－383 ℓ－1	ロクロナデ、手持ちヘラ削りのちナデ	ロクロナデ	底～体下端				高台径8.6 高台高1.6	
第15図7	木製品	盤	SD－383 ℓ－1			ほぼ完形	16.0	(10.4)	1.4		13－7
第15図8	瀬戸	椀	SD－383C ℓ－1			台部欠損	(14.0)		(6.0)		13－8
第15図9	土師器	甕	SX－382 路面	ロクロナデ、ケズリ	ナデ・ケズリ	底部欠損	(20.8)		(36.0)		13－1
第15図10	土師器	甕	SX－383 路面	ロクロナデ、ケズリ	ナデ	体部上半	(21.6)		(22.4)		13－2

第５表　井戸跡出土遺物観察表

図番号	種別	器種	遺構部位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版
第20図1	土師器	杯	SE-392B 井戸内覆土	ロクロナデ、底手持ちヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	1／3	(13.4)	(7.2)	(4.6)		12－1
第20図2	土師器	杯	SE-392B 井戸内覆土	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	4／5	13.6	5.1	4.7		12－2
第20図3	土師器	杯	SE-392B 井戸内覆土	ロクロナデ、底手持ちヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	ほぼ完形	13.6		5.0		12－3
第20図4	土師器	杯	SE-392B 井戸内覆土	ロクロ調整後ヘラミガキ　底回転糸切り後手持ちヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	3／5	14.4	6.0	5.6		12－4
第20図5	土師器	杯	SE-392B 掘り方	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	(14.1)	5.2	(4.7)		12－5
第20図6	土師器	杯	SE-392B 掘り方	黒色処理 ヘラミガキ　底回転糸切りのち軽くヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理	1／3	(12.8)	(5.4)	(4.0)		
第20図7	土師器	杯	SE-392A 掘り方覆土	ロクロナデ、底手持ちヘラ削り	ヘラミガキ→黒色処理	1／3	(16.1)	(8.4)	(5.3)		12－6
第20図8	土師器	高台杯	SE-392A 掘り方	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	完形	16.4	5.6	5.3		12－7
第20図9	赤焼き土器	付付皿	SE-392B 井戸内覆土	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形	12.8		2.9	高台径6.2	12－9
第20図10	須恵器	杯	SE-392B 井戸内覆土	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ		14.0	5.0		墨書「五」	12－8
第20図11	須恵器	壺	SE-392B 井戸内覆土	ロクロナデ　底手持ちヘラ削りのち軽くナデ	ロクロナデ	底体下半部				高台径8.6 高台高0.4	12－10
第20図12	須恵器	蓋	SE-392A 掘り方覆土	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形	5.6		12.2	[illegible]	12－12
第20図13	木製品	斎串	SE-392B 井戸内覆土			完形				長さ14.1cm幅1.4cm	
第23図1	赤焼き土器	杯	SE-393 掘り方覆土	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／4	(11.4)	(4.2)	(3.7)	全面に油煙が付着	
第23図2	土師器	杯	SE-395B ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	底体下部片		(5.2)		墨書「生」	
第23図3	土師器	杯	SE-395B 掘り方覆土	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／3	(15.8)	5.7	5.8		
第23図4	土師器	杯	SE-395B 底穴	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	3／4	(14.6)	5.7	(5.2)	墨書「火」	12－11
第23図5	瓦	平瓦	SE-395A								12－13

第６表　溝・土坑出土遺物観察表

図番号	種別	器種	遺構部位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版
第25図1	土師器	杯	SD-397 ℓ－1	ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(19.4)		(4.2)		
第25図2	土師器	杯	SD-400 ℓ－1	ロクロナデ、底手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	3／5	(15.6)	6.0	(5.4)		
第25図3	土師器	高台杯	SD-400 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ミガキ→黒色処理	高台～底部				高台径10.6 高台高2.7	
第25図4	赤焼き土器	杯	SD-400 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／2	(13.0)	3.9	3.4		
第25図5	須恵器	杯	SD-473 ℓ－1	ロクロナデ、底回転ヘラ切り	ロクロナデ	完形	13.4	6.8	4.15	底部に墨痕	
第25図6	須恵器	壺	SD-399 ℓ－1	ロクロナデ、底ヘラナデ	ロクロナデ			6.8		胴径13.8 [illegible]	
第31図1	土師器	杯	SK-440 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	ほぼ完形	14.4	6.3	4.7		
第31図2	土師器	杯	SK-423 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	(15.6)	(8.0)	(5.5)		
第31図3	土師器	杯	SK-428	ロクロナデ、底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	1／6	(13.2)			体部墨書「佐」	
第31図4	土師器	杯	SK-428 床面	ロクロナデ、底手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	1／2	(14.6)	(6.4)	(4.9)		
第31図5	土師器	杯	SK-428 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(14.9)	(6.2)	(4.1)		
第31図6	土師器	杯	SK-428 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／4	(14.8)	(6.2)	(4.8)		
第31図7	土師器	杯	SK-451 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切りのち軽くナデ	ヘラミガキ→黒色処理	3／5	(13.2)	5.8	4.9		
第31図8	土師器	杯	SK-432 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	1／3	(13.6)	(5.1)	(4.4)		
第31図9	土師器	杯	SK-432 ℓ－3	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	3／4	(14.2)	(6.4)	(4.3)		
第31図10	土師器	杯	SK-433 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	3／5	(14.2)	(6.8)	(4.7)		
第31図11	赤焼き土器	杯	SK-446 ℓ－1	ロクロナデ、底回転糸切り	ロクロナデ	1／6	(12.2)	(5.4)	(3.5)		
第31図12	須恵器	杯	SK-429 ℓ－2	ロクロナデ、底回転ヘラ切り	ロクロナデ	ほぼ完形	14.0	7.8	3.9	墨書「井」	
第31図13	須恵器	杯	SK-432 ℓ－1	ロクロナデ	ロクロナデ		(15.3)			墨書「五」体部外	
第31図14	須恵器	壺	SK-428 ℓ－1	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1／4				高台径(10.8)高台高(0.6)	
第31図15	陶器	壺	SK-464 ℓ－1							口縁部破片（常滑焼）	
第31図16	木製品	ヨコヅチ	SK-447 底面								13－6

第７表　中世以降の遺構と遺物の概要

遺構名	位　置	重　複　関　係	平面形	長軸×短軸×深さ(m)	遺　　物
SK435	C・D－2・3	な　し	不整楕円	3.64×2.4×0.52	土師器甕
SK436	D・E－4	〃	溝　状	5.5×1.38×0.4	土師器杯・甕、須恵器杯
SK437	E－5	〃	不整楕円	2.6×1.28×0.26	な　し
SK438	E－8	〃	不整円形	1.14×0.94×0.45	陶器
SK439	A・B－5	〃	楕　円	1.75×1.35×0.71	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、丸瓦
SK440	B－9・10	〃	円	1.0×1.0×0.1	土師器杯(第32図1)・甕
SK441	J・K－10	〃	方形？	5.18×(2.52)×0.5	縄文土器、土師器杯・甕
SK442	H・I－7・8	SD383→SK442	楕　円	2.25×1.44×0.9	土師器杯・甕、須恵器
SK443	C－5	な　し	〃	1.04×0.9×0.44	土師器杯・甕、須恵器甕
SK470	D・E－0・1	SK470→SD471	方　形	3.84×2.06×0.26	な　し
SK444	F・G－14～17	SD409 SK445→SK444	溝　状	8.76×1.1×0.5	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯
SK445	G・H－15・16	SD409 SD410→SK445→SK444	方　形	4.0×2.62×0.62	土師器杯・高台付杯・甕、須恵器甕、平瓦
SK446	H・I－13～16	SK430→SD408 SD409→SK446	溝　状	10.3×1.8×0.65	土師器杯・甕、須恵器壺・甕、赤焼き土器杯、丸瓦
SK447	I・J－14～16	SD383→SK447	隅丸方形	3.28×3.18×0.49	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、緑釉陶器、平瓦
SK448	J・K－16	SD383→SK448	〃	1.9×1.66×0.5	な　し
SK449	K・L－17	な　し	方　形	4.1×2.38	――― ※プラン確認のみ
SK450	L・M－17・18	〃	楕　円	1.76×1.08×0.43	土師器甕、須恵器甕
SK451	L－19	〃	方　形	1.14×0.82×0.36	土師器杯・甕
SK452	M－19	〃	楕　円	1.7×1.24×0.68	平瓦
SK453	E－15	〃	方　形	3.1×1.76×0.75	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦
SK454	E－15・16	SD409→SK454	〃	2.5×2.4×0.56	土師器杯・甕・蓋、須恵器甕、赤焼土器杯、丸瓦
SK455	G・H－22・23	な　し	〃	3.58×2.47×0.67	土師器杯・甕、須恵器杯、鐵器
SK456	F・G－25	SB390→SK456	方　形	3.4×1.5×0.56	土師器杯・甕、須恵器杯、甕・壺
SK457	C～E－23・24	SK458 SK459→SK457	溝　状	(7.4)×1.9×0.55	土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、平瓦
SK458	C・D－22・23	SK458→SK457	溝状？	(3.24)×1.38×0.42	土師器杯・甕、須恵器杯
SK459	D・E－22・23	P54→SK459→SK457	方　形	2.84×(2.44)×0.58	土師器杯・甕、須恵器甕
SK460	J・K－20・21	SD385 SD386→SK460	〃	5.18×2.5×0.72	土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・壺・甕、風炉「十」、平瓦、縄文土器
SK461	N－13・14	SD384→K461→SD467	不　明	(2.5)(1.12)×0.4	な　し
SK462	L－14	SK462→SD467	〃	(0.95)×(0.72)	〃
SK463	K－15・16	SK463→SD467	〃	1.3×0.76×0.12	〃
SK464	I～L－12・13	SD383→SK463	溝　状	8.3×(1.6)×0.65	赤焼き土器杯、平瓦、近世陶器甕(常滑)
SK465	E・F－28	な　し	方形？	(1.94)×(0.8)×0.6	な　し
SK466	K・L－18	〃	楕　円	1.2×0.52×0.4	〃
SD467	K～N－14～16	SD384・SK462 SK461・SK463→SD467	南北溝	全長11m以上、深さ0.6m	土師器杯・甕、須恵器杯・甕

多賀城市山王遺跡出土杭他の樹種同定

嶋　倉　己三郎

多賀城市山王字東町浦47他にある古墳時代の遺跡から出土した杭他32個の樹種を調査した。

試料は適当の大きさに採取され、材組織の保存状態は比較的良好であった。これから切片をつくり、ガムクロラールで封じ、簡易プレパラートとし検鏡した。

調査の結果を樹種別にまとめると次のようになった。

モミ：　試料番号 ― No.21

ハンノキ：試料番号 ― No.8

クリ：　試料番号 ― No.32

クヌギ：　試料番号 ― No.3．4．5．6．7．16．19．22．24．28．30．31

ニレノキ類：　試料番号 ― No.26

サクラ類：　試料番号 ― No.2．11．14．17

ヌルデ？：　試料番号 ― No.13

トチノキ：　試料番号 ― No.1．9．10．12．18．20．23．25．27．29

トネリコ類：　試料番号 ― No.15

最も多い樹種はクヌギで、杭列の殆ど全部（No.3．4．5．6．30．31）もこれである。この材質は強固で土木用にも適し、カシノキなどの乏しい東北地方では適材を選んだことになる。ただ1点、弱い材質のハンノキの杭があるが、これは応急修理のため、手近に生えていた木を用いたのではあるまいか。その他のクヌギ材は用途不明である。

次に多いトチノキは、縄文時代以降、種子は食用に、材は容器類その他に広く使用されてきた。材の加工痕から元の形が推定できたらと思う。

クリは柱材で、ほぞ穴付3mのものであるという。黒色変質が著しく、よい切片が作れない程硬化している。各地の遺跡からもクリの長柱や杭なども知られている。

材の構造略記

モミ　Abies　firma　Sieb.　et　Zucc.　　まつ科

仮道管と放射組織からなる針葉樹材である。放射組織の分野壁孔は小さなスギ型であり、接線壁にはジュズ状の凹凸がある。

ハンノキ　Alunus　japonica　Steud.　　かばのき科

散孔材、道管は中くらいの大きさで、階段穿孔。放射組織は同性で単列であるが、集合放射組織をつくっており、年輪界ではこの部分が内側へ入りこむことが多い。

クリ　Castanea　crenata　Sieb.　et　Zucc.　　ぶな科

早材部道管の大きな環孔材、晩材部へ移ると道管は急に小さくなり、多数集まって火炎状に並ぶ。放射組織は同性で、単列ばかりである。

クヌギ　Quercus　acutissima　Carruth.　　ぶな科

早材部道管の大きな環孔材、晩材部の小道管は円形で、単独に放射方向に並ぶ。放射組織は単列のものと、大きな広放射組織がある。

ニレ属の1種　Ulmus　sp.　　にれ科

環孔材、早材部の道管は大きく、1－2列。晩材部の小道管は多数集まって斜めまたは接線方向に並ぶ。放射組織は同性で、1－6細胞幅である。

サクラ類　Prunus　sp.　　ばら科

散孔材、やや小さな道管が単独または放射状接線状に複合して分布し、単穿孔、側壁にラセン肥厚がある。放射組織は同一異性で、1－5細胞幅である。

ヌルデ？　Rhus　japonica　L.　　うるし科

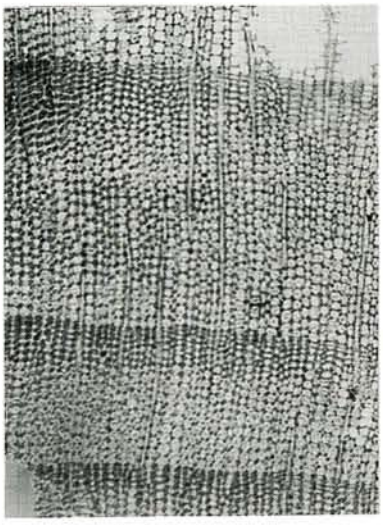
環孔材、早材部道管はやや大きく、多列。晩材部の終わりの部分付近では小道管が接線状か斜線状に短く連なっている。放射組織は異性で、1－4細胞幅である。

トチノキ　Aesculus　turbinata　Blume　　とちのき科

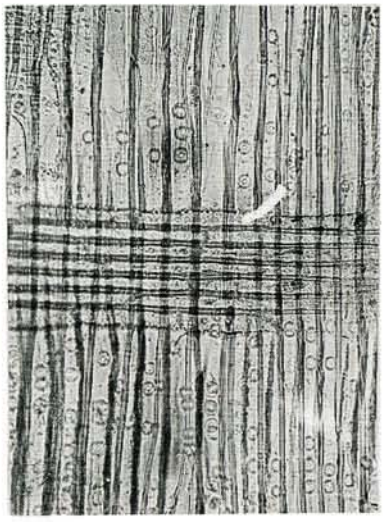
散孔材、道管は中くらいから、やや小さく、単穿孔、単独または放射方向に連接して分布する。放射組織は同性で単列、階層状の配列が著しい。

トネリコ属の1種　Fraxinus　sp.　　もくせい科

環孔材、早材部の道管はやや大きく、晩材部の小道管は厚壁で、単独または2－3複合して散在する。放射組織は同性で、1－3細胞幅である。

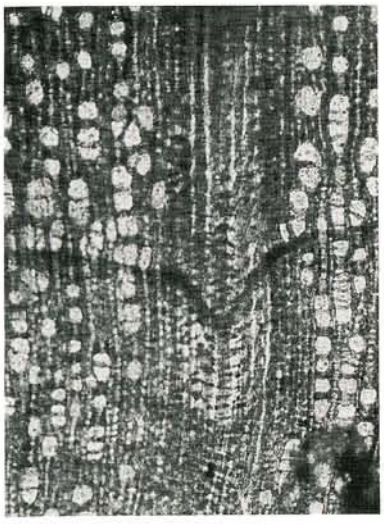


1. モミ(No.21)木口



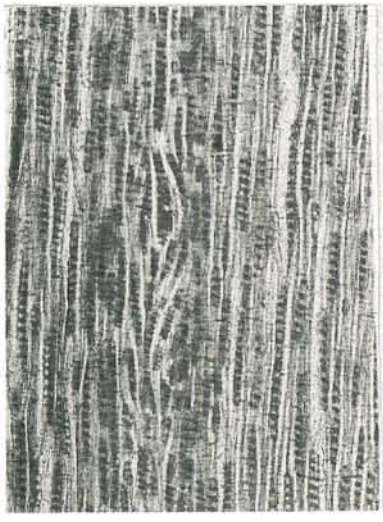
2. 同左、柾目

3. 同左、板目

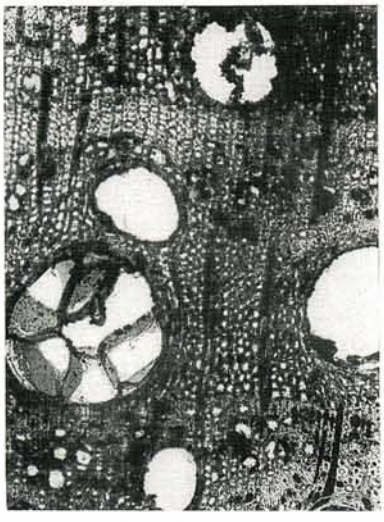


4. ハンノキ(No.8)木口

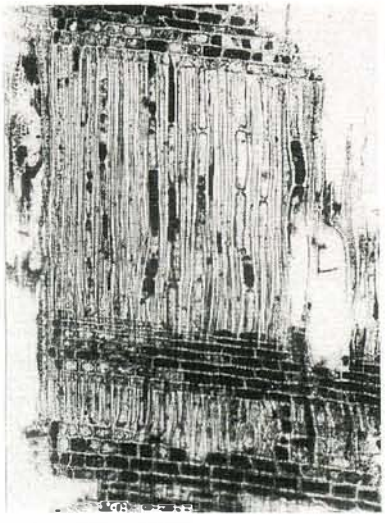
5. 同左、柾目



6. 同左、板目



7. クリ(No.32)木口

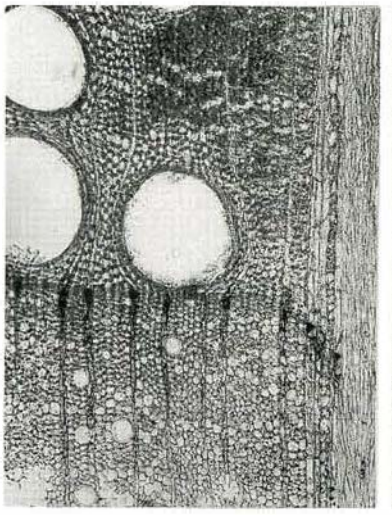


8. 同左、柾目

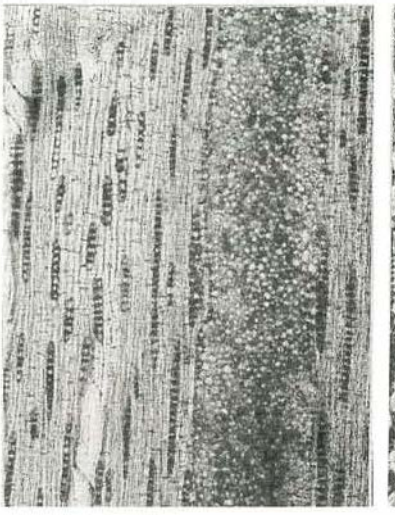
9. 同左、板目

山王遺跡出土杭他の顕微鏡写真(1)

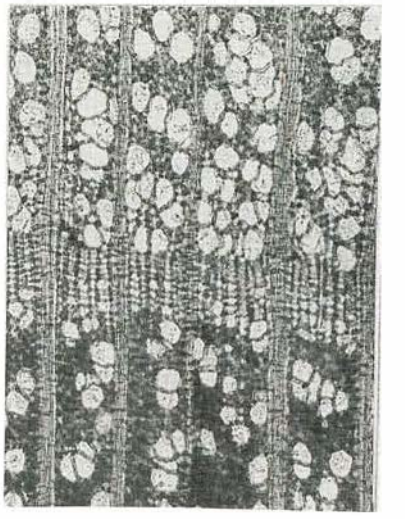
2.3は×100、その他は×50



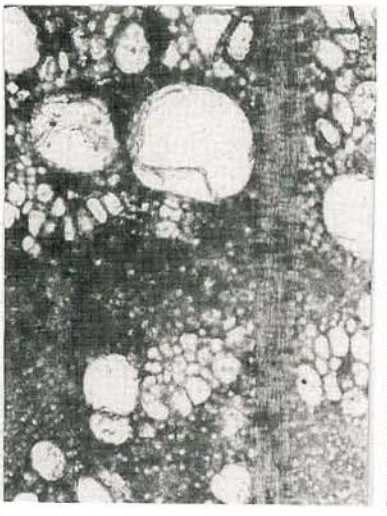
10. クヌギ(No.6)木口



11. 同左、板目



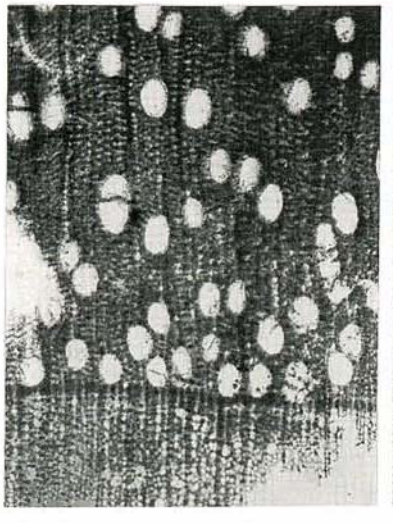
12. サクラ類(No.11)



13. ニレノキ類(No.26)木口

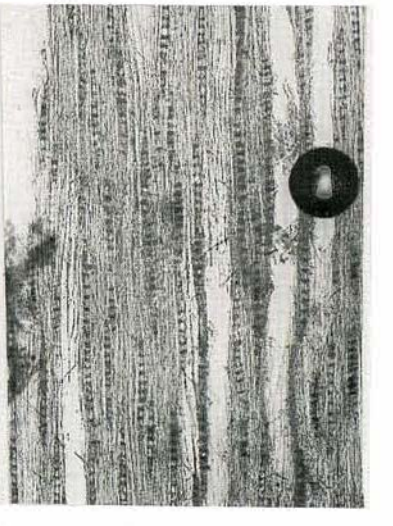
14. 同左、柾目

15. 同左、板目



16. トチノキ(No.27)木口

17. 同左、柾目



18. 同左、板目

山王遺跡出土杭他の顕微鏡写真(2)

鉄滓X線回折測定結果

平成2年3月
川鉄リクノリサーチ株式会社
総合検査・分析センター千葉事業所

X線回折測定件名

1．山王遺跡（鉄滓）の定性分析

2．試料番号

① No.1（SD384C）　② No.2（SD383B）　③ No.3（SD384D）
④ No.4（SD387D）　⑤ No.5（SE392・掘り方埋土）

3．測定条件

測定装置：理学電機株式会社製ガイガーフレックス（RSD－IIA型）

① 使用X線	Co－Kα（波長＝1.79021Å）
② Kβ線吸収フィルター	Fe
③ 管電圧・管電流	50kV・30mA
④ スキャニング・ステップ巾	0.020°
⑤ スキャニング・プリセット・タイム	0.4 sec
⑥ D. S. スリット	1°
⑦ R. S. スリット	0.3mm
⑧ S. S. スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

4．検索結果

同定された物質は、チャートに記入致しました。

鉄滓成分分析結果

単位：%

成分 / 試料名	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	MnO	P_2O_5	TiO_2	Al_2O_3
No. 1	3.75	0.11	1.08	4.00	68.8	0.14	0.33	0.57	14.5
No. 2	55.1	0.16	43.8	29.9	12.7	0.16	2.33	0.46	2.88
No. 3	39.1	0.12	40.5	10.7	29.6	0.14	0.39	3.28	7.42
No. 4	60.3	0.11	59.3	20.2	13.1	0.05	0.68	0.18	2.62
No. 5	44.6	0.11	48.9	9.26	24.0	0.20	0.65	3.78	5.28

成分 / 試料名	CaO	MgO	Cr_2O_3	K_2O	Na_2O	V	Cu	C	C.W
No. 1	3.18	0.90	0.02	2.37	1.50	0.007	0.027	0.088	0.36
No. 2	0.83	0.26	0.01	0.35	0.81	0.010	0.014	0.78	1.28
No. 3	2.43	0.73	0.01	1.33	0.86	0.035	0.012	0.11	1.24
No. 4	0.72	0.14	0.01	0.31	0.38	0.016	0.004	0.11	1.66
No. 5	2.54	0.77	0.01	1.00	0.77	0.065	0.010	0.65	0.55

【分析方法】　ＪＩＳ法に準じ、以下の方法とした。

T.Fe：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法

M.Fe：臭素・メタノール分解－EDTA滴定法

FeO：二クロム酸カリウム滴定法

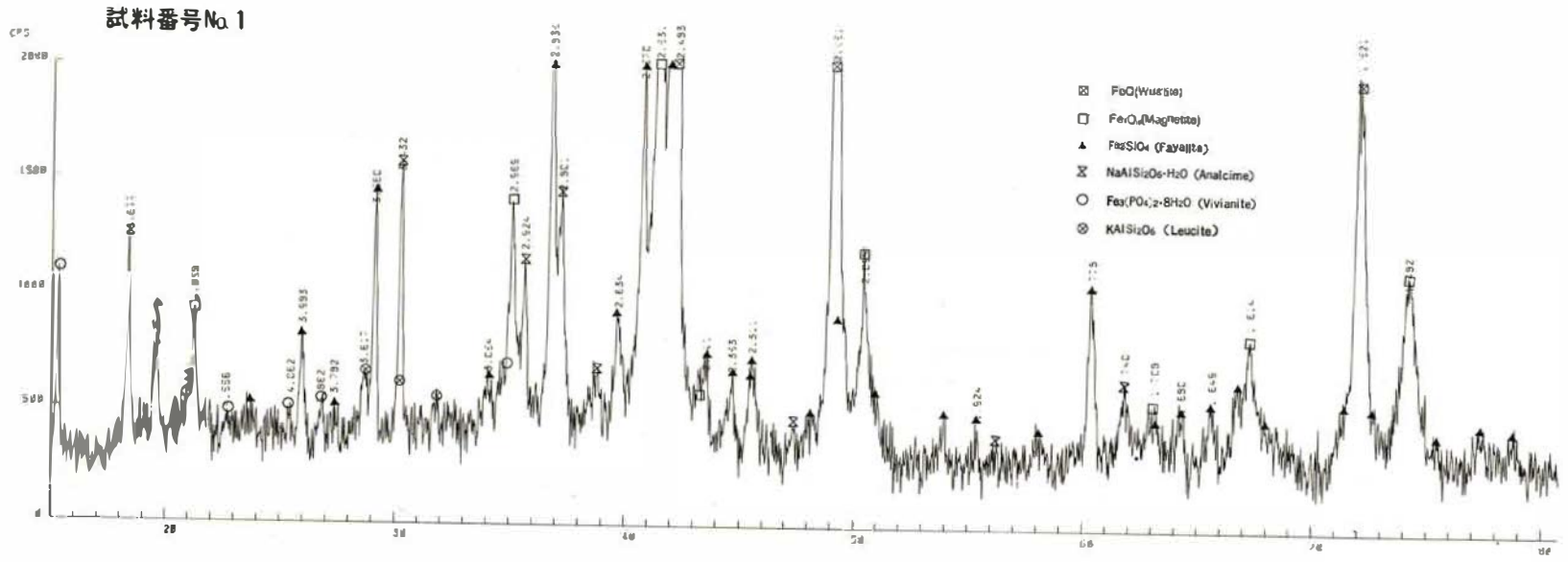
Fe_2O_3：計　　算

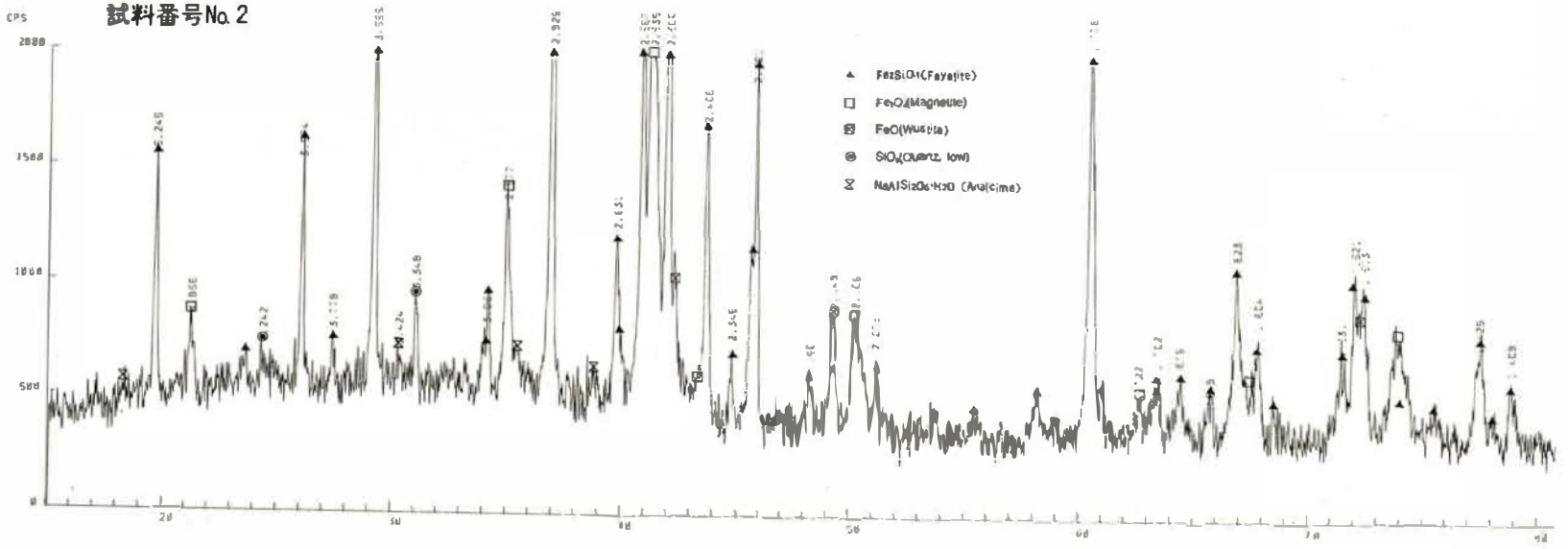
SiO_2, MnO, P_2O_5, TiO_2, Al_2O_3, CaO, MgO, Cr_2O_3：ガラスビード蛍光X線分析法

K_2O, Na_2O, V, Cu：原子吸光法

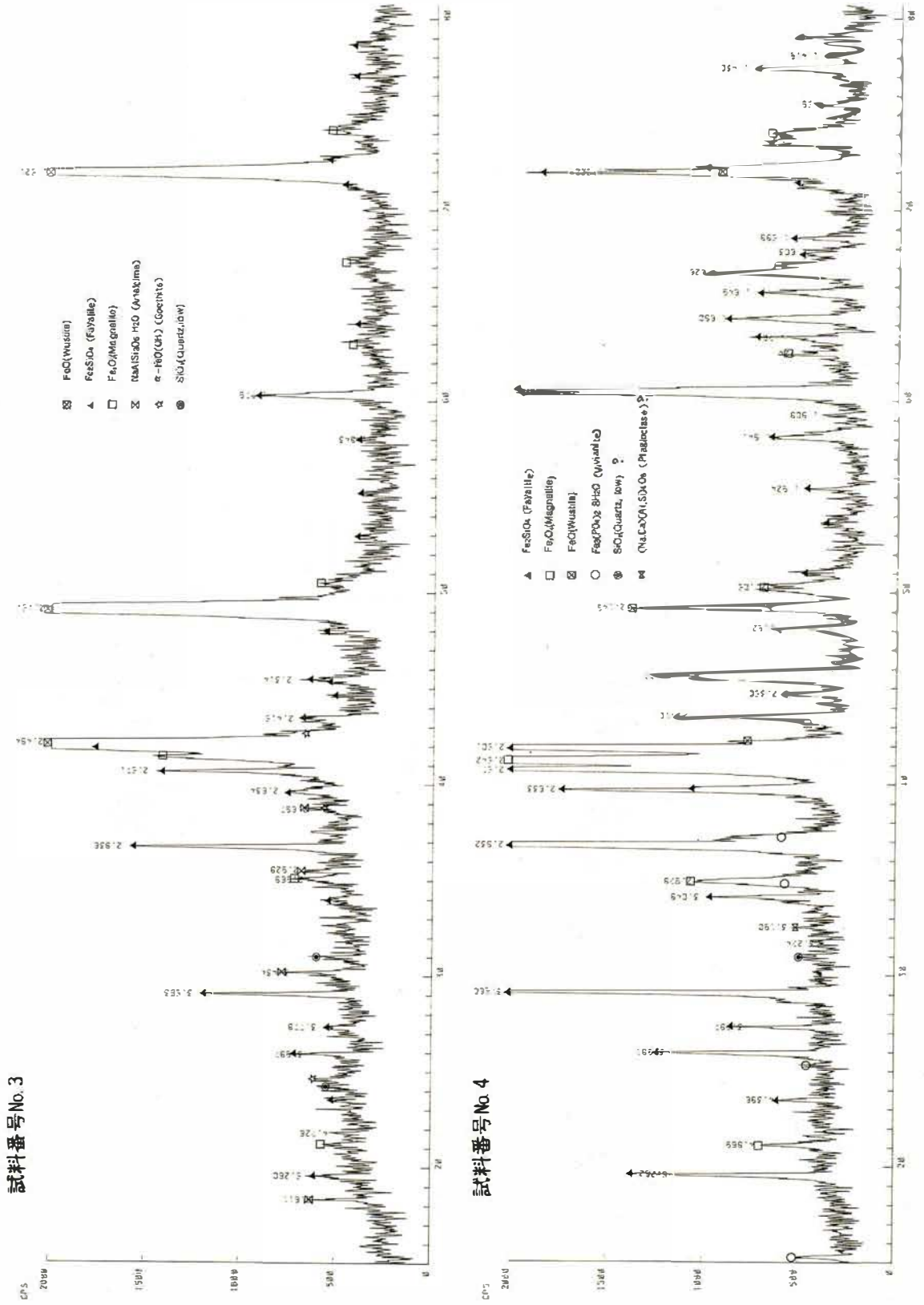
C：燃焼－赤外線吸収法

C.W：カールフィッシャー法

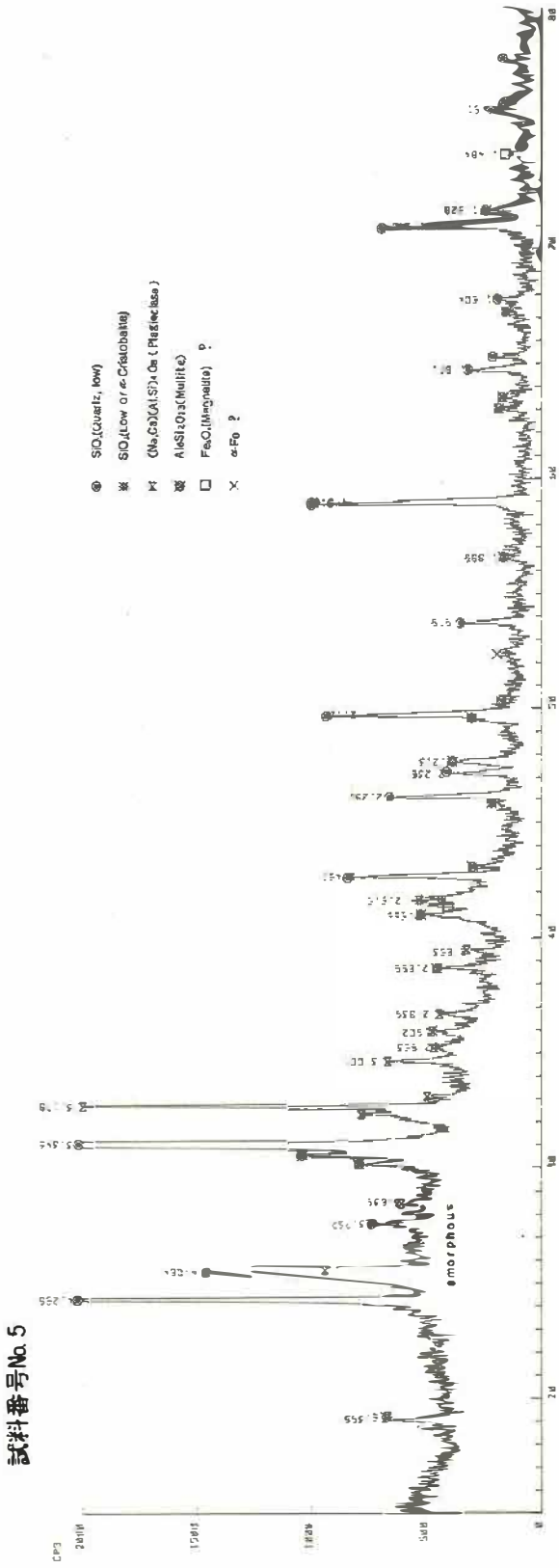




鉄;溶成分X線回折結果グラフ(1)

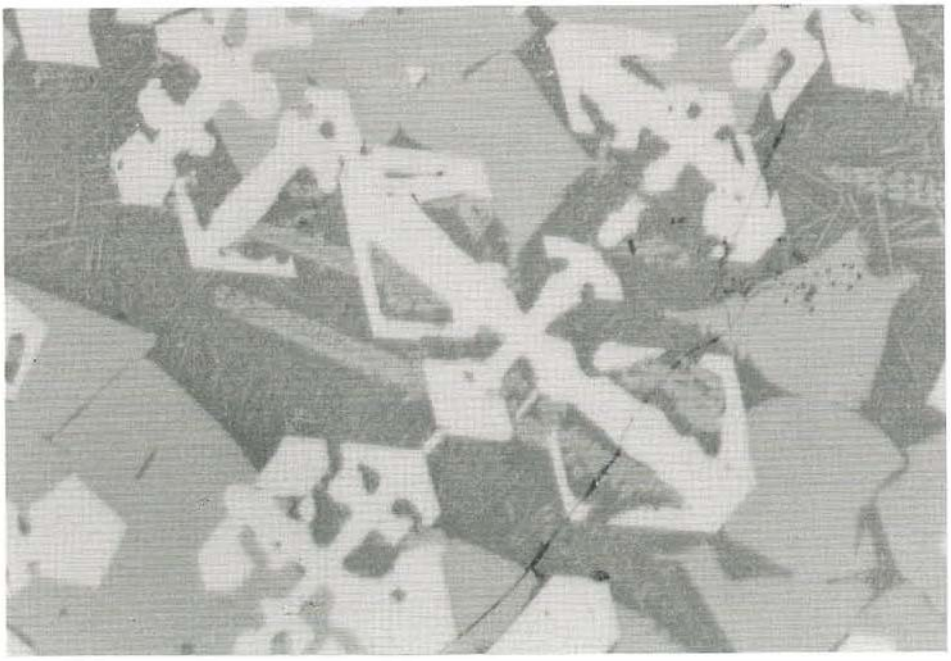


鉄滓成分X線回析結果グラフ(2)



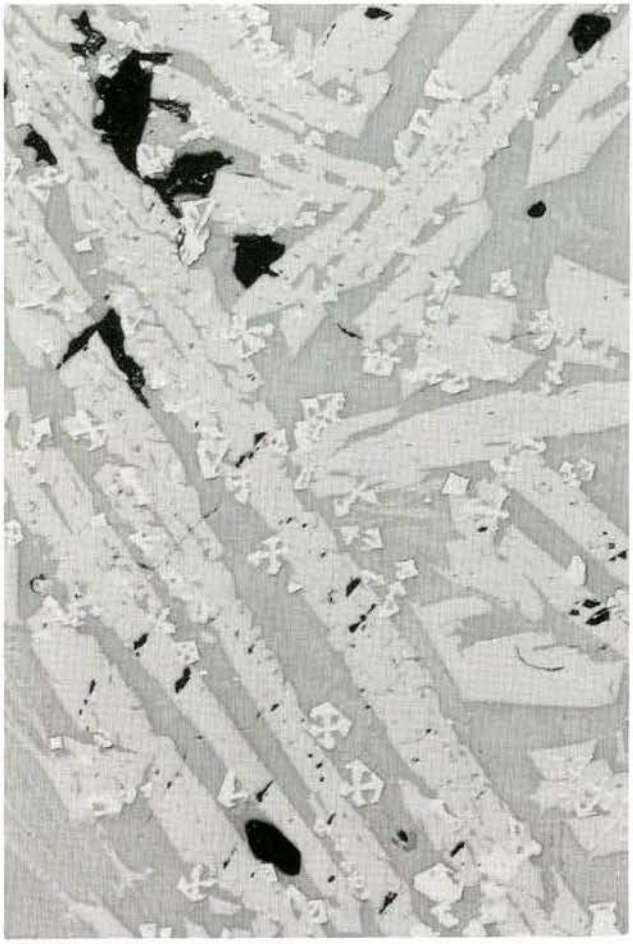
鉄滓成分X線回析結果グラフ(3)

No.1 ×100

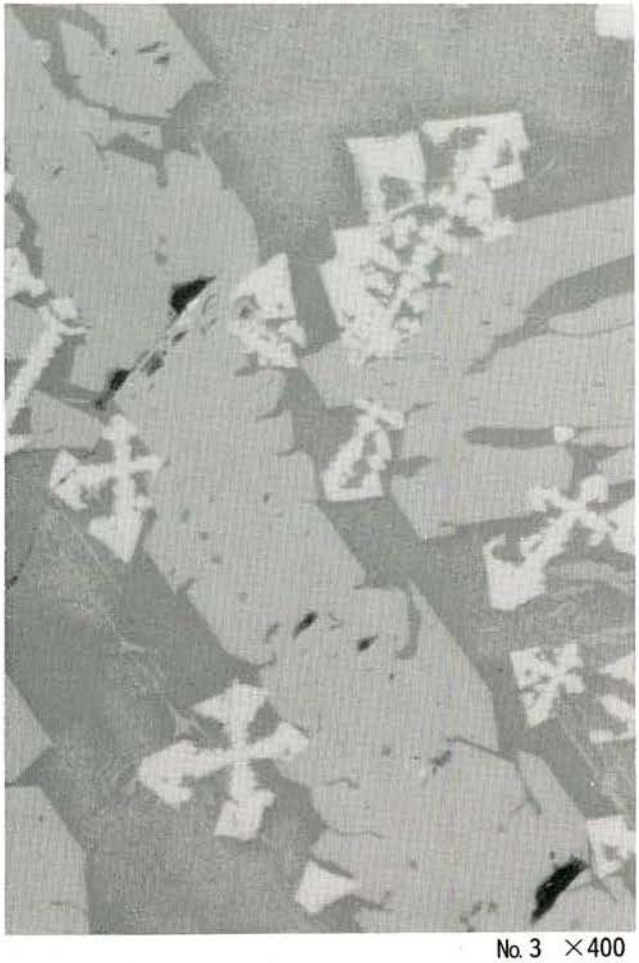


No.1 ×400

鉄滓組織顕微鏡写真（1）

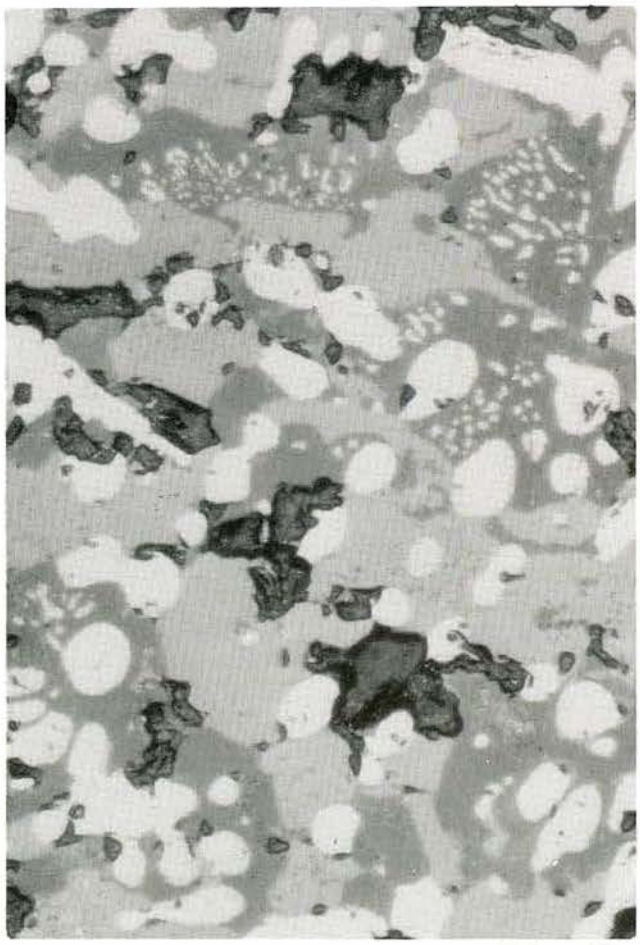


No. 3　×100



No. 3　×400

No. 2　×100

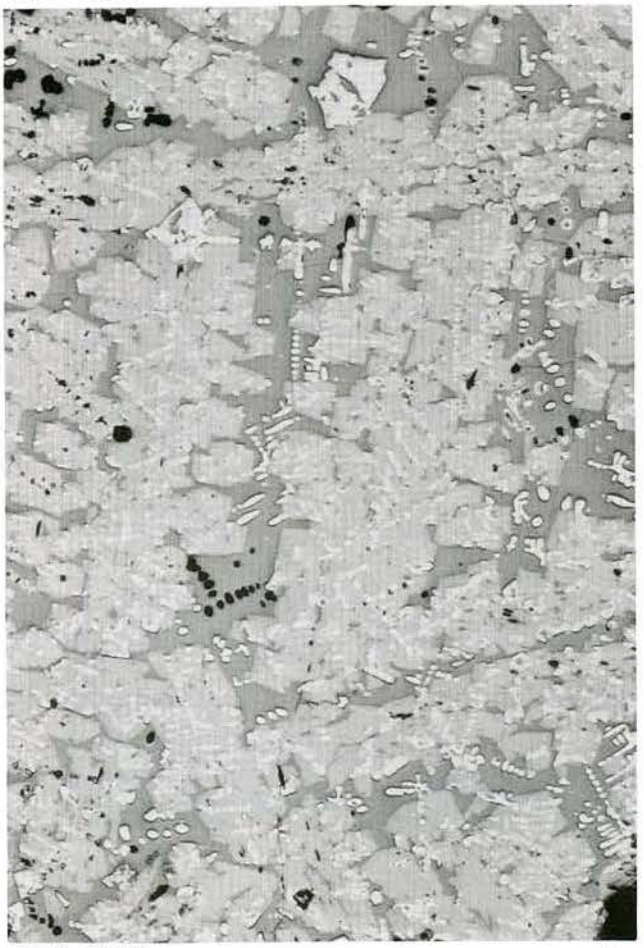


No. 2　×400

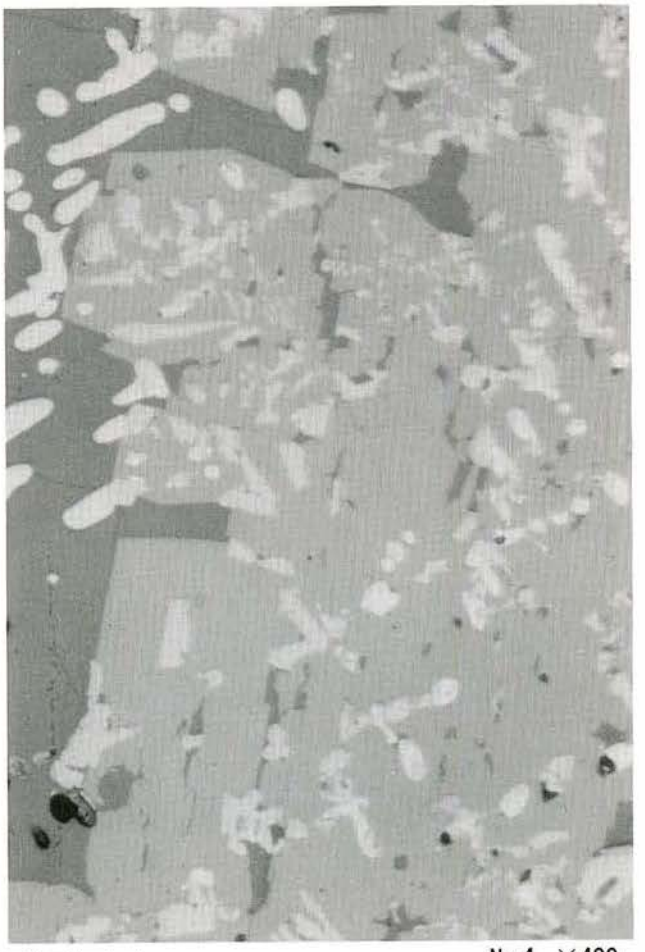
鉄滓顕微鏡写真（2）

No. 5 ×100

No. 5 ×400



No. 4 ×100

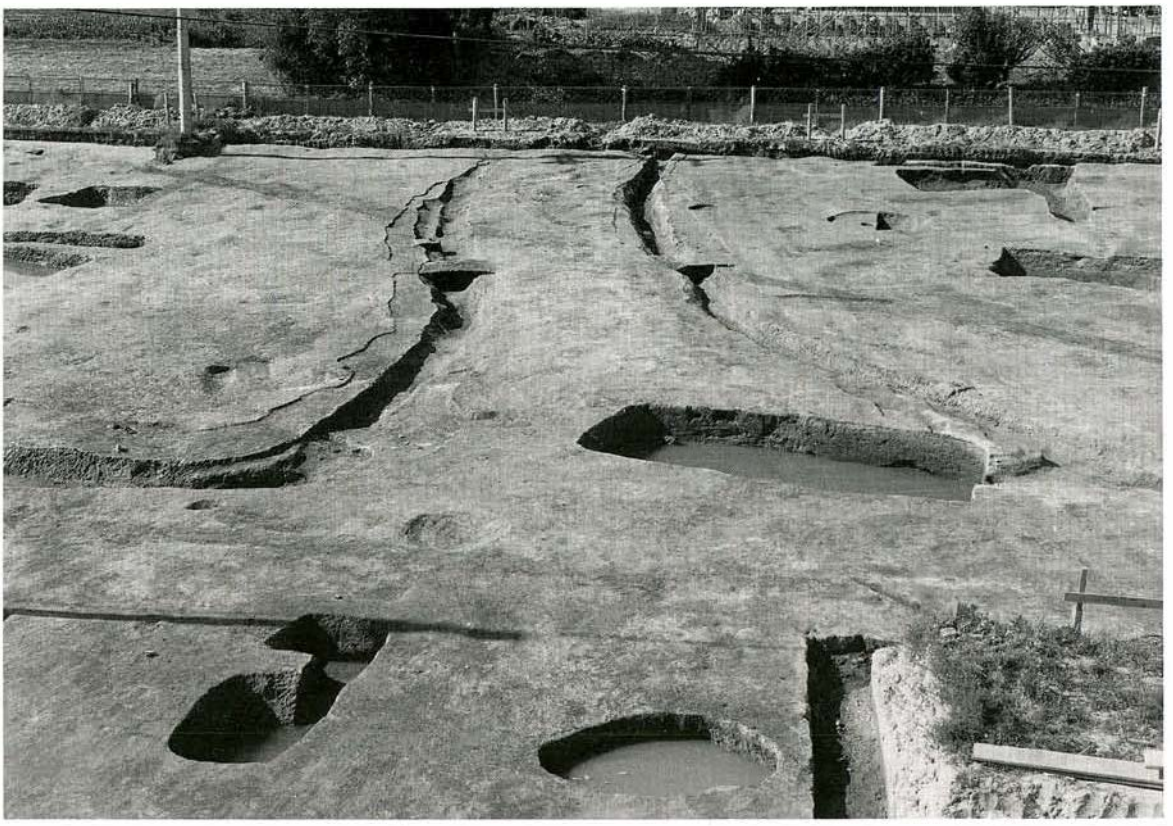


No. 4 ×400

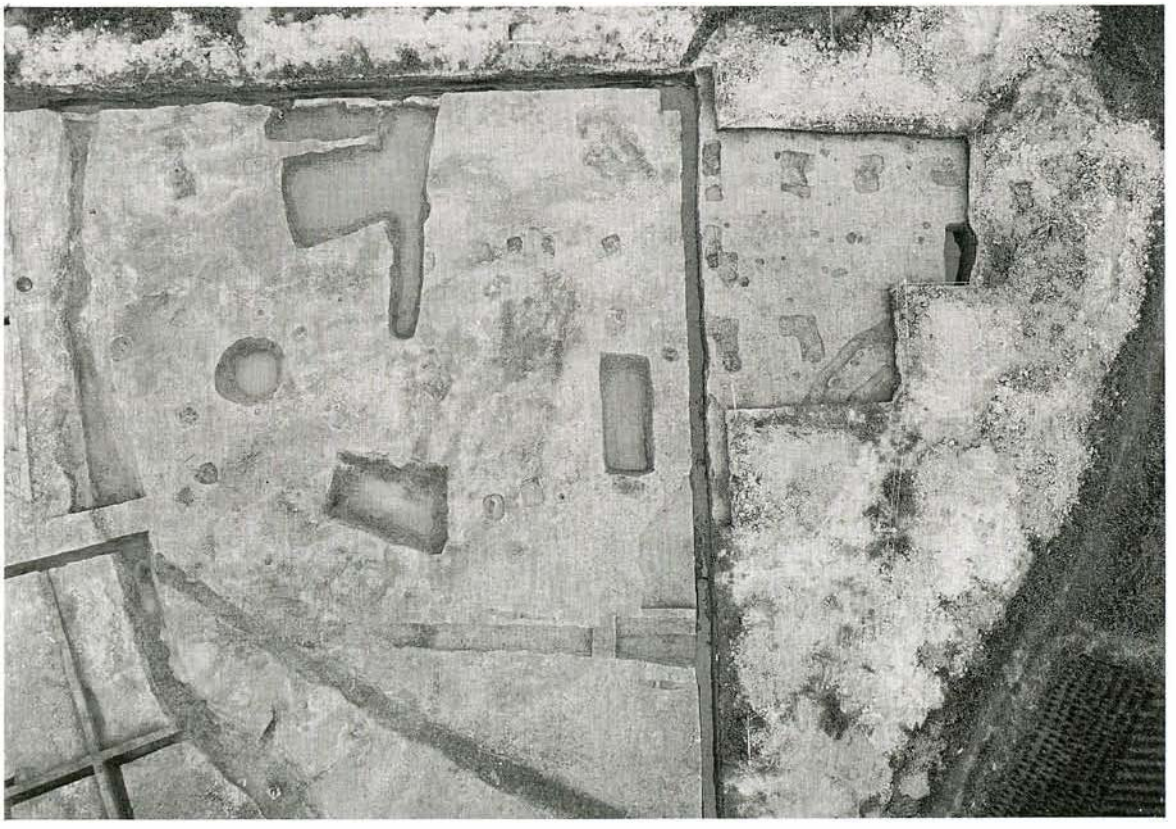
鉄滓組織顕微鏡写真（3）

西区　SX382道路跡全景（東より）

写真図版１　　東区　全景空中写真（東より）

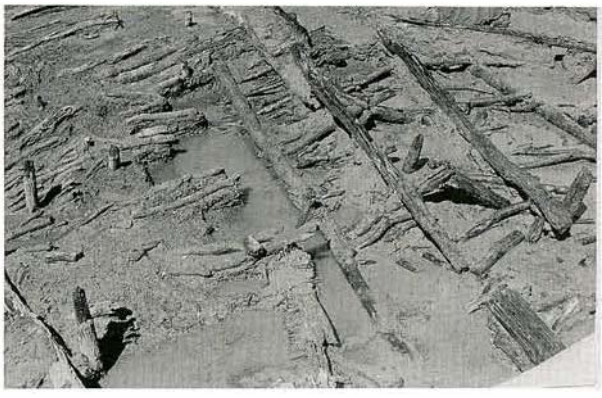


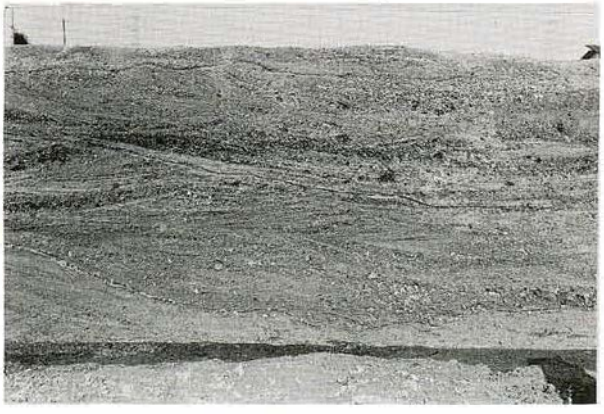
東区　SX468南北道路跡(南より)



写真図版2　　東区　SB388～391掘立柱建物跡

SX469古墳時代木組み遺構(南東より)





写真図版 3

SX469古墳時代木組み遺構細部

土層断面

SX469木組み遺構
ヨシの茎検出状況

同　上

同　上

写真図版4

SE392A ・B井戸跡

B井戸側細部(東より)

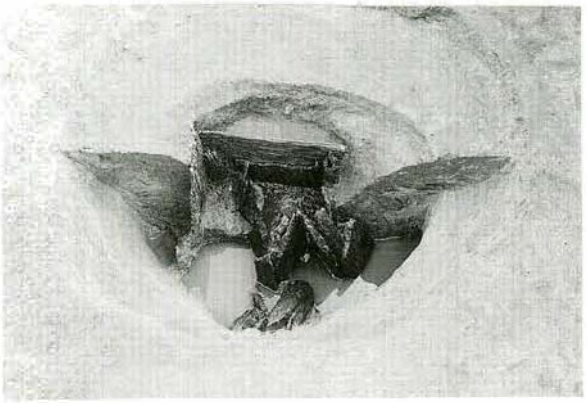
B井戸側細部(南より)

B井戸側細部(東より)

A掘り方底面遺物出土状況

写真図版5

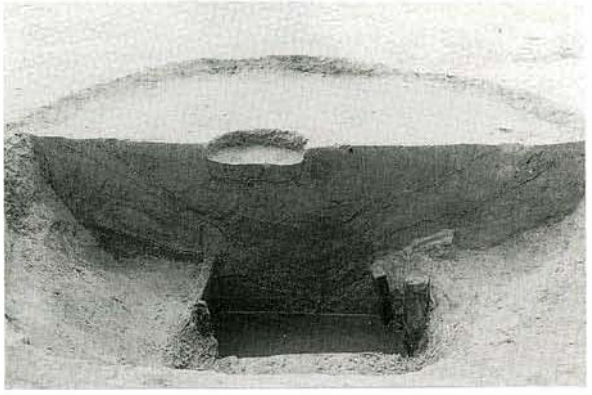
SE392A ・B井戸跡



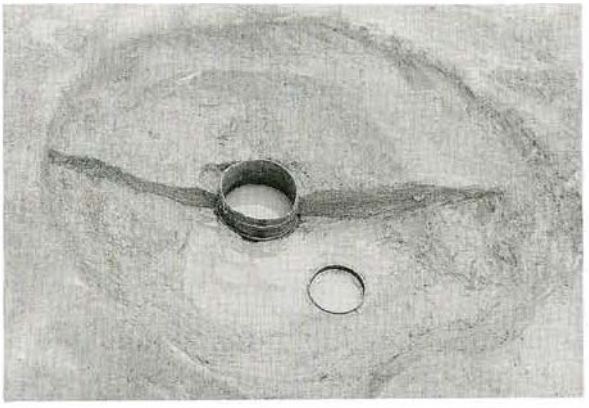
SE393井戸跡(西より)

SE393井戸跡曲物検出状況

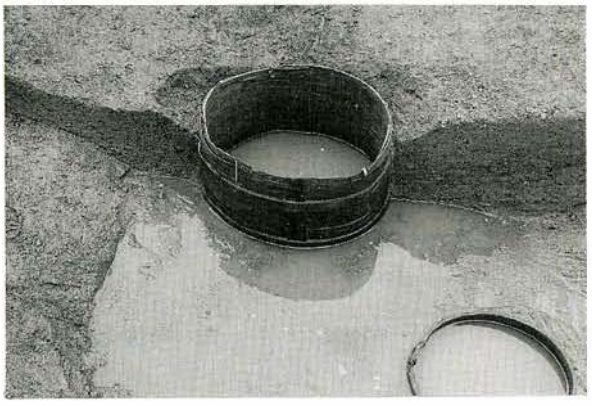
SE394井戸跡(東より)



SE394井戸跡土層堆積状況(東より)



SE395B井戸跡(南より)



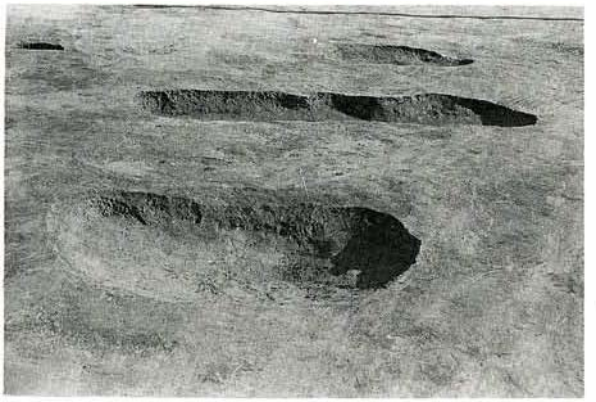
SE395B井戸跡曲物検出状況

SE395A井戸跡

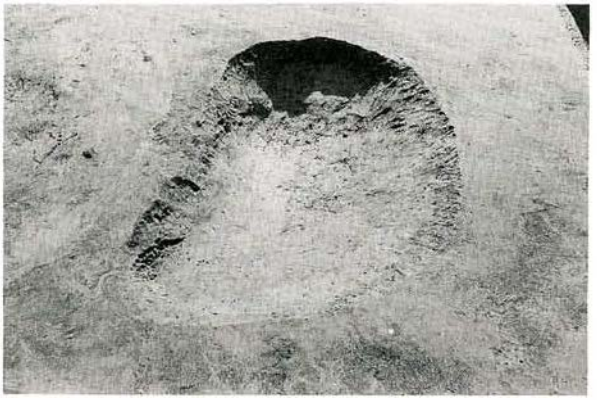
SE395A井戸跡曲物検出状況

写真図版6

SK470土坑(南より)



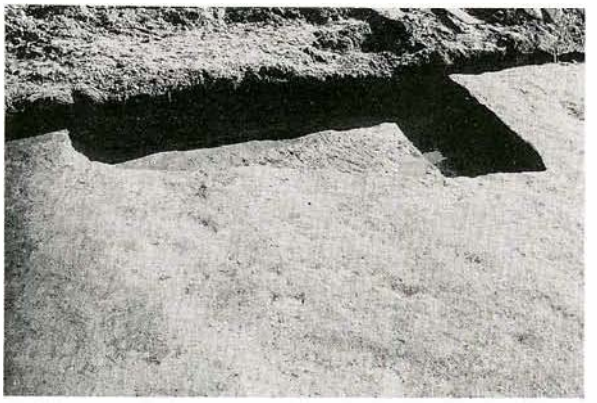
SK435～437土坑(西より)



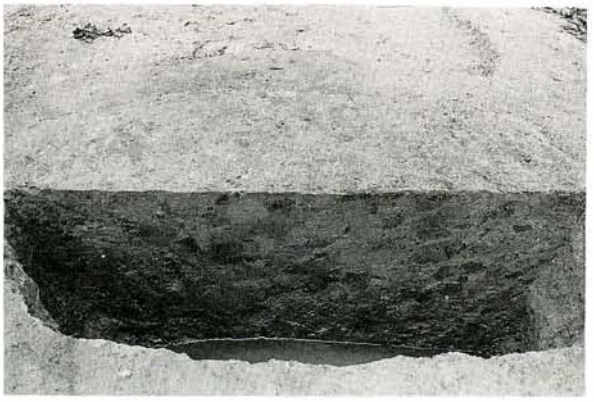
SK437土坑(南より)

SK438土坑(南より)

SK440土坑(南より)



SK441土坑(西より)



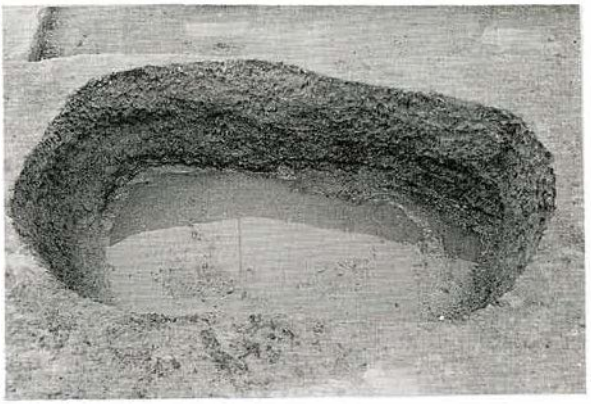
SK442土坑土層堆積状況

SK443土坑(南より)

写真図版7

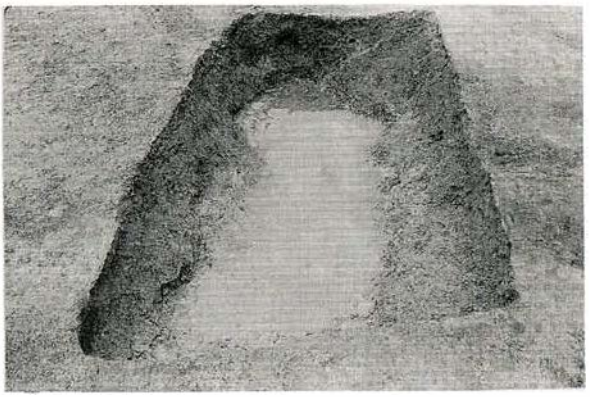
SK427土坑(南より)

SK428土坑(東より)



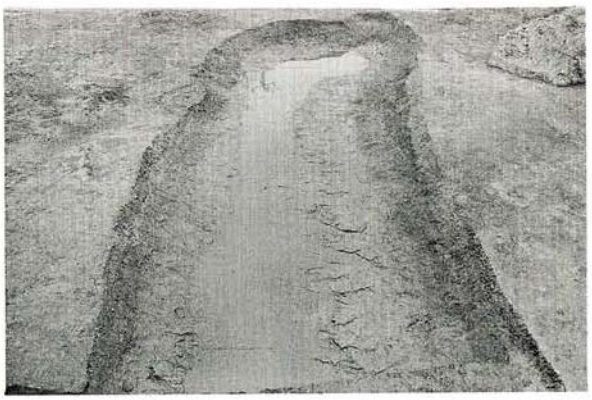
SK450土坑(西より)

SK444土坑(東より)

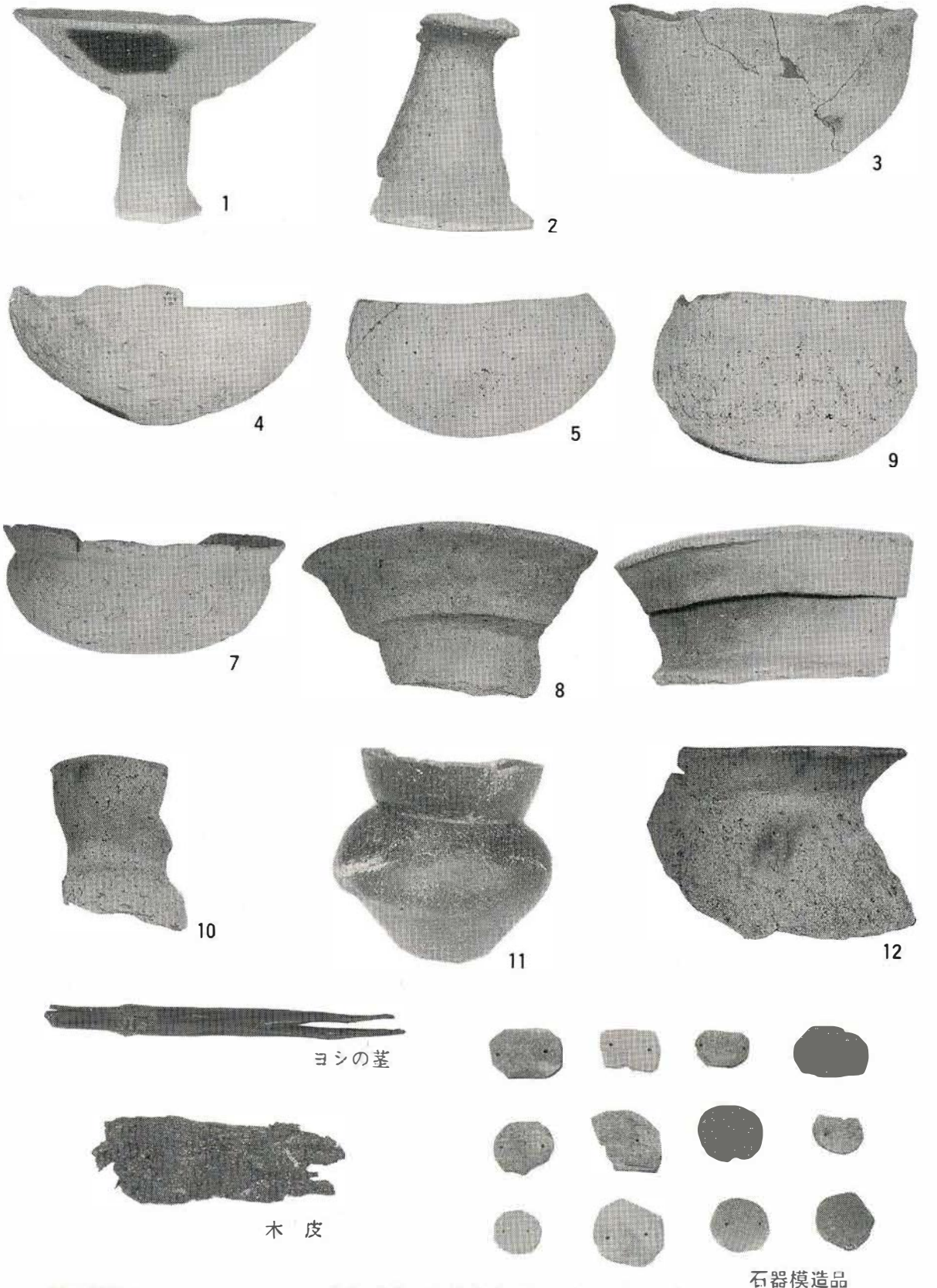


SK455土坑(東より)

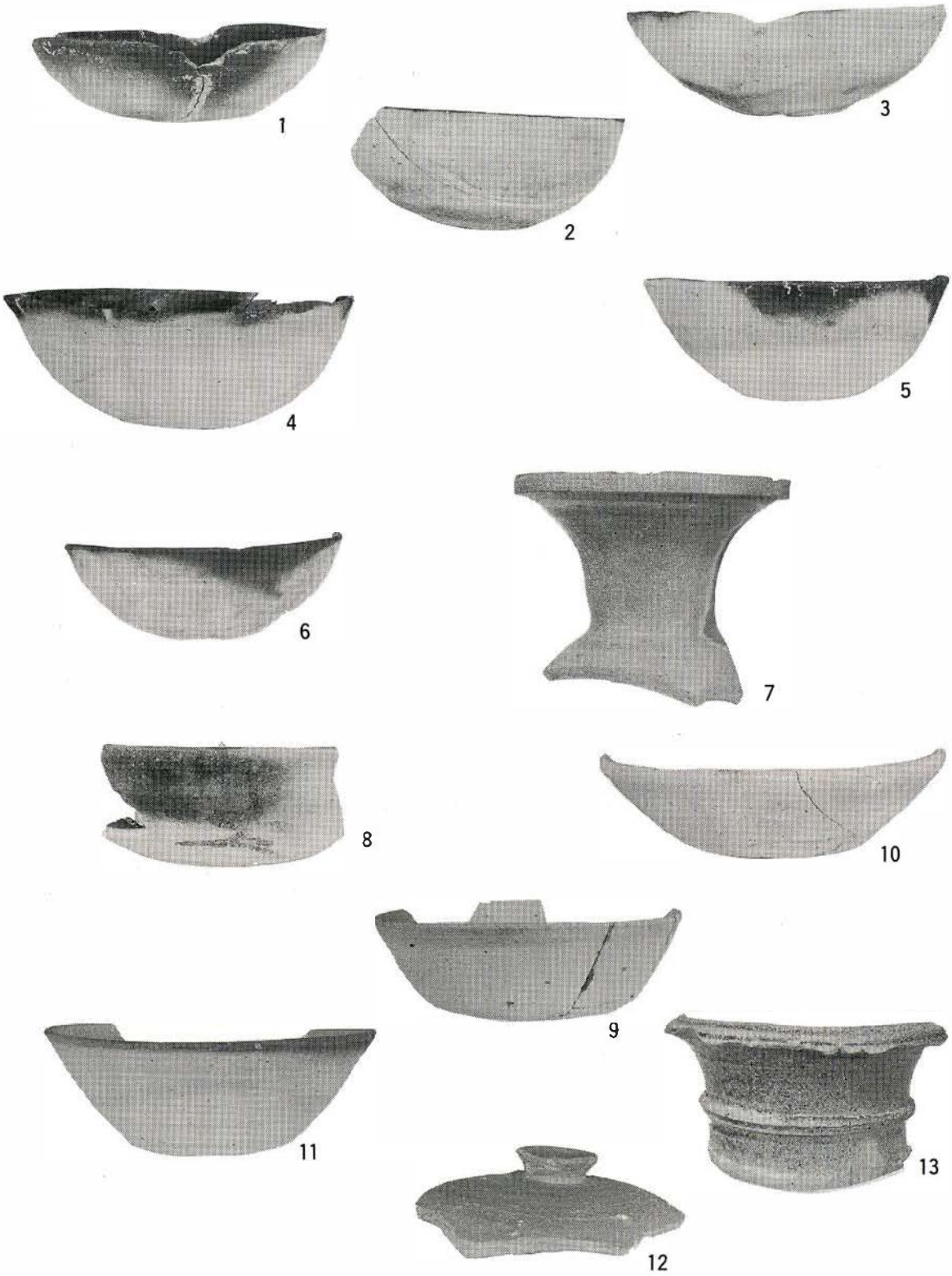
SK432土坑(南より)



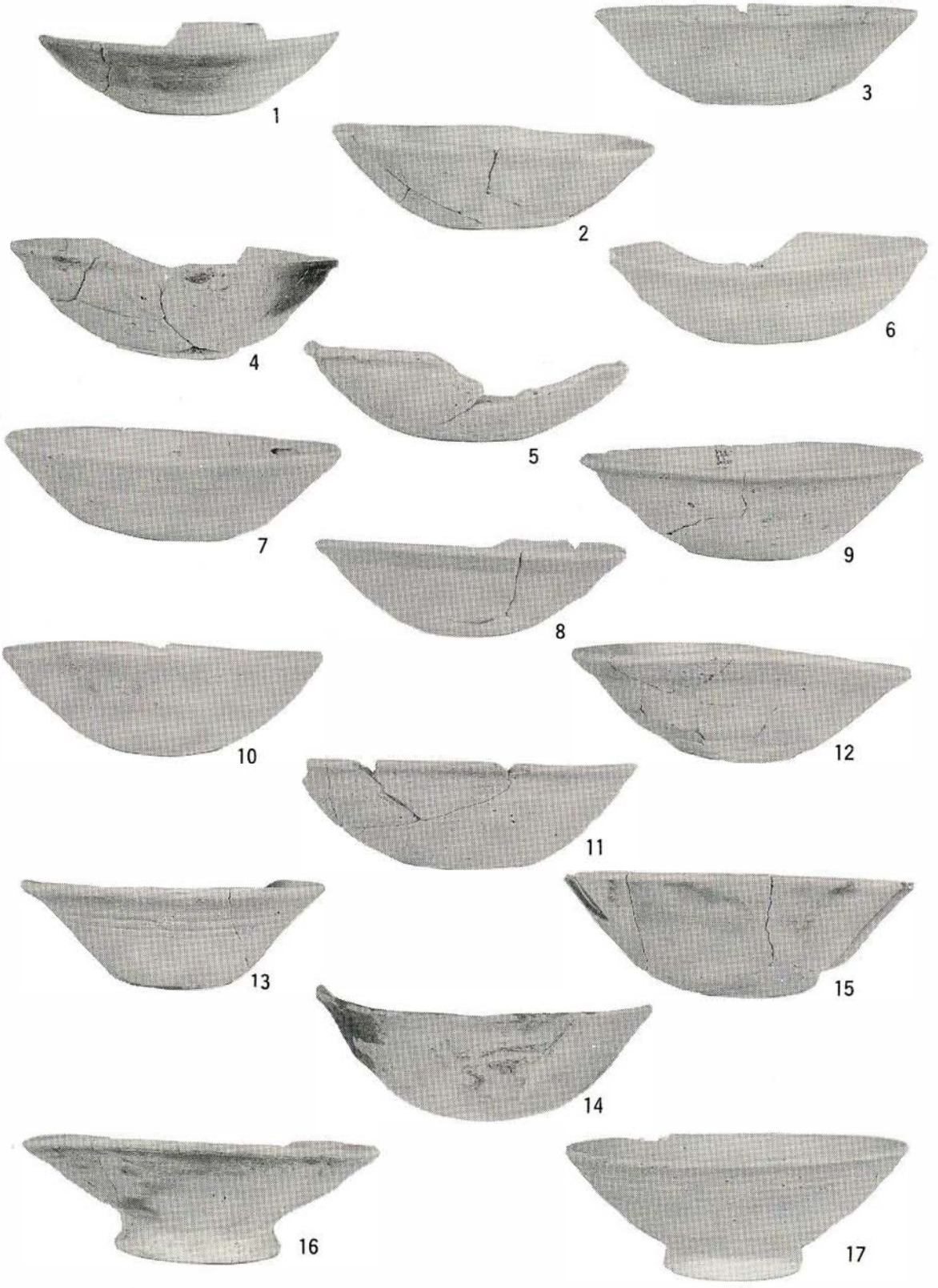
SD467溝跡(南より)



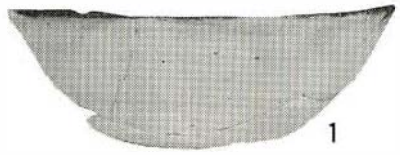
写真図版 9　　**古墳時代の遺物（土師器・石製模造品等）**



写真図版10　　道路側溝跡出土遺物(土師器・須恵器)

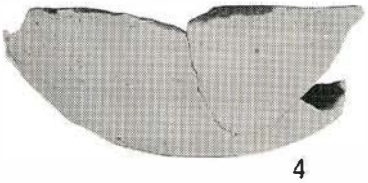


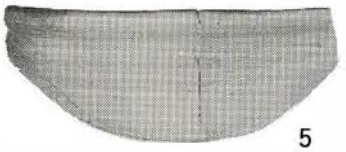
写真図版11　　道路側溝跡出土遺物(赤焼き土器)

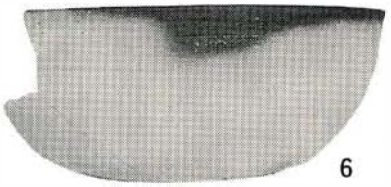

1

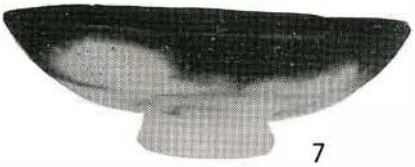
2

3

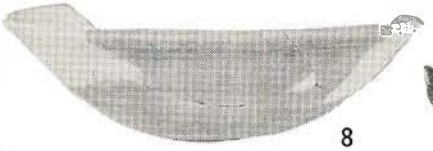

4

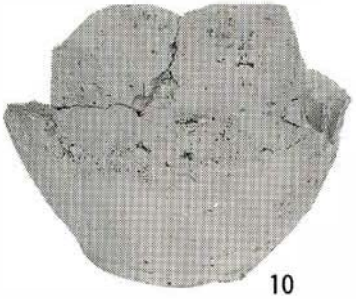

5

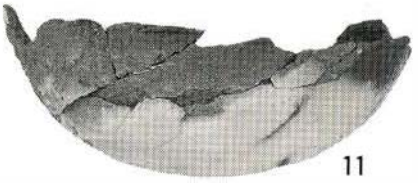

6


7

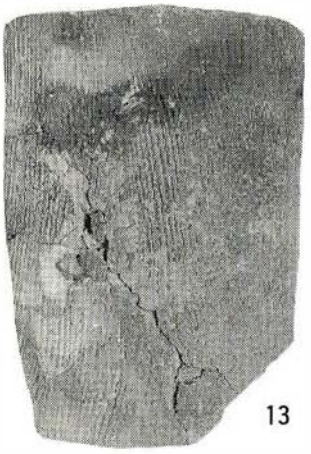
9


8

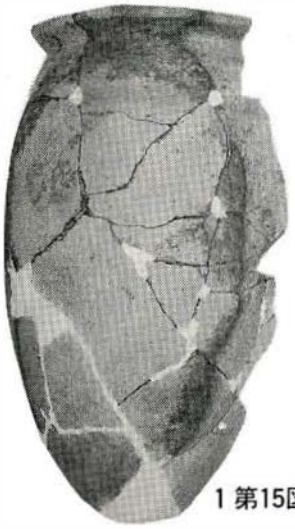

10


11

12


13

写真図版12　　SE392～395井戸跡出土遺物



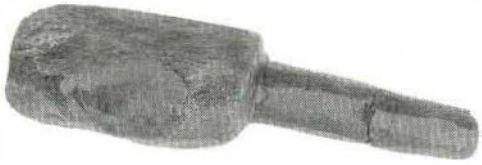
1 第15図 9

2 第15図10

3 第 9 図 5

5 第15図 7

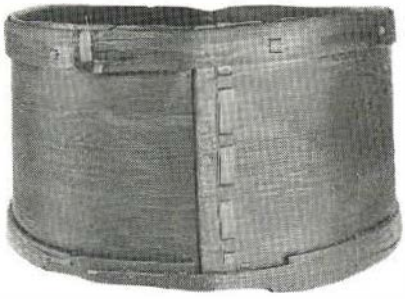
4 第15図 8



6 第33図16

7 第22図 2

9 第22図 3



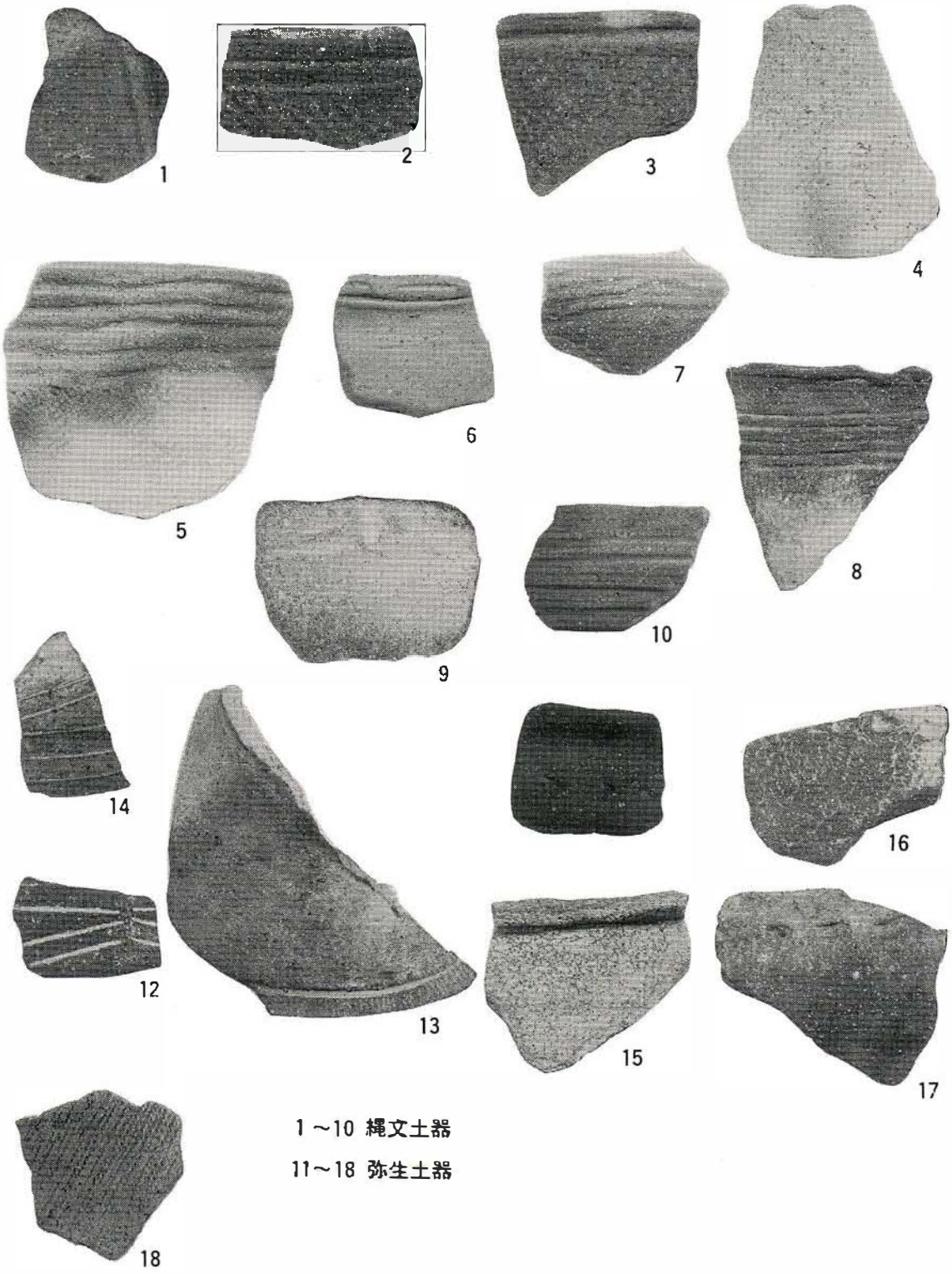
8 第22図 1

10第22図4

11第 4 図 1

写真図版13

木製品他



1～10 縄文土器

11～18 弥生土器

写真図版14　　縄文・弥生土器

1 第22図 1

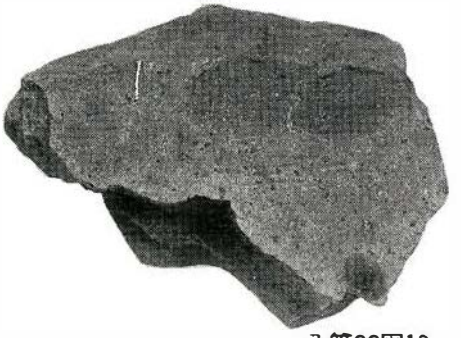
2 第22図 3

3 第22図 5

4 第22図 8

5 第22図 6

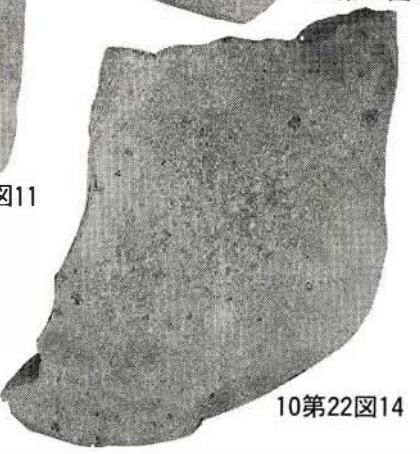
6 第22図 7



7 第22図10

8 第22図11

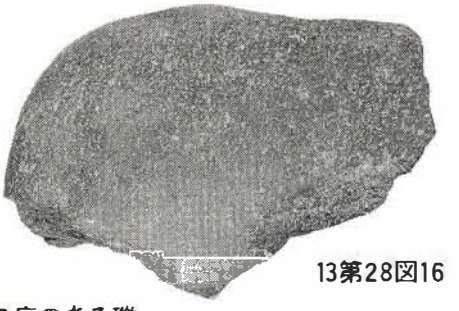
9 第22図 3



10第22図14

11第28図15

12第22図13



13第28図16

写真図版15　　砥石・使用痕・加工痕のある礫

多賀城市文化財調査報告書第22集

山　王　遺　跡

－第8次発掘調査報告書－

平成2年3月31日 発行

編集
発行　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電　話（022）368－0134

印刷　渡　辺　印　刷
塩釜市旭町17番13号
電　話（022）364－3161